佐賀県文化財調査報告書第132集

吉野ケ里遺跡

平成２年度～７年度の発掘調査の概要

1997年3月

佐賀県教育委員会

吉野ケ里遺跡

1997年3月

佐賀県教育委員会

序

吉野ケ里遺跡の発掘調査は、工業団地計画に伴い昭和61年５月から実施しましたが、国内最大の環壕集落や墳丘墓の発掘などにより、平成元年２月以来大いに注目されてきました。その後の遺跡を取り巻く状況は平成元年３月の工業団地計画の中止、翌２年と３年の史跡・特別史跡としての指定、４年の国営公園化の閣議決定と急速な変化を遂げました。現在は国営・県営の吉野ケ里歴史公園の早期開園をめざし整備工事も進展しています。

このような状況の中で、当委員会としては平成元年度から文化庁の補助を受け、遺跡の範囲確認や内容解明のための確認調査を継続しています。この間、南墳丘墓や青銅器鋳造遺構、北内郭跡の発見や北墳丘墓からの新たな甕棺墓と銅剣の発見など多くの成果をあげることができました。これらの調査成果は歴史公園整備の重要な基礎資料として最大限に活用しています。

平成元年度までの調査の概要については、これまで数冊の調査概要報告書により公表していますが、本書は平成２年度から７年度の６年間にわたる調査についてその概要を記したものです。この発掘調査によって出土した資料や調査記録の整理・分析を進めているところですが、発掘調査の進展と合わせ、吉野ケ里遺跡の全容が明らかになるには、なお多くの歳月を要します。

本書を学術資料としてお役立ていただき、吉野ケ里遺跡の今後の調査研究あるいは保存活用に関して、適切なご指導、ご助言を与えてくださいますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査にあたり適切なご指導をいただいた文化庁はじめ諸先生方、ならびに調査に協力いただいた地元神埼町・三田川町・東脊振村当局、地権者の方々、発掘に従事いただいた作業員の方々には衷心より感謝申し上げます。

平成９年３月31日

佐賀県教育委員会

教育長　川久保　善　明

例　言

1．本書は、佐賀県教育委員会が国庫補助事業として平成元年度から実施している吉野ケ里遺跡発掘調査事業のうち、平成２年度から平成７年度に実施した発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、佐賀県教育委員会が主体となり、三田川町・神埼町両教育委員会の協力を得て実施した。調査にあたっては文化庁、大学、県文化財保護審議委員、その他各種機関の専門家の指導を得た。

3．出土遺構の実測図作成は業者に委託したほか、調査員・調査補助員・作業員がおこなった。また、出土遺物の実測図作成は調査員・作業員がおこなった。

4．出土した遺構・遺物の写真撮影は調査員がおこなったが、遺構の空中写真については業者に委託した。

5．出土遺物の整理や調査記録類の整理は、吉野ケ里遺跡発掘調査事務所でおこなった。

6．Ⅱ．位置と環境で用いた吉野ケ里遺跡周辺遺跡分布図（Fig.１）は、国土地理院が発行した25,000分の１の地形図（『久留米西部』『中原』『広滝』『佐賀北部』）を使用した。

7．本書の編集は調査員の協力を得て、七田がおこなった。執筆は、Ⅴ．おわりにを高島忠平が、Ⅳ．１．(2)の①青銅器鋳造関連遺構を森田孝志がおこない、その他については平成８年度の調査員がおこなった。

8．出土遺物は、佐賀県教育委員会文化財課吉野ケ里遺跡班の吉野ケ里遺跡発掘調査事務所（〒842 神埼郡三田川町大字田手2721番地　☎0952-52-9735）に保管している。

凡　例

1．遺構については、調査地区ごとに一連番号を付し、その前に遺構の種別を示すアルファベット２文字の略号を記した。遺構の種別は以下のとおりである。

・ＳＡ…柵跡　・ＳＢ…掘立柱建物跡　・ＳＣ…箱式石棺墓　・ＳＤ…溝・壕跡
・ＳＥ…井戸跡　・ＳＨ…竪穴建物跡　・ＳＪ…甕棺墓　・ＳＫ…土壙
・ＳＰ…土壙墓・木棺墓　・ＳＴ…墳丘墓・古墳・周溝墓　・ＳＸ……不明遺構

なお、将来広範囲に発掘調査を計画している地区内の小規模な調査区においては、便宜上調査区毎の遺構番号を付したものもある。

2．これまでに発掘調査を実施した地区（アルファベット３文字は略号）は以下のとおりである。

・志波屋六の坪乙地区(SRO)　・志波屋六の坪乙地区(SRT)　・志波屋五の坪地区(SGT)
・志波屋四の坪地区(SYT)　・志波屋三の坪甲地区(SST)　・志波屋三の坪乙地区(SSO)
・吉野ケ里丘陵地区(YGK)　・吉野ケ里地区(SYT)　・田手二本黒木地区(TDN)
・田手一本黒木地区(TDI)

3．遺構の法量はｍ単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。

4．遺構分布図や遺構実測図の北方位や座標値、本文中の方位の表現は、すべて国土座標（第Ⅱ系）による。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに…… 1

Ⅱ．位置と環境…… 3

Ⅲ．調査の方法…… 6

Ⅳ．調査の成果…… 8
1．調査の年度別の概要…… 8
⑴平成元年度の調査…… 8
⑵平成２年度の調査…… 8
⑶平成３年度の調査…… 8
⑷平成４年度の調査…… 8
⑸平成５年度の調査…… 9
⑹平成６年度の調査…… 9
⑺平成７年度の調査…… 9
2．調査成果…… 14
(1)環壕集落の範囲確認調査…… 14
①田手川東岸の県道吉田・鶴線周辺 14
②田手川東岸南部…… 14
③田手川西岸の南内郭跡南東地区… 14
④段丘南端部…… 17
(2)その他の調査…… 17
①青銅器鋳造関連遺構…… 17
②南墳丘墓…… 18
③南内郭南方・南東方…… 23
④北墳丘墓周辺…… 25
⑤南部外壕出入口周辺…… 28

2．北墳丘墓…… 29
(1)遺構…… 29
①甕棺墓の分布…… 29
②甕棺墓…… 29
③各甕棺墓の概要…… 31
(2)遺物…… 34
①甕棺…… 34
②銅剣…… 40
③その他の遺物…… 42
3．北内郭跡…… 44
(1)弥生時代の遺構…… 46
①竪穴建物跡…… 47
②掘立柱建物跡…… 49
③環壕・壕跡…… 50
④その他の遺構…… 54
(2)弥生時代の遺物…… 54
①土器…… 54
②その他の遺物…… 67

4．妙法寺跡…… 68
(1)遺構…… 70
①溝跡…… 70
②掘立柱建物跡…… 71
③柵跡…… 72
④土壙…… 72
⑤井戸跡…… 73
(2)遺物…… 73
①土器…… 73
②陶磁器…… 79
③瓦…… 80
④その他の遺物…… 80

Ⅴ．おわりに…… 82
1．吉野ケ里弥生集落の変遷…… 82
2．弥生時代後期の吉野ケ里集落…… 87
3．吉野ケ里遺跡の性格と意義…… 90

挿　図　目　次

Fig. 1　吉野ケ里遺跡周辺遺跡分布図……4
Fig. 2　吉野ケ里遺跡発掘調査調査区割り図……15
Fig. 3　吉野ケ里遺跡発掘調査調査区位置図……16
Fig. 4　吉野ケ里遺跡南墳丘墓・青銅器鋳造関連遺構実測図……19
Fig. 5　吉野ケ里遺跡青銅器鋳造関連遺構出土弥生土器実測図……20
Fig. 6　吉野ケ里遺跡青銅器鋳造関連遺構出土遺物実測図……21
Fig. 7　吉野ケ里遺跡南内郭南方の調査区遺構分布図……22
Fig. 8　吉野ケ里遺跡南内郭南東方の調査区遺構分布図……24
Fig. 9　吉野ケ里遺跡北墳丘墓南と北東の弥生時代墓地遺構分布図……26
Fig.10　吉野ケ里遺跡南部の外環壕出入口跡遺構分布図・銅鏃実測図……28
Fig.11　吉野ケ里遺跡北墳丘墓甕棺墓分布図……30
Fig.12　吉野ケ里遺跡北墳丘墓出土甕棺実測図(1)……35
Fig.13　吉野ケ里遺跡北墳丘墓出土甕棺実測図(2)……37
Fig.14　吉野ケ里遺跡北墳丘墓出土甕棺実測図(3)……38
Fig.15　吉野ケ里遺跡北墳丘墓出土遺物実測図……41
Fig.16　吉野ケ里遺跡北内郭跡遺構分布図……45
Fig.17　吉野ケ里遺跡大型掘立柱建物跡・柱穴出土土器実測図……48
Fig.18　吉野ケ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(1)……55
Fig.19　吉野ケ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(2)……56
Fig.20　吉野ケ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(3)……57
Fig.21　吉野ケ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(4)……58
Fig.22　吉野ケ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(5)……59
Fig.23　吉野ケ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(1)……60
Fig.24　吉野ケ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(2)……61
Fig.25　吉野ケ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(3)……62
Fig.26　吉野ケ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(4)……63
Fig.27　吉野ケ里遺跡北内郭跡出土鉄器実測図……66
Fig.28　吉野ケ里遺跡北内郭跡出土中広銅戈実測図……67
Fig.29　吉野ケ里遺跡妙法寺跡遺構分布図……69
Fig.30　吉野ケ里遺跡妙法寺跡出土土器・陶磁器実測図(1)……74
Fig.31　吉野ケ里遺跡妙法寺跡出土土器・陶磁器実測図(2)……75
Fig.32　吉野ケ里遺跡妙法寺跡出土土器・陶磁器実測図(3)……77
Fig.33　吉野ケ里遺跡妙法寺跡出土土器とその他の遺物実測図……78
Fig.34　吉野ケ里遺跡弥生時代の集落・墓地変遷概要図……85

表　目　次

Tab. 1　吉野ケ里遺跡跡発掘調査調査区一覧表……　10
Tab. 2　吉野ケ里遺跡北墳丘墓甕棺墓一覧表……　44
Tab. 3　吉野ケ里遺跡北内郭跡竪穴建物跡一覧表……　51
Tab. 4　吉野ケ里遺跡北内郭跡掘立柱建物跡一覧表……　53

図　版　目　次

PL. 1　吉野ケ里遺跡全景
PL. 2　青銅器鋳造関連遺構全景
PL. 3　南墳丘墓跡（仮称）全景
PL. 4　南墳丘墓跡（仮称）盛土の状況・土壙墓状遺構
PL. 5　南内郭南方・東南方調査区全景(1)
PL. 6　南内郭南方・東南方調査区全景(2)
PL. 7　南内郭南方・東南方調査区全景(3)
PL. 8　南内郭南方・東南方調査区全景(4)
PL. 9　外環壕の出入口跡
PL. 10　北墳丘墓跡発掘状況
PL. 11　北墳丘墓跡甕棺墓(1)
PL. 12　北墳丘墓跡甕棺墓(2)
PL. 13　北墳丘墓跡出土銅剣・把頭飾
PL. 14　北内郭跡〈上が西〉
PL. 15　北墳丘墓跡出土銅剣
PL. 16　妙法寺跡発掘区全景

報告書抄録

ふりがな	よしのがりいせき　へいせいにねんどからへいせいしちねんどのはっくつちょうさのがいよう
書名	吉野ヶ里遺跡－平成２年度～７年度の発掘調査の概要－
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第　132集
編著者名	編者　七田忠昭、著者　高島忠平・平成８年度の調査員ほか
編集機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840　佐賀県佐賀市城内一丁目１－59　　TEL.0952－24－2111
発行年月日	1997（平成９）年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査対象面積 (確認調査)	調査原因
よしのがりいせき 吉野ヶ里遺跡 よしのがりきゅうりょうちく 吉野ヶ里丘陵地区 (Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ区)	さがけんかんざきぐん 佐賀県神埼郡 みたがわまちおおあざ 三田川町大字 たで 田手	413232	1001 2014 3013	33° 19′ 24″	130° 22′ 40″	19890401 ～	28,000m² (約200,000m²)	遺跡の内容の把握と、歴史公園建設に係る資料を得るため
たでにほんくろきちく 田手二本黒木地区 (Ⅱ区)		413232	1002 2015 3015	33° 19′ 12″	130° 22′ 32″	19860331		
たでいっぽんくろきちく 田手一本黒木地区 (Ⅰ・Ⅱ区)		413232	2017 5003	33° 19′ 6″	130° 22′ 36″			
よしのがりちく 吉野ヶ里地区 (Ⅴ区)	かんざきまちおおあざつる 神埼町大字鶴	413216	1031 2081 3079	33° 19′ 16″	130° 22′ 32″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉野ヶ里遺跡 吉野ヶ里丘陵地区	集落跡、墓地	弥生時代、古墳時代、中世	竪穴建物跡、堀立建物跡、環壕跡、甕棺墓、古墳など	銅剣、青銅製肥頭飾、石製肥頭飾、銅戈、銅鏡、絹布片、鉄製農工具、武器	北墳丘墓、細形銅剣、中細形銅剣、北内郭跡、中広形銅戈
吉野ヶ里地区	集落跡・生産跡？	弥生時代	堀立柱建物跡、竪穴住居・水田の水路跡？		高床倉庫跡群
田手二本黒木地区	集落跡	弥生時代	竪穴建物跡、堀立柱建物跡、青銅器鋳造遺構・環壕跡、門跡など	青銅器鋳型、鉄製農工具、銅鏃など	青銅器鋳造関連遺構、銅剣・銅矛鋳型、鉱滓、銅鏃
田手一本黒木地区	集落跡・寺院跡	弥生時代、中世	溝跡、堀立柱建物跡、柵跡、井戸跡、土壙など	瓦、輸入陶磁器、国産陶器、銅銭など	妙法寺跡、木製品

Ⅰ．はじめに

吉野ケ里遺跡は、佐賀県神埼郡の神埼町・三田川町・東脊振村にまたがる通称吉野ケ里丘陵上に存在する弥生時代から近世にいたるまでの大規模な遺跡である。

発掘調査は、神埼工業団地計画に伴う事前調査として1986（昭和61）年度から開始されたが、現地調査の最終段階である1989（平成元）年の２月下旬にほぼ全貌が明らかになった弥生時代後期の大規模な環壕集落跡や甕棺墓地跡などが全国的に注目された。その後弥生時代中期の大規模な墳丘墓が調査され、把頭飾付き有柄細形銅剣をはじめとする５本の細形銅剣や79個のガラス製管玉などが発見されたのを機に、同年６月の県議会で工業団地計画は北部を残して中止され、遺跡は保存されることになった。平成２年５月の史跡指定（約22ha）、翌年５月の特別史跡昇格を経て、平成４年10月には国営吉野ケ里歴史公園（約54ha）が閣議決定され、県営歴史公園（約63ha）とともに、現在整備工事が開始されている。

平成元年４月から文化庁の補助により遺跡の範囲確認調査や未調査地区の内容把握のための調査を継続して実施している。平成元年度・２年度の確認調査で弥生時代後期の環壕集落の範囲が約40haの弥生時代最大級の環壕集落跡であることが判明し、その後、段丘南部での南墳丘墓（仮称）や青銅器鋳造遺構の確認、北墳丘墓の再調査による新たな甕棺墓群と銅剣類の発掘、弥生時代後期の吉野ケ里集落の中心的な空間と考えられる北内郭跡の発掘など、重要な遺構や遺物の発見が相次ぎ、吉野ケ里遺跡のもつ内容がさらに明らかになってきつつある。また、北内郭跡周辺での古墳（横穴式石室）や、妙法寺跡と考えられる中世寺院跡や中世城郭に伴う壕跡などの遺構・遺物も多く発掘されており、弥生時代以外の時期の内容についても明らかになってきつつある。

特に弥生時代の状況については、調査の結果、集落や墓地の変遷の内容、その内容から、多数の人々が集住していたこと、内部に祭祀空間を含む機能・階層の違いによる住み別けや施設群の構造上の相違があったこと、手工業的生産が早い段階で確立されていたことなどが判明し、都市的な様相を整え始めていたことが明らかになってきた(1)。

平成元年度に実施した確認調査と工業団地計画に伴う調査については既に報告書など(2)によって、その内容を公にしているが、本書では、平成２年度から７年度にかけて実施した調査の概要を述べているが、特に注目される弥生時代中期の北墳丘墓の再調査、弥生時代後期の北内郭跡の調査、中世寺院妙法寺跡の調査を主体にまとめている。

なお、調査の体制は、神埼町・三田川町の文化財専門職員各１名の派遣（県からの業務委託契約、３年度からは三田川町のみ）による協力のもと、佐賀県教育委員会が主体となっておこなった。調査は文化財課吉野ケ里遺跡保存対策室（７年度以降は組織改変により文化財課吉野ケ里遺跡班が実施）、経理については文化課庶務企画係と対策室（班）の管理担当がおこなった。組織の内容については次頁に記した。

註

(1) 建設省九州地方建設局国営吉野ケ里歴史公園工事事務所『国営吉野ケ里歴史公園建物等復元検討調査報告書』1996年3月

(2) 佐賀県教育委員会『吉野ケ里遺跡(佐賀県神埼郡三田川町・神埼町に所在する吉野ケ里遺跡の確認調査報告書)』1983年3月

佐賀県教育委員会『吉野ケ里遺跡 発掘調査概報Ⅰ』 1993年7月

佐賀県教育委員会『吉野ケ里遺跡 発掘調査概報Ⅱ』 1994年2月

佐賀県教育委員会『吉野ケ里(神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書)』 1992年3月
佐賀県教育委員会『平成4年度・5年度吉野ケ里遺跡発掘調査の概要—墳丘墓と北内郭跡を中心として— (付論) 吉野ケ里遺跡環壕集落の成立・発展・解体』 1994年1月

調査組織

【文化課】…事務局

課長	武藤佐久二	(2)
	天本　博	(3・4)
	市丸　利幸	(5・6)
	内田　泰智	(7・8)
参事	岩崎　輝明	(3)
	森　醇一朗	(4)
	佛坂　勝男	(6～8)
課長補佐	岩崎　輝明	(2)
	森　醇一朗	(2・3)
	佛坂　勝男	(4・5)
	小川　久人	(4～6)
	福山　正廣	(7・8)
庶務企画係長	永松　和久	(2～5)
	岩瀬　茂生	(6～8)
主査	浜野　清子	(2～5)
	小林　宣洋	(2～4)
	鷺崎　義彦	(5～7)
	古谷喜代美	(6)
	久保　信行	(7・8)
主事	松瀬　弘	(2・3)
	池田　学	(4～6)
	富窪　道代	(7・8)

【文化財課】…調査担当

課長	高島　忠平	(2～8)	総括
参事	木下　巧	(6～8)	
課長補佐	西村　貞幸	(2・3)	
(室長補佐も含む)	藤口　健二	(2)	
	中牟田賢治	(3～5)	
	瀬戸　明廣	(4～6)	
	田平　徳栄	(5～8)	
	深町　昌司	(7・8)	
企画調整主査	納富　敏雄	(2～8)	企画担当
	山口　和夫	(2・3)	管理担当
	多々良一夫	(4・5)	管理担当
	鷺崎　裕	(6～8)	管理担当
主査	石田　誠	(2～4)	管理担当
	藤原　斉	(5・6)	管理担当
	朝長　雅幸	(7・8)	管理担当
文化財保護主事	白木原　宜	(2・3)	企画担当
	細川　金也	(4)	企画担当
指導主事	副島　正道	(5・6)	企画担当
	犬塚　秀紀	(7)	企画担当
	梅木　烈	(8)	企画担当
企画調整主査	七田　忠昭	(2～8)	調査担当
文化財保護主事	森田　孝	(2・3)	調査担当
	吉本　健一	(4～8)	調査担当
指導主事	田島　春己	(2～5)	調査担当
	原　直樹	(6～8)	調査担当
《業務委託派遣調査員》三田川町教育委員会	草野　誠司	(2～8)	調査担当
神埼町教育委員会	桑原　幸則	(2)	調査担当

【発掘作業員】(平成8年度のみ)

秋吉京子・池田栄子・石松澄子・伊東キヨノ・伊東登・江口啓子・緒方昭二・緒方良美・小川ウタ・小川八重子・金丸文江・黒木優子・古賀清治・古賀道江・坂口サチ子・坂本昭子・佐藤春子・寺田和子・中島茂子・夏秋政治・野中光代・野口孝子・羽田すま子・平尾ハルヨ・平野三枝子・福島忠義・松本玉樹・御厨瑞枝・宮地久美子・山崎ひとえ・山崎三重子・横尾政一・吉田初美・吉原彰義

Ⅱ．位置と環境

吉野ケ里遺跡は、佐賀県の東部、神埼郡の神埼町と三田川町・東脊振村にまたがる通称吉野ケ里丘陵（『志波屋・吉野ケ里段丘』）の南部に位置する。遺跡は現行の行政区分では、神埼町大字志波屋（竹原地区）・同大字鶴（馬郡地区）、三田川町大字田手（吉野ケ里・田手地区）、東脊振村（辛上地区）に位置する。今回報告する吉野ケ里遺跡の各地区は大半が三田川町大字田手（吉野ケ里・田手地区）と一部神埼町大字鶴（馬郡地区）に位置する。

佐賀平野の東部にあたる三養基郡中原町から佐賀市にかけての脊振山地南麓には、多くの洪積世段丘が発達して、大小の段丘が山麓部から南部の肥沃な沖積平野へ舌状に延びており、このような自然環境が佐賀平野東部地域の特徴となっている。この地域は、県内でも特に遺跡の密集するところとして知られており、旧石器時代から中・近世までの遺跡が多数存在している。以下、三養基郡西部の中原町・上峰町・三根町以西、佐賀郡大和町以東の地域について記す。

旧石器時代の遺跡は、山麓部や段丘上にその存在が確認されているが、本格的な調査が実施された例は少なく、表面採集か後世の遺構などに混在したものが発見される例が多い。中原町姫方遺跡からは礫器やナイフ形石器が、同町町南遺跡や東脊振村山古賀遺跡などからナイフ形石器が、吉野ケ里遺跡でもナイフ形石器を主体とする石器群が多く出土している。また、数少ない本格的な調査例である神埼町船塚遺跡からは２層にわたる文化層から礫群が確認され、ナイフ形石器や台形石器・剥片尖頭器などが出土している。特に、瀬戸内系石器群の出土は興味深く、当地域における旧石器文化の様相を窺うことができる。

縄文時代は、旧石器時代と同様に山麓部や段丘上に遺跡が確認されており、その数も増加している。押型文土器の出土で学史的に著名な東脊振村戦場ケ谷遺跡をはじめ、中原町香田（早期・晩期）、神埼町船塚（早・前期、晩期）・同志波屋六本松（早期、後期）・同志波屋一の坪（早期）、東脊振村夕ケ里（後期）、佐賀市金立開拓（早・前期、後期）・同久保泉丸山（早期～晩期）・同鈴熊（晩期）など多くの遺跡で確認されている。これらの内、晩期に存在する久保泉丸山遺跡や香田遺跡では支石墓群が検出され、吉野ケ里遺跡周辺では晩期の集落跡と考えられる神埼町馬郡、三田川町田手二本松、東脊振村浦田など平野に面した遺跡で多数の土器片が発掘されており、この地域における弥生文化生成の実態が明らかになる日も近いと考えられる。

弥生時代になると遺跡の数は急増し、その分布も南部の沖積平野まで広がるようになる。近年の農業基盤整備事業などの開発に伴い平野部の調査が増加した結果、段丘上のみならず平野部の状況が明らかになった。前期の遺跡は町南、東脊振村西石動・同松原、神埼町切畑、吉野ケ里など段丘上や山麓部に立地するものの他、前期に南部三角州地帯の千代田町上黒井・同詫田西分などの貝塚を含む集落群が形成されたことが明らかになっている。

中期以降、集落の範囲はさらに拡大し数も著しく増加する。上峰町切通や東脊振村三津永田・同横田など副葬品をもった弥生時代墓地が従来から知られていたが、近年の大型開発に伴う調査の増加により、山麓部や段丘上の中原町姫方原・同町南・同原古賀三本谷、上峰町船石南・同一本谷、東脊振村下石動・同夕ケ里、吉野ケ里、神埼町的五本黒木・同川寄、佐賀市琵琶原・同村徳永などの集落跡が、中原町姫方、船石・船石南、上峰町と東脊振村にまたがる二塚山、西石動、東脊振村石動四本松、吉野ケ里、神埼町花浦・同志波屋六本松・同朝日北などから墓地跡が発掘されている。また、平野部においても神埼町利田柳・同荒堅目、詫田西分・同姉、三根町本分・同天建寺南島遺跡、さらには弥生時代終末期を中心とした諸富町徳富権現堂・同村中角遺跡などの調査により、弥生時代集落立地の南下を示した。

このような多数の遺跡の中には、先に挙げた切通や五本谷・二塚山・横田・三津永田、東脊振村石動四本松・三田川町の目達原桜馬場・同吉野ケ里北墳丘墓などから漢式鏡、青銅製や鉄製の武器・武器形祭器、装身具など

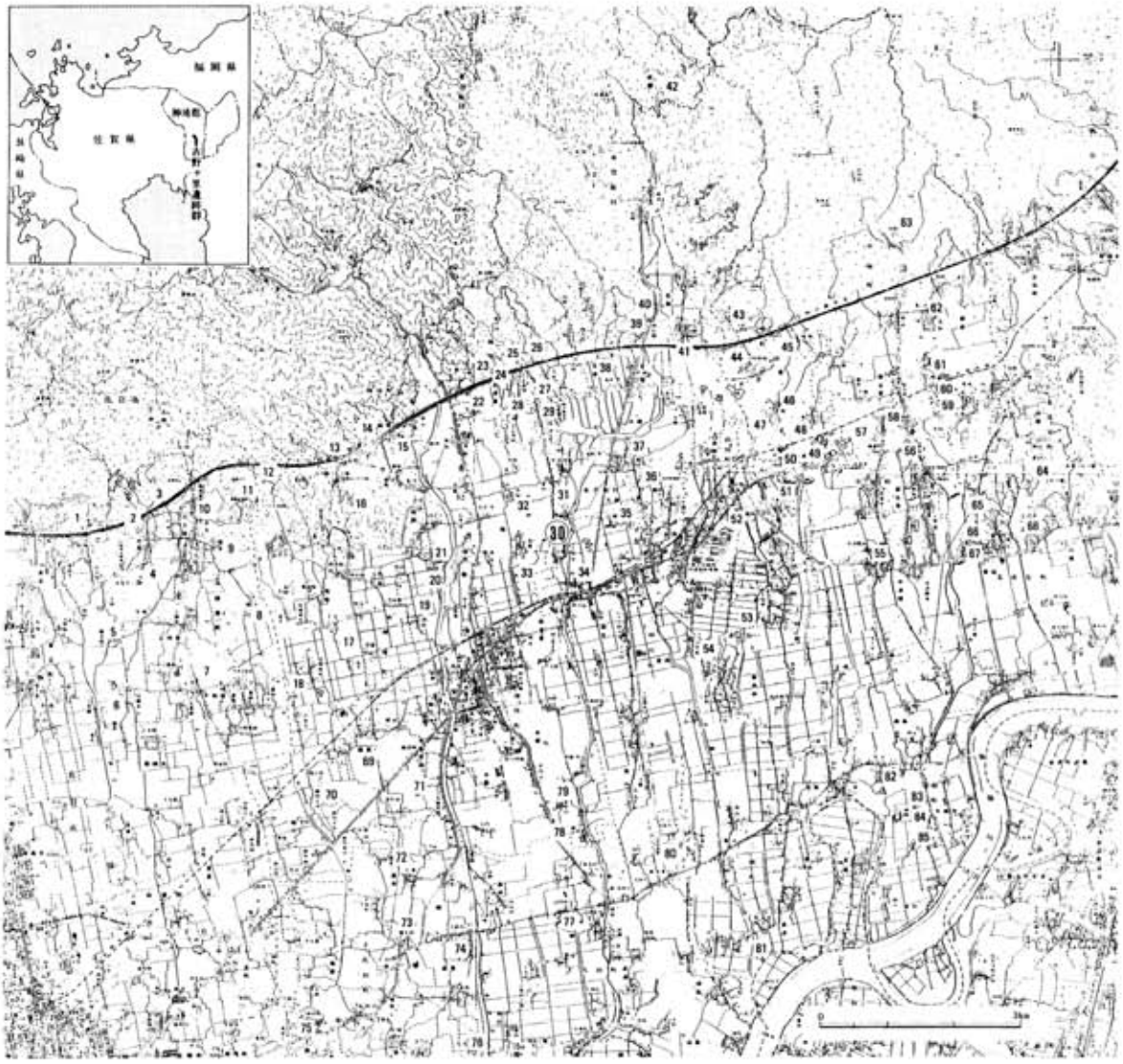


Fig.1 吉野ヶ里遺跡周辺遺跡分布図

1 金立開拓遺跡
2 久保泉丸山遺跡
3 鈴熊遺跡
4 琵琶原遺跡
5 篠木野遺跡
6 村徳永遺跡
7 泉三本栗遺跡
8 櫟の木遺跡
9 熊本山古墳
10 関行丸古墳
11 帝隈山神籠石
12 天神尾古墳群
13 狼嶽古墳群
14 勢福寺城跡
15 朝日遺跡
16 日の隈山烽跡
17 尾崎土生遺跡
18 尾崎利田遺跡
19 利田柳遺跡
20 川寄吉原遺跡
21 川寄若宮遺跡
22 的五本黒木遺跡
23 花浦古墳群
24 志波屋六本松遺跡
25 船塚遺跡
26 戦場ヶ谷遺跡
27 三津永田遺跡
28 伊勢塚前方後円墳
29 下三津前方後円墳
30 吉野ヶ里遺跡群
31 辛上廃寺跡
32 馬郡・竹原遺跡群
33 馬郡遺跡
34 杉籠遺跡
35 鳥の隈遺跡
36 横田遺跡
37 松原遺跡
38 タケ里遺跡
39 西石動銅戈鉾笛出土地点
40 西石動古墳群
41 下石動遺跡
42 霊仙寺廃寺跡
43 鎮西山南麓古墳群
44 屋形原古墳群
45 谷渡古墳群
46 堤土器跡
47 二塚山遺跡
48 船石遺跡
49 船石南遺跡
50 切通遺跡
51 一本谷遺跡
52 目達原古墳群
53 塔の塚廃寺跡
54 下中杖遺跡
55 宝満宮前方後円墳
56 町南遺跡
57 原古賀三本谷遺跡
58 ドンドン落遺跡
59 姫方原遺跡
60 姫方前方後円墳
61 姫方遺跡
62 八幡社遺跡
63 山田古墳群
64 検見谷遺跡
65 東尾銅剣出土地
66 東尾銅矛出土地
67 西尾遺跡（銅矛）
68 北尾遺跡（銅戈）
69 横武城跡
70 姉川城跡
71 本告城跡
72 上黒井貝塚
73 姉遺跡
74 直鳥城跡
75 貴別当神社遺跡
76 柴尾貝塚
77 詫田西分遺跡
78 森ノ木貝塚
79 荒堅目遺跡
80 南里ヶ里貝塚
81 蔵ノ江遺跡
82 本分貝塚
83 石井北方貝塚
84 天建寺南島遺跡
85 持丸貝塚

の重要な遺物が出土している。これに加えて西石動や姉、佐賀市櫟の木・同鍋島本村南、大和町惣座、吉野ケ里遺跡からは初期のものを含む銅剣・銅矛・銅戈の鋳型などが出土している。これらは当地域が国内において青銅器製作が開始されたことを示し、弥生時代青銅器の生産問題に重要な資料を提供した。豊かな農業生産を基盤とした先進的な金属器文化が花開いていたことを示している。

これら弥生時代の数多くの集落や墓地跡の調査成果は、水稲稲作を基盤として各種の手工業的生産をおこない人口密集地として発展したこの地域の特徴を示したが、一つの地域をめぐる集落群や墓地群の構造や格差、あるいは相互の有機的な関係を窺い知る資料として重要である。

古墳時代では、集落遺跡としては三田川町下中杖、東脊振村夕ケ里・同浦田・同瀬ノ尾、神埼町志波屋六本松・同馬郡などで確認されており、墳墓としては東脊振村西一本杉の墳墓、五本谷の方形周溝墓群、吉野ケ里の前方後方形墳墓や方形周溝墓群、佐賀市銚子塚前方後円墳、三田川町と上峰町・東脊振村にまたがる目達原古墳群（前方後円墳７基・円墳４基以上）、神埼町伊勢塚前方後円墳、中原町姫方前方後円墳などの古墳が築造される。山麓部では中原町山口、上峰町谷渡・同屋形原・同鎮西山南麓、神埼町猿獄・花浦古墳群などの古墳群が形成される。『古事記』や『続日本紀』『国造本紀』にみえる目達原古墳群を営んだと考えられる筑紫米多国造、『日本書紀』にみえる嶺県主、『続日本紀』にみえる佐嘉君などの豪族や有力農民層の動向が窺い知れる。

奈良時代には律令国家の成立に伴い、この地域の内中原町・上峰町・三根町は三根郡（律令時代初期には神埼郡に属する）、現神埼郡と佐賀市の南部の一部は神埼郡、大和町、佐賀市の大半は佐嘉郡の範囲に含まれた。大和町には国庁跡、国分寺・国分尼寺跡などが存在し、その南には東西方向の駅路跡が存在する。この駅路跡は大和町から吉野ケ里遺跡を経て中原町までの約17㎞区間に痕跡をとどめており、数箇所で発掘調査が実施されている。吉野ケ里遺跡や西に接する神埼町中園・同志波屋二の坪遺跡などの調査で、企画的に配置された多数の掘立柱建物跡群や井戸跡群が発掘され、木簡や墨書土器や箆描き土器（「神埼厨」など）などの文字資料、帯金具などが出土するなど、神埼郡家などの存在が想起される。この時代の集落跡も幾つか確認されているが、上峰町塔の塚廃寺、東脊振村辛上廃寺などの寺院跡は著名である。

平安時代には690町の勅旨田から発展した「神埼荘」と呼ばれる院領荘園が神埼郡域の大部分を占めるようになったと推定される。多数の中国の越州窯青磁や白磁・緑釉陶器・新羅の青銅箸・木製馬鞍などを出土した三田川町下中杖遺跡、木簡や緑釉陶器などを出土した神埼町荒堅目遺跡などが知られているが、他にも吉野ケ里遺跡など平安時代から中世にかけての輸入陶磁器を出土する遺跡が数多く存在しており、対中国貿易拠点の一つとしての神埼荘の性格を窺わせている。

中世になると武士階級が実質的支配権を確立したと考えられ、小山塊上の山城跡や山城麓の館跡、平野部には環濠館跡などが多数存在しており、勢福寺城麓の神埼町城原二本谷遺跡や同町姉川城などのように発掘調査によってその内容が明らかになったものも存在する。また、吉野ケ里遺跡内には建治４・弘安元（1278）年、元寇の際に勅願祈祷寺として創建されたとされる田手川左岸の東妙寺より20年前の正嘉２（1258）年創建とされる妙法寺（尼寺）跡が存在している。

以上のように、この地域は縄文時代晩期（弥生時代早期）以降、農業と金属器などの先進文化をいち早く摂取し発展させたものと考えられる。吉野ケ里遺跡が立地する佐賀平野東部地域が長期間にわたり政治的・軍事的に重要な位置を占めた背景には、水稲耕作に適した気候と広大な肥沃な土地や、南に国内外に開かれた有明海をもつなどの有利な地理的条件が少なからず影響しているものと考えられる。

Ⅲ．調査の方法

吉野ケ里遺跡のは広大な範囲の遺跡であるが、その内約22haは平成２年５月19日に史跡、翌３年５月28日に特別史跡に指定され、また、その周辺の約28haは県史跡として県文化財保護審議会の答申を受け、買収とともに指定を進めている。従ってこれら指定地内の埋蔵文化財は恒久的に保護されるものであり、埋蔵文化財の調査と言えども、保護・保存という点に注意を払いながら実施している。

遺跡・遺構のもつ情報は、現状の調査ではその一部しか把握できないものと認識し、将来の発掘技術や科学分析などの進歩に対応するため、遺構を完全には発掘しないで埋土を残しておくように努めている。しかし、このような方法をとった場合の弊害も多い。吉野ケ里遺跡の全体像の把握を目的としている調査であり、個々の遺構の詳細の把握、またそれらの集合体である遺跡全体の把握については、完全に発掘しない限り困難を極める。現在進められている国営・県営吉野ケ里歴史公園の遺構復元などの整備計画の策定にあたり、その根拠を完全に説明できないのが現状である。しかし、歴史公園開園後において、それまでの調査分析の成果をまとめ、目的を明確にした調査の計画や方法などを立案し、本格的かつ綿密な発掘調査を公開しながらおこなう必要がある。発掘現場の公開については、歴史公園の基本計画にもうたわれている。

なお、調査に関する指導については、文化庁記念物課はじめ佐賀県文化財保護審議委員、調査内容に造詣の深い専門家などに依頼している。

調査終了後の遺構の埋め戻しについては、当初真砂土によって発掘された遺構が隠れる程度埋め、その後調査開始時に除去していた表土によって完全に埋め戻していたが、検証のための再調査の際に、真砂土と遺構面との間に界面が生じ斜面などにおいてはズレが生じるなどして遺構を傷つけた部分が確認されたり、再調査の際に遺構の表面に埋もれた状態の真砂土の除去に困難を極めるため、近年では、元来遺構を覆っていた表土をそのまま埋め戻すことにしている。

１．調査の種類と法的な手続き、費用負担など

(1)遺跡の内容把握及び歴史公園整備計画策定の基礎資料を得るための調査

基本的には最小限の発掘（破壊）によって、ある程度の成果を得る方法で調査方法をとっている。

法的には特別史跡指定地内の調査については、文化財保護法第65条に基づいて、文化庁長官宛て現状変更願いを提出し、許可され次第調査を開始し、終了次第埋め戻して旧状に復元している。また、指定地以外の埋蔵文化財包蔵地を発掘する場合でも、整備工事計画等によって遺構が損傷しない限り、同様な調査方法をとっており、文化財保護法第98条の２に基づいて、文化庁長官宛て埋蔵文化財発掘調査通知書を提出している。この種の調査については基本的に文化庁の補助金事業としておこなっている。

これらの発掘調査によって出土した遺物については、遺構を完全に発掘しないため、すべては取り上げないが、遺構の年代を知る資料や埋め戻した場合将来損傷や劣化の可能性がある資料については取り上げ、吉野ケ里遺跡発掘調査事務所に保管し整理をおこなっている。ただし、重要文化財等に指定された資料については、現在佐賀県立博物館で保管し、展示などに活用している。出土し取り上げた遺物は、その年度の末に文化財保護法第98条の３に基づき、所轄の神埼警察署に埋蔵文化財発見通知を提出している。

(2)歴史公園整備工事で破壊される遺構の調査

史跡指定地内においては、整備のために遺構を破壊することはないが、無指定地域において橋梁や便益施設建設などの要因で、記録保存のための発掘調査を実施する場合は、遺構を完全に発掘し記録として保存している。この場合も文化財保護法第98条の２に基づいて、文化庁長官宛て埋蔵文化財発掘調査通知書を提出している。こ

の種の調査については基本的には国営区域については建設省からの受託事業として、県営区域については県の開発部局からの再配当事業としておこなう予定である。

また、出土した遺物はすべて取り上げ、吉野ケ里遺跡発掘調査事務所に保管し整理をおこなっているが、その年度の末に文化財保護法第98条の３に基づき、所轄の神埼警察署に埋蔵文化財発見通知を提出している。

２．発掘調査の方法

実際の発掘調査の方法については、調査の目的を明確にした後調査区を設定し、バックフォアなどの建設機械によって表土を除去するが、小範囲の調査の場合は人力のみで行う場合もある。その後の遺構検出や遺構発掘はすべて人力によるが、その手法は調査区の広狭や目的によって異なる。

(1)小範囲の調査区の場合

環壕の連続線を把握する場合や、地形、土地の買収状況によって面積の狭い調査区（大半が細長い調査区）を設定した場合は、調査によって破壊される面積が少ないために検出した遺構の一部を完全に発掘し、検出遺構の写真撮影と実測、堆積状況の土層図作成などをおこない発掘情報を記録する場合もある。また環壕跡などの連続線の確認の際は路線のみを確認し掘り下げしない場合が多い。位置の測量は原則的には国土座標に基づいている。

(2)広範囲の調査区の場合

狭い調査区では遺跡の内容が掴めないと判断した場合、広範囲な発掘調査を実施するが、表土除去の後、特に環壕跡や竪穴建物跡、大型の柱穴、土壙などの遺構については完全に発掘するのではなく、最小限の調査（破壊）で最大限の成果をあげられるよう努力している。例えば環壕跡の発掘の場合、他の遺構と同様平面的に遺構の検出をおこない、遺構分布図を作成して、環壕跡の要所要所に断面観察のためのトレンチを設定し、環壕の断面形態や深さ、内部の埋土や土器などの堆積状況を記録し、遺物を層位的に取り上げるにとどめている。

調査区はすべて国土座標によって測量し、調査区内部の遺構も座標によって図面上に記すことができるようにし、検証するための再発掘にあたっても容易にその位置がわかるようにしている。

写真撮影は、35mm版と４×５inch版（またはブローニー版）のカメラを用い、モノクロームネガフィルムとカラーポジフィルム（場合によってはカラーネガフィルム）に撮影している。また広範囲の調査区については、業者に委託してバルーンによる空中写真撮影をおこなっている。遺構実測は、調査区位置図は縮尺 500分の１、遺構配置図は縮尺 100分の１、遺構実測図は縮尺20分の１、遺物の出土状況などは縮尺10分の１でおこなっているが、作業員（実測要員）や調査員、あるいは埋蔵文化財の測量専門業者に委託しておこなっている。

出土遺物の整理は吉野ケ里遺跡発掘調査事務所でおこなっているが、洗浄（青銅器・鉄器などの特殊な遺物については錆び落としなど）の後、註記、接合、復元を施し、実測をおこなっている。遺物実測は、基本的に原寸で、甕棺など大型のものについては縮尺２分の１あるいは３分の１でおこなっている。

３．調査中の遺跡・遺物の公開

現在、仮整備の段階で公開している復元集落周辺における発掘調査については、見学路や案内板などを設け、見学者に対し積極的に公開しながらおこなっている。また、重要な遺構や遺物が出土した場合には、参加しやすい休日などを選び、発掘現場において現場説明会を、展示室において遺物の特別展示会などをおこなっている。発掘状況と整備された復元集落の両者を見学することによって、文化財についての理解が進むものと考えられ、将来にわたって発掘中の遺跡公開を継続する必要がある。

Ⅳ．調査の成果

1．調査の年度別の概要

平成元年度からの吉野ケ里遺跡発掘調査は、平成元年度に102箇所の調査区を設けて実施した後、平成2年度から7年度末までに124箇所の調査区（第103調査区～第226調査区）を設定して実施した。なお、前回の報告（佐賀県文化財調査報告書第100集『吉野ケ里遺跡』1990年3月）で1～89調査区の概要については述べているので、本書では掲載することができなかった第90～102調査区についても今回加えて報告する。

(1)平成元年度の調査

第90～102調査区では、平成元年度までの調査で明らかになっていた南内郭西方外環壕外側（吉野ケ里地区Ⅴ区）の高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡群の範囲を確認する調査をおこなった。トレンチ調査ではあったが、弥生時代の竪穴住居跡11基以上とともに弥生時代後期から終末期と考えられる掘立柱建物跡5基以上を確認し、高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡群の範囲を、取り合えず外環壕の外側から段丘裾部までの約2.2haと推定することができた。また、この建物群の南側では急な傾斜の落ち込みが確認され、あるいは段丘斜面を切り落すなどの地形の改変をおこなっていた可能性も考えられる。いずれにせよ、将来の面的な調査が望まれた。

(2)平成2年度の調査

環壕集落の南と東への広がりを確認するための調査をおこない、明確な外環壕の延長部分を確認するに至らなかった中で、南内郭跡南東方の田手川左岸（杉籠遺跡・田手遺跡ほか）と右岸（吉野ケ里丘陵地区Ⅶ区）の段丘裾部を巡るらしい溝跡を検出した。特に右岸部分では弥生時代中期から後期と考えられる溝の外側（東側）に土塁が残存しており、内側には斜めに穿たれた逆茂木状の杭群の跡と考えられる小穴群が多数確認された。この壕跡を、段丘西を巡る外環壕の延長線と考えた場合の環壕によって囲まれた区域の面積は、高床倉庫と考えられる南内郭跡西の掘立柱建物跡群（約2.2ha）を含めて、約40haとなった。

また、未調査区の確認調査にも一部着手し、ＪＲ長崎本線北の南部段丘上（田手一本黒木地区Ⅰ区）において北墳丘墓と同様の工法で弥生時代中期前半に築かれた墳丘墓状の盛土遺構（南墳丘墓）や、平成元年度に一部確認していた青銅器鋳造に関わる土壙状の遺構（田手二本黒木地区Ⅲ区）を調査した。

(3)平成3年度の調査

南内郭跡南東部の環壕集落への主たる出入口と考えた地区（吉野ケ里丘陵地区Ⅶ区）の調査や、南内郭すぐ南（同地区）の甕棺墓群などを調査を実施した。南内郭跡東（吉野ケ里丘陵地区Ⅲ区）に沿って列を成していた甕棺墓群がこの地区で新たに検出した弥生時代中期を中心とする約100基以上の甕棺墓の墓域で終了していることが判明した。また甕棺墓群の中に新たに掘削された弥生時代後期の壕跡からは小形製鏡などが発見された。

(4)平成4年度の調査

特別史跡内でこれまで未調査だった県道吉田鶴線の北に接する地区（吉野ケ里丘陵地区Ⅵ区、工業団地計画に伴う発掘調査で明らかになっていた県道南の環壕区画跡―後の南内郭跡と区別するために北内郭跡と呼ぶ）と、平成元年に一部調査を実施し7基の甕棺墓とともに銅剣5点、ガラス管玉79点などを出土した北墳丘墓（吉野ケ里丘陵地区Ⅴ区）の再調査を実施した。

北内郭地区では北半部を主に調査し、２重の環壕（内壕・中壕）によって囲まれた弥生時代後期の環壕区画跡（北内郭跡）を検出した。この環壕区画の全体像を把握するため、南半部にはトレンチを設定して調査した。その結果、２重の環壕はＡ字形に近い平面形をしていることが判明した。その他にも横穴式石室をもつ小円墳、平安時代から中世にかけての墓群、中世の壕跡などが発見され、多くの土器とともに青銅製武器形祭器（中広形銅戈）や鉄器などが出土した。また北墳丘墓の調査では新たに弥生時代中期の甕棺墓７基を発掘し、内部から銅剣３点を発見した。

(5)平成５年度の調査

北内郭跡の調査を継続するとともに、北墳丘墓と北内郭跡の間（吉野ケ里丘陵地区Ⅴ区）および北墳丘墓の北東に位置し、平成元年に墓壙のみ検出し埋め戻しておいた甕棺墓地の調査を実施した。また、墳丘墓東に位置する大型の土壙についても内容確認のための調査を実施した。

北内郭跡の調査では、平面Ａ字形に巡る二重の環壕による区画の全域と、その内外で多くの竪穴建物跡や掘立柱建物跡群などを検出した。環壕区画内部で３間×３間（約12.5ｍ四方）、径40cm～50cmの柱16本を用いた大型の建物跡を発見するなど、北内郭跡の建物配置や変遷、構造など、北内郭の全貌が明らかになった。また、甕棺墓地の調査では、それぞれの墓域を構成している甕棺墓を主体とする墳墓の配置や変遷などが明らかになり、中期の古い２基の甕棺墓の棺内から多数の縫い合わせた部分を含む多数の絹布片などが出土した。また、墳丘墓東の大型土壙からは中期中頃以降の長期間にわたる多数の土器などが出土し、墳丘墓周辺での長期にわたる祭祀行為の存在を想起させた。また、北墳丘墓南の甕棺墓地の北部では、北墳丘墓と関係が深いと考えられる弥生時代後期の掘立柱建物跡を確認した。

(6)平成６年度の調査

遺跡南部の状況を把握するために南内郭跡南および南東部一帯（吉野ケ里丘陵地区Ⅶ区）の調査を実施した。南内郭跡南一帯からは弥生時代前期の環壕の一部、出入口（陸橋）をもつものを含む中期の大規模な濠跡や、区画と考えられる後期の濠跡や、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・貯蔵穴跡・甕棺墓・土壙墓など、中世の壕跡などが発見された。また南東の谷部（吉野ケ里丘陵地区Ⅷ区）では、弥生時代の人工的な谷が、その東の水田部からは中・近世の溝跡や井戸跡・掘立柱建物跡などを確認した。

また、北内郭跡北西約80ｍ（吉野ケ里丘陵地区Ⅱ区）に位置する外環壕跡北西の斜面の調査を実施した。斜面下では多数の小穴群や土壙、弥生時代中期の甕棺墓や後期と考えられる石蓋土壙墓などを確認した。小穴群は外環壕の方向あるいは斜面裾の方向に帯状に分布していることから、防御のための逆茂木状の施設が存在していた可能性もある。この部分の外環壕は、中期から後期初頭にかけての甕棺墓群を壊して掘削されていることが昭和62年度の発掘調査で明らかになっていたが、この甕棺墓群の分布範囲が数は少ないものの斜面下の部分まで達していることが確認された。

(7)平成７年度の調査

７年度後半頃から、国営歴史公園の造成工事が開始される計画であったため、北墳丘墓周辺（吉野ケ里丘陵地区Ⅴ区）や北内郭周辺（吉野ケ里丘陵地区Ⅵ区）の補足調査、南部の外環壕出入口（田手二本黒木地区Ⅱ区）の調査を実施した。また南部未調査地区においてまとまった土地の買収が終了したため、段丘上の妙法寺跡の一部

Tab. 1　吉野ケ里遺跡発掘調査調査区一覧表

（平成２～７年度、元年度の第90～102調査区も含む）

調査区番号	地区名	調査面積（m²）	調査年度	主な遺構	主な遺物	備考
90	吉野ケ里地区　V区	27	元	弥生…柱穴		高床倉庫群
91	〃　〃	145	〃	弥生…掘立柱建築物跡2　平安？…井戸跡1		〃
92	〃　〃	85	〃	弥生…竪穴住居跡2、掘立柱建物跡1（第101調査区にかかる） 古墳…掘立柱建物跡1（第100調査区にかかる）		〃
93	〃　〃	79	〃	弥生…竪穴住居跡2　古墳…竪穴建物跡2		〃
94	〃　〃	65	〃	弥生…竪穴住居跡1		〃
95	〃　〃	59	〃	弥生…竪穴住居跡1		〃
96	〃　〃	71	〃	弥生…竪穴住居跡4、掘立柱建物跡2		〃
97	〃　〃	75	〃	弥生…柱穴		〃
98	〃　〃	24	〃	弥生…柱穴、南部は段丘切り落し		〃
99	〃　〃	29	〃	弥生…柱穴、南部は段丘切り落し		〃
100	〃　〃	12	〃	古墳…掘立柱建物跡1（第92調査区のものと同）		〃
101	〃　〃	30	〃	弥生…竪穴住居跡1、掘立柱建物跡1 （第92調査区のものと同）　古墳…竪穴住居跡1	弥生…石包丁1、土弾1	〃
102	〃　〃	9	〃			
103	吉野ケ里丘陵地区 VIII区	16	2	弥生…溝（環壕？）跡1		
104	〃　〃	18	〃	弥生…溝（環壕？）跡1		
105	〃　〃	15	〃	弥生…溝（環壕？）跡1		
106	〃　〃	50	〃	弥生…溝（環壕？）跡1、柱穴		
107	〃　〃	7	〃	弥生…溝（環壕？）跡1	弥生…石包丁3、石製紡錘車1	
108	田手川東（二本松地区）	44	〃			
109	〃（一本杉地区）	131	〃			
110	〃（　〃　）	36	〃			
111	〃（杉籠地区）	66	〃	弥生…溝跡2		外環壕の可能性あり
112	〃（二本杉地区）	80	〃			
113	〃（　〃　）	23	〃			
114	〃（　〃　）	30	〃			
115	〃（　〃　）	34	〃			
116	〃（杉籠地区）	16	〃	溝跡1		
117	吉野ケ里丘陵地区 VIII区	68	〃	弥生…小穴		
118	〃　〃	25	〃			
119	〃　〃	23	〃	弥生…溝跡1、柱穴、小穴		段丘裾部
120	吉野ケ里丘陵地区 VIII区	52	〃	中世…溝跡2・井戸跡1・土壙1		〃
121	〃　〃	82	〃	中世？…溝跡2、小穴	弥生…磨製石剣切っ先、土弾1	〃
122	〃　〃	38	〃	溝跡1、土塁跡、杭	弥生…抉入方柱状片刃石斧1、木製鋤先	
123	田手川東（二本杉地区）	20	〃			段丘裾部
124	〃（　〃　）	80	〃		弥生…石剣1　平安…石帯1	外環壕の可能性あり
125	〃（　〃　）	30	〃			
126	〃（　〃　）	96	〃			
127	〃（　〃　）	56	〃			
128	〃（　〃　）	74	〃			

調査区番号	地　区　名	調査面積（m²）	調査年度	主　な　遺　構	主　な　遺　物	備　　考
129	〃　（〃）	34	〃			
130	〃　（〃）	66	〃			
131	吉野ヶ里丘陵地区 VII区	103	〃	弥生…小穴多数（逆茂木状杭群）		
132	吉野ヶ里丘陵地区 VI区	337	〃	弥生…甕棺墓8、土壙墓3、土壙3、溝跡2、竪穴住居跡1、掘立柱建物跡1		
133	田手二本黒木地区 VII区	179	〃	弥生…小穴多数		逆茂木状杭群
134	〃　〃	30	〃	弥生…小穴多数		逆茂木状杭群
135	〃　〃	179	〃	弥生…小穴多数		逆茂木状杭群
136	田手二本黒木地区 VIII区	8	〃	中世…溝跡	弥生…打製石鏃1	
137	〃　〃	6	〃		近世…銅銭1	
138	〃　〃	3	〃	中世…溝跡		
139	〃　〃	5	〃		弥生…石包丁1	
140	吉野ヶ里丘陵地区 VII区	6	〃	中世…溝跡1		
141	〃　〃	9	〃			
142	田手一本黒木地区　I区	54	〃	弥生…溝跡5、土壙2（内1は竪穴住居跡の可能性あり）	弥生…石鏃1	
143	田手二本黒木地区 III区	6	〃	弥生…溝跡1		
144	田手一本黒木地区　I区	7	〃	弥生…溝跡1、土壙1		
145	〃　〃	9	〃	弥生…溝跡1、小穴		
146	〃　〃	2	〃	弥生…溝跡1、小穴		
147	〃　〃	35	〃	土壙1	弥生…石鏃1、　中世…青銅製品（刀子状）	墳丘墓状遺構（南墳丘墓）上
148	〃　〃	41	〃	弥生…竪穴住居跡1、土壙2	弥生…石包丁1、石鏃1、石錐1	〃
149	〃　〃	53	〃	弥生…竪穴住居跡1、土壙墓（柱穴？）1、土壙2、溝跡1	弥生…石錘1、扁平片刃石斧1、土錘1	〃
150	〃　〃	47	〃	弥生…竪穴住居跡2、　中世…土壙1	弥生…朝鮮系無文土器片2	〃
151	〃　〃	23	〃	溝跡1、土壙4		〃
152	〃　〃	144	〃	弥生…掘立柱住居跡数基　中世…溝跡2	弥生…土錘1、石製紡錘車（未製品）1	〃
153	〃　〃	19	〃		弥生…祭祀土器多数、石包丁2、石鏃1、 磨製石剣1、ガラス小玉1、土錘1	〃
154	田手二本黒木地区 III区	133	〃	弥生…溝跡1、土壙4　中世…溝跡1、井戸跡1	弥生…銅剣鋳型、鞴片、青銅片、銅滓、炉壁片、石製勾玉1、石製管玉、ガラス小玉、祭祀土器、紡錘片、鉄製鑿と刀子、石鏃1	青銅器鋳造関連遺構
155	田手川東（二本松地区）	60	〃	弥生…河川跡		
156	〃　（〃）	30	〃	中世…井戸跡1		
157	〃　（〃）	15	〃	弥生…河川跡		
158	国道34号南（一本黒木地区）	32	〃		弥生…石包丁1	
159	田手川東（二本松地区）	161	〃	弥生…甕棺墓4、土壙墓1、土壙2、溝跡1		ＪＲ長崎本線・国道34号南
160	〃　（杉籠地区）	5	〃			
161	〃　（〃）	6	〃			
162	〃　（〃）	5	〃			
163	〃　（〃）	5	〃			
164	〃　（〃）	4	〃			
165	〃　（〃）	5	〃			
166	〃　（〃）	5	〃			
167	田手一本黒木地区　I区	20	〃	溝跡1、土壙1		
168	〃　〃	13	〃	溝跡1		

調査区番号	地区名	調査面積（m²）	調査年度	主な遺構	主な遺物	備考
169	吉野ヶ里丘陵地区 VII区	577	3	弥生…甕棺墓118、土壙墓2、環壕跡1、溝跡4、土壙跡20	弥生…小形鉄鏃1、鉄器1、人骨片	
170	〃 VII区	30	〃	中世…溝跡1		吉野ヶ里区公民館敷地
171	〃 VII区	289	〃	弥生…環壕跡1　中世…溝跡1	中世？…鉄滓1	
172	〃 〃	146	〃			
173	〃 〃	33	〃	弥生…小穴多数（逆茂木状杭群）		
174	〃 〃	21	〃	弥生…小穴多数（逆茂木状杭群）		
175	〃 〃	20	〃		中世…鉄刀子（鞘付）1	
176	〃 〃	4	〃			
177	〃 〃	6	〃			
178	吉野ヶ里丘陵地区 V区	4,320	4 5	弥生…甕棺墓、土壙墓、環壕跡、竪穴住居跡、堀立柱建物跡、土壙 古墳…竪穴住居跡、古墳 平安～中世…土壙墓、溝跡（墓数は第181調査区の欄にまとめて記入）	弥生…鉄剣（甕棺の副葬品）	北内郭跡北半部・南半部の一部
179	〃 〃	1,950	4	弥生…甕棺墓14、（平成元年調査時の7を含む）	弥生…細形銅剣2、中細形銅剣1、青銅製把頭飾1、石製把頭飾1	北墳丘墓再調査（全面）
180	東背振村辛上地区	69	〃	弥生？…小穴群		東背振村辛上、トレンチ5箇所
181	吉野ヶ里丘陵地区 V区	8,680	4 5	弥生…竪穴住居跡53以上（竪穴住居跡は時期不明のものも含めて75）、堀立柱建物跡25以上、甕棺墓34、土壙墓12、箱式石棺墓2、祭祀土壙1、環壕・溝跡4以上、貯蔵穴跡、土壙 古墳…竪穴住居跡3以上、古墳1、土壙 平安～中世…土壙墓・墓棺墓10以上、土壙、溝跡、道路状遺構	弥生…鉄器（斧・鑿・ヤリガンナ・刀子・鎌・鏃・剣）・中広形銅戈・ガラス小玉・祭祀土器 平安～中世…焼角鈴刀子・青磁	北内郭跡（内容は継続した南半部の第178調査区も含む）
182	〃 〃	1,886	5	弥生…貯蔵穴跡3以上、甕棺墓227以上、祭祀土壙10以上、堀立柱建物跡3　平安…土壙墓1	人骨片	北墳丘墓南の甕棺墓群
183	〃 〃	810	〃		中期後半から後期後半の土器群	北墳丘墓東の大型祭祀土壙
184	〃 〃	1,173	〃	弥生…甕棺墓130、土壙墓1、箱式石棺墓1	銅布片、石鏃と磨製石剣切先（甕棺内）、人骨片	北墳丘墓北東方の甕棺墓群
185	吉野ヶ里丘陵地区 VII区	517	6	弥生…壕跡4、竪穴住居跡4、堀立柱建物跡1、貯蔵穴跡、甕棺墓3、土壙墓2　中世…壕跡1、土壙墓1	弥生…石包丁10、石鏃1、石鏃8、磨製石鏃4、石製石剣3（内2は切っ先）、磨製石斧3、扶入方柱状片刃石斧1、扁平片刃石斧1・石鑿1、砥石4、土錘7、石製管玉1	
186	〃 〃	413	〃	弥生…壕・溝跡2、竪穴住居跡2以上、堀立柱建物柱穴跡、貯蔵穴跡 中世…壕跡1、土壙墓1	弥生…石包丁6、石鏃3、鉄器2、砥石多数、土錘2	
187	〃 〃	978	〃	弥生…壕跡4、竪穴住居跡6、堀立柱建物柱穴跡、貯蔵穴跡 中世…壕跡1	弥生…石包丁7、石鏃4、磨製石鏃1、石鑿1、磨製石斧2、扁平片刃石斧1、鉄斧1、砥石3、土製紡錘車1、土錘4	
188	〃 〃	572	〃	弥生…谷（人工）跡1、堀立柱建物跡1、土壙 中世…堀立柱建物跡1（2×4間、東妃）	弥生…石製紡錘車1	
189	〃 〃	174	〃	中世…堀立柱建物跡1（2×4間）	弥生…石鏃1、磨製石鏃1、石製紡錘車1、鉄器1・砥石1、ガラス小玉1	
190	〃 〃	41	〃	弥生…環壕跡1		
191	〃 〃	179	〃	弥生…環壕跡1、貯蔵穴跡、堀立柱建物跡、甕棺墓27　中世…壕跡	弥生…石包丁1、鉄ヤリガンナ1、石製管玉1	
192	〃 〃	46	〃	弥生…環壕跡1、　中世…壕跡・土壙	弥生…石包丁1、石鏃2、磨製石鏃1、砥石1、土錘3	
193	〃 〃	56	〃	弥生…貯蔵穴跡	弥生…石鏃1、土錘1	
194	〃 〃	267	6 7	中・近世…溝跡1、堀立柱建物跡、柵跡1、井戸跡1	弥生…石包丁8、土製紡錘車2、土錘2 中世…銅鏡3、土錘1	
195	吉野ヶ里丘陵地区 II区	12	6 7			
196	〃 〃	78	6 7	弥生…外環壕跡1、甕棺墓1、土壙	弥生…磨製石斧1	
197	〃 〃	42	6 7			
198	〃 〃	28	7	弥生…貯蔵穴跡1		
199	〃 〃	17	〃			
200	〃 〃	29	〃	弥生…溝跡、竪穴住居跡1		

調査区番号	地　区　名	調査面積（m²）	調査年度	主　な　遺　構	主　な　遺　物	備　　考
201	〃　〃	115	7	弥生…甕棺墓3		
202	〃　〃	233	〃	弥生…土壙墓3	弥生…ガラス小玉3	
203	〃　V区	80	〃	弥生…溝跡1、土壙墓1、竪穴住居跡8　古墳…竪穴住居跡1		
204	〃　〃	98	〃	弥生…溝跡1、竪穴住居跡7　古墳…竪穴住居跡1		
205	〃　〃	123	〃			
206	〃　〃	32	〃	弥生…甕棺墓1、土壙墓1		
207	〃　〃	43	〃			
208	〃　〃	81	〃			
209	〃　〃	84	〃		弥生…磨製石斧1、磨製石鏃1、石製管玉3	
210	〃　〃	46	〃	弥生…甕棺墓2　古墳…土壙1　中世…溝跡1	弥生…磨製石斧1	
211	〃　〃	161	〃 〃	弥生…環壕（外壕）跡1、環壕（外壕）出入口跡1、甕棺墓5 古墳…竪穴住居跡2		外環壕出入口跡
212	〃　〃	35	〃			
213	〃　VI区	273	〃	弥生…環壕（中壕）跡1、堀立柱建物跡		北内郭跡
214	〃　V区	13	〃	弥生…外環壕跡1　中世…溝跡1		
215	〃　VI区	171	〃	弥生…環壕（中壕）跡1、竪穴住居跡1		
216	〃　V区	17	〃			
217	〃　〃	7	〃	弥生…竪穴住居跡1		
218	〃　〃	9	〃	弥生…溝跡1、竪穴住居跡1		
219	〃　VI区	15	〃	弥生…環壕（中壕）跡1		
220	田手一本黒木地区　I区	852	〃	弥生…貯蔵穴跡2 中世…堀立柱建物跡7、井戸跡1、溝跡20、土壙30、柵跡7	弥生…石製管玉2、石製紡錘車1、磨製石剣	中世寺院妙法寺跡
221	田手二本黒木地区　II区	452	〃	弥生…環壕（外壕）跡1、環壕（外壕）出入口跡1、竪穴住居跡2、貯蔵穴跡4以上、柵跡2、柱穴・小穴群多数　中世…井戸跡5	1、石包丁1、石鏃多数、土弾2、鉄鎌1	外環壕出入口跡
222	田手一本黒木地区　II区	263	〃	弥生…環壕（外壕）跡1　中世…溝跡・土塁跡		
223	〃　〃	331	〃	弥生…堀立柱建物跡　中世…溝跡1		
224	田手二本黒木地区　III区	23	〃	弥生…溝跡3		
225	〃　〃	21	〃	弥生…溝跡1		
226	〃　I区	18	〃	弥生…溝跡2		

弥生…青磁、白磁、青白磁、瓦、陶器（備前・
常滑）、鉄刀、石塔片（相輪）、石臼、火鉢
弥生…鉄鎌4・鉄ヤリガンナ1・鉄鏃1
・銅鏃1
弥生…鼠返し・柱　中世…銅銭

と考えられる部分（田手一本黒木地区Ⅰ区）と段丘南端西の段丘裾の水田部（田手一本黒木地区Ⅱ区）の調査を実施した。

北墳丘墓周辺では、墳丘墓の南西に位置する外環壕の出入り口（陸橋）部が確認され、墳丘墓の北方には弥生時代中期前半の竪穴住居跡群や古墳時代（６世紀）の竪穴住居跡群が、西や北西方には一般の甕棺墓群が分布していることが判明した。北内郭跡周辺では、中壕の北東側の壕の南東への延長線の確認などをおこなったが、この部分で中壕に突出部が存在し、その内側に掘立柱建物跡が存在することが明らかになった。妙法寺跡推定地では区画溝や掘立柱建物跡群、井戸跡などを発掘し、国産・輸入の陶磁器などを得た。南部の外環壕の出入り口部の調査では特殊な構造の出入り口跡を確認し、周辺からは弥生時代前期の竪穴住居跡や平安時代の井戸跡群を確認した。段丘南端西の水田部では、畝状の高まりと溝状遺構が交互に南北方向に設けられた中世の水田状遺構を確認した。この遺構の直下に木器などの植物性の遺物を多数包含する弥生時代の層が存在し、一部トレンチ調査を実施して土層の確認をおこなった際に、大型の柱や鼠返しなどが出土した。なおこの地区の調査は８年度に本格的に実施した。

以下、平成２年度以降に実施した調査の概要を、範囲確認調査、北墳丘墓、北内郭跡、妙法寺跡、その他の調査に分けて述べることにする。

２．調査の成果

(1)環壕集落の範囲確認調査

平成元年度の調査によって、後期の環壕集落の西側の範囲はほぼ確認できたものの、東側については不明のままであったため、平成２年度には環壕集落の東の範囲を確定するトレンチ調査をおこなった。

①田手川東岸の県道吉田・鶴線周辺（第109・110・112～115・123～130 調査区）

調査時は水田として利用されていたところで、耕作土の下部には細かい粒子の砂層が堆積し地表下 3.0～ 3.5ｍあたりで砂礫層となる。湧水がひどく調査は深さ約４ｍまでとしたが、何ら遺構は確認されず、砂層や砂礫層から摩滅した弥生時代から中世にかけての土器・陶磁器片が出土した。一帯は田手川の氾濫によって遺構が破壊されたか、旧河道であったものと考えられた。

②田手川東岸南部（第108・111・116・155～157・159～166 調査区）

吉野ケ里段丘南部が田手川の東へ張り出した部分の北および東の水田部であるが、第111 調査区では段丘に近い部分で弥生時代の溝跡を確認したが、西方田手川西岸の第 103～ 107・122 調査区で確認された溝跡と連続する可能性があり、あるいは環壕集落の東を画する外環壕とも考えられた。その他の調査区でも耕作土下部は砂層となっており遺構は確認できなかったが、ＪＲ線周辺の第 155・157 調査区では粗砂層が確認され完形にちかい弥生土器群が出土するなど、田手川の旧河道に近い部分であり、吉野ケ里遺跡南部の東の境界と考えられた。なお、国道34号南の第 159調査区では弥生時代中期の甕棺墓などが確認され、遺跡の南東の境界と考えられた。

③田手川西岸の南内郭跡南東地区（第103～107・117～122・131・133～141・173・174 調査区）

田手川そばの第 103～ 107調査区では幅約12ｍの東西方向の溝状の遺構が確認され、第 121・ 122調査区では東側で急な落ち込みが確認され、落ち込みの下端から東約 9.5ｍの位置で、杭で補強された幅４～５ｍの土塁状の遺構（残存高0.6 ｍ）を検出した。外環壕の延長部分とも考えられる。この地形の落ち込みの斜面にあたる第 131・

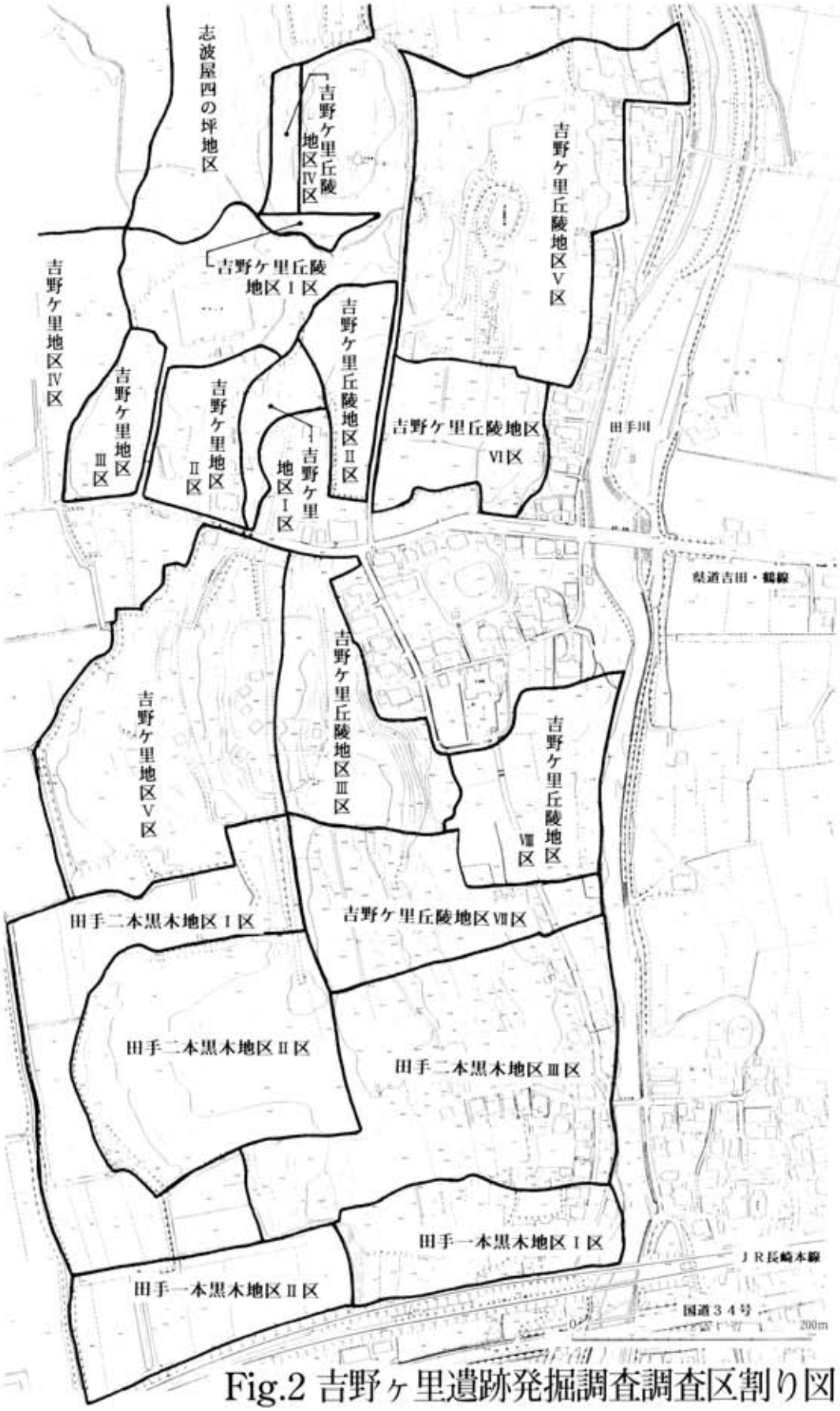


Fig.2 吉野ヶ里遺跡発掘調査調査区割り図

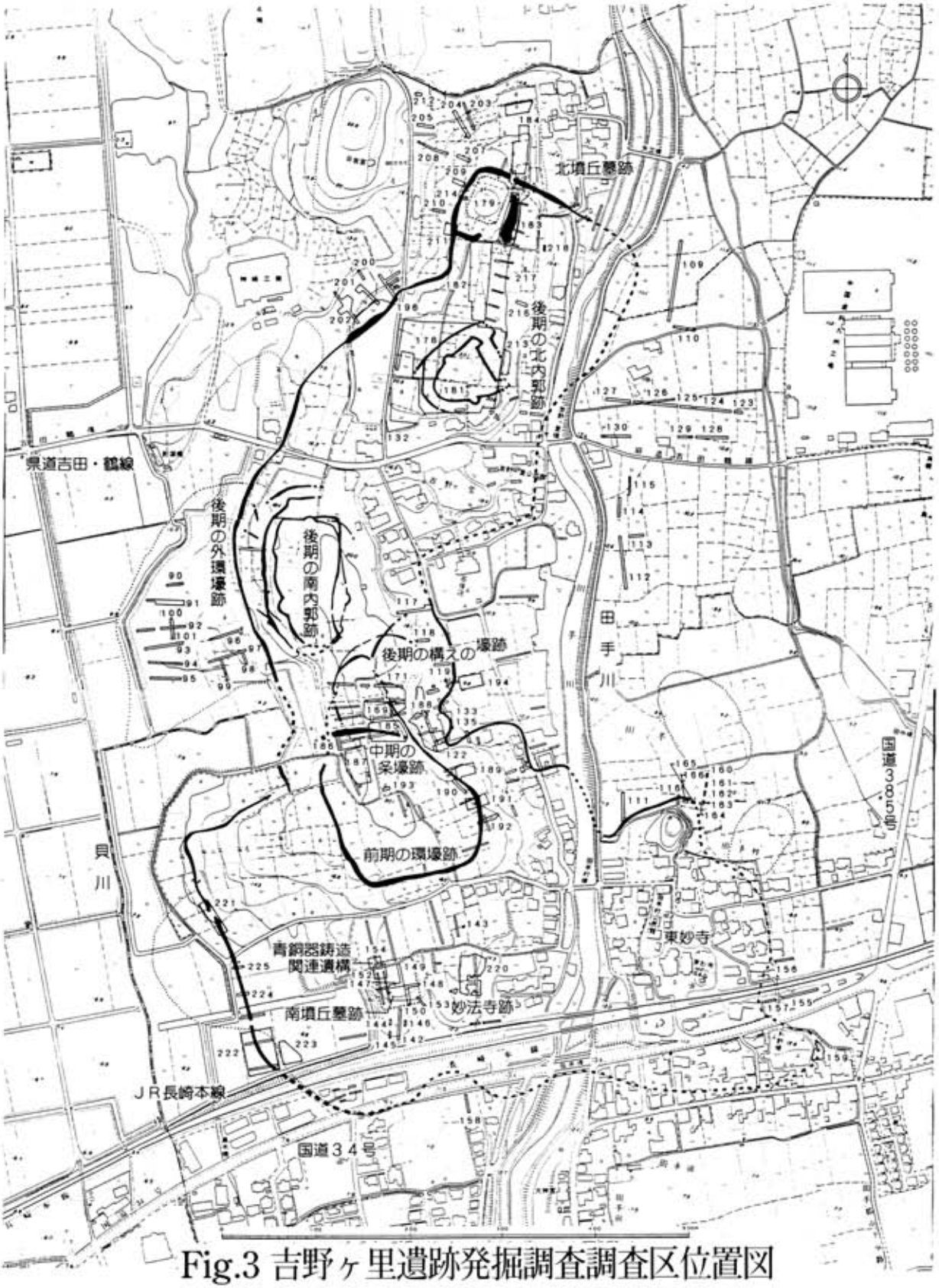


Fig.3 吉野ヶ里遺跡発掘調査調査区位置図

133・134・173・174・119調査区では斜めに穿たれた小穴群が多数発掘されたが、防禦用の逆茂木状の杭群と考えられた。

④段丘南端部（第142・144～146・158・167・168調査区）

ＪＲ線と国道34号の間の平成２年度の三田川町教育委員会による調査では、段丘南西裾部が確認され、弥生時代中期と考えられる掘立柱建物跡と考えられる柱穴群が確認された。このため国道南に第158調査区を設けて調査したが、弥生時代から中世の遺物を多数含んだ湿地の包含層が広がっていることが判明した。また、ＪＲ線すぐ北の第142・144～146・167・168調査区でも、外環壕の延長と考えられる溝跡は確認できなかったため、環壕集落の南端はＪＲ線と国道の間付近、一部国道南まで延びると考えられた。なお、遺跡南西ＪＲ線すぐ北の第222調査区の平成８年度の調査で、幅４～５ｍの外環壕の延長部分（出入口の陸橋あり）が発掘され、当初の推定線より西へ拡がることが判明した。

以上のことから環壕集落の範囲は、平成元年度までの調査で明らかになった西側に加え、南ではＪＲ長崎本線と国道の間付近（一部国道南まで）から現在の田手川の位置で北方へ谷状に入り込み、段丘南東端（第159調査区付近）、さらには北方の段丘東裾部を含む範囲と考えられる。県道以北では環壕跡らしい遺構は全く確認できなかったが、現在の田手川の路線内側（西岸）あたりまでの範囲と考えられる。田手川西岸の南内郭跡南東地区で確認された溝跡は外環壕の可能性があり、南内郭跡西方の高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡群の分布範囲約2.2haを加えた吉野ケ里遺跡環壕集落の範囲は約40haと推定された。しかし、現在の田手川の路線は段丘南部で時期は不明であるが段丘を開削したことは明らかで、推定される弥生時代の河道は第155～157調査区が示すように現在の田手集落が存在する田手川東岸の段丘を大きく囲んでいたものと考えられる。また、南内郭跡南東の谷部に旧河道が存在しなかったことは平成元年度の調査で明らかになっており、これまでに段丘東側で明確に外環壕と確認できる遺構が検出されていない現状を踏まえると、あるいは旧田手川によって環壕集落の東が画されていた可能性も考えられる。その場合の面積は約44.5haと考えられる。

(2)その他の調査

平成３年度以降は未発掘地域の内容解明に重点を絞って調査を実施した。後に述べる北墳丘墓と北内郭跡、妙法寺跡を除く各地区の主な調査概要は以下のとおりである。

①青銅器鋳造関連遺構（田手二本黒木地区Ⅲ区、平成２年度調査）

平成元年度の確認調査で、段丘の南端近く（田手一本黒木地区Ⅰ区）に設定した第７調査区から国内出土銅矛としては最古式の細形銅矛の型を彫り込んだ鋳型が出土し、また、その北端から北西約８ｍの位置から北方向に設定した第11調査区の南端から大型の土壙の一部が検出され、弥生時代中期初頭から前半の土器とともに錫塊や焼土塊・炭化物などが出土したので、平成２年度に一帯の表土を除去し、第154調査区を設け面的な確認調査を実施した。

この遺構（第154調査区ＳＫ04土壙）は、第154調査区内では幅約６ｍ、長さ約８ｍの長さで、深さは約1.2ｍ～1.4ｍであり、南へわずかに傾斜している。土壙の北、東、西側の法面は摺鉢状に傾斜しており、東側には地山を階段状に掘り込んだ部分があった。土壙の床面には、貼り床らしい赤褐色土粘土塊の混じった黄褐色粘質土が20cm～40cmの厚さ堆積していた。遺構の北端近くには径約60cmの柱穴があり、この土壙に上屋などの上部構造

が存在していた可能性もある。

土壙内の埋土からは弥生時代中期初頭から前半にかけての弥生土器とともに多数の遺物が出土した。銅剣・銅矛の鋳型片、青銅（錫分が多いものも含まれる）片、鉱滓、炉壁と考えられる焼土片、炭化木、灰などの鋳造関連遺物の他に、鋳造鉄斧の破片を最利用した鑿や青銅製素環頭をもつ鉄製刀子、翡翠の管玉や碧玉製の管玉・ガラス製の小玉、壺形土器の中に入った状態のイノシシ類の焼骨などがある。遺物の概要については、先の概要報告書（佐賀県教育委員会『吉野ケ里（神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書）』1992年３月）に記しているので省く。

この土壙内において炉跡本体の確認はできなかったが、土壙床面の特殊な貼り床の状況や炉の破片と考えられる焼土塊、多数の焼土塊、炭化木、灰の出土などから、この土壙が青銅器鋳造に直接関係する遺構である可能性がきわめてつよいと言える。この土壙から出土した遺物や、第７調査区出土の細形銅矛鋳型片や、仮称南墳丘墓に設けた第147調査区で墳丘盛土を掘削した中世の溝跡付近で出土した銅矛の内型（中子）などは、ほぼ同時期の鋳造関連遺物であり、将来広範囲の発掘調査によって一帯の状況を明らかにする必要がある。

②南墳丘墓（田手一本黒木地区Ⅰ区、平成２年度調査）

平成元年度の確認調査で、上記の第７調査区に並行して東約５ｍの位置に設定した第８調査区のトレンチ壁面に平成元年３月の調査で７基の甕棺墓が発掘され銅剣５本やガラス製管玉79個などが出土した北墳丘墓の盛り土と同様な構築技法で盛ったと考えられる土層を確認した、この調査区の東に接して南北約40数ｍ、東西約30ｍの高まりとなっている畑地が存在するので、この丘の性格を把握するために平成２年度に確認調査を実施した。

調査は墳丘状の丘のほぼ中央を起点としたトレンチを十字形に設定し、基盤となっているローム層まで掘り下げた。盛土の状態や、盛土に掘り込まれた遺構、さらには基盤に掘り込まれた遺構などの検出、およびその年代を調査することにした。

調査の結果、トレンチで確認できた盛土の遺存範囲は東西約45ｍ、南北48ｍ以上であり、盛土は最も堆積している部分で 2.8ｍの厚さであった。盛土の方法は、北墳丘墓と同様、基盤となっている黄褐色系のローム層と当時の表土と考えられる黒色系の土を堆積させ版築様（夯土）に小山を幾つも築きながら全体を高めるものと考えられる。

盛り土に掘り込まれた遺構は、中世のものと考えられる溝（壕）と考えられるもの以外には、中心から北へ向かって設定した第149調査区の中央やや北で検出した大型の土壙墓状の遺構のみであった。この土壙墓状の遺構は、長さ2.57ｍ、幅0.98ｍ、深さ 0.9ｍの東西方向の土壙で、筵状に編んだ植物が敷かれた状態で出土した。弥生時代のものと考えられる。

盛土内から出土した土器の大半は弥生時代中期初頭から中期前半のものと考えられる。北の第 149調査区の南端と南の第 150調査区の中央からそれぞれ１基と２基の平面円形の竪穴住居跡の一部と考えられる弥生時代中期初頭から前半にかけての遺構が検出され、また、西の第 151調査区の東端からも中期初頭のものと考えられる貯蔵穴跡が検出されているが、特に第 149調査区の遺構は埋土の堆積状況から一挙に埋め戻されたものと考えられる。第150調査区の遺構の柱穴跡からは朝鮮半島系の粘土帯土器や牛角把手などが出土している。

これらのことから、この墳丘状の丘は、北墳丘墓と同様、弥生時代中期初頭から前半までの竪穴住居などを一挙に埋め立て、中期前半の内には築造されていたものとみられる。盛土に切り込まれた遺構のうち弥生時代のものと考えられるものは先の土壙墓状遺構のみであり、甕棺墓など明確に墳墓と言える遺構は未検出であり、近い

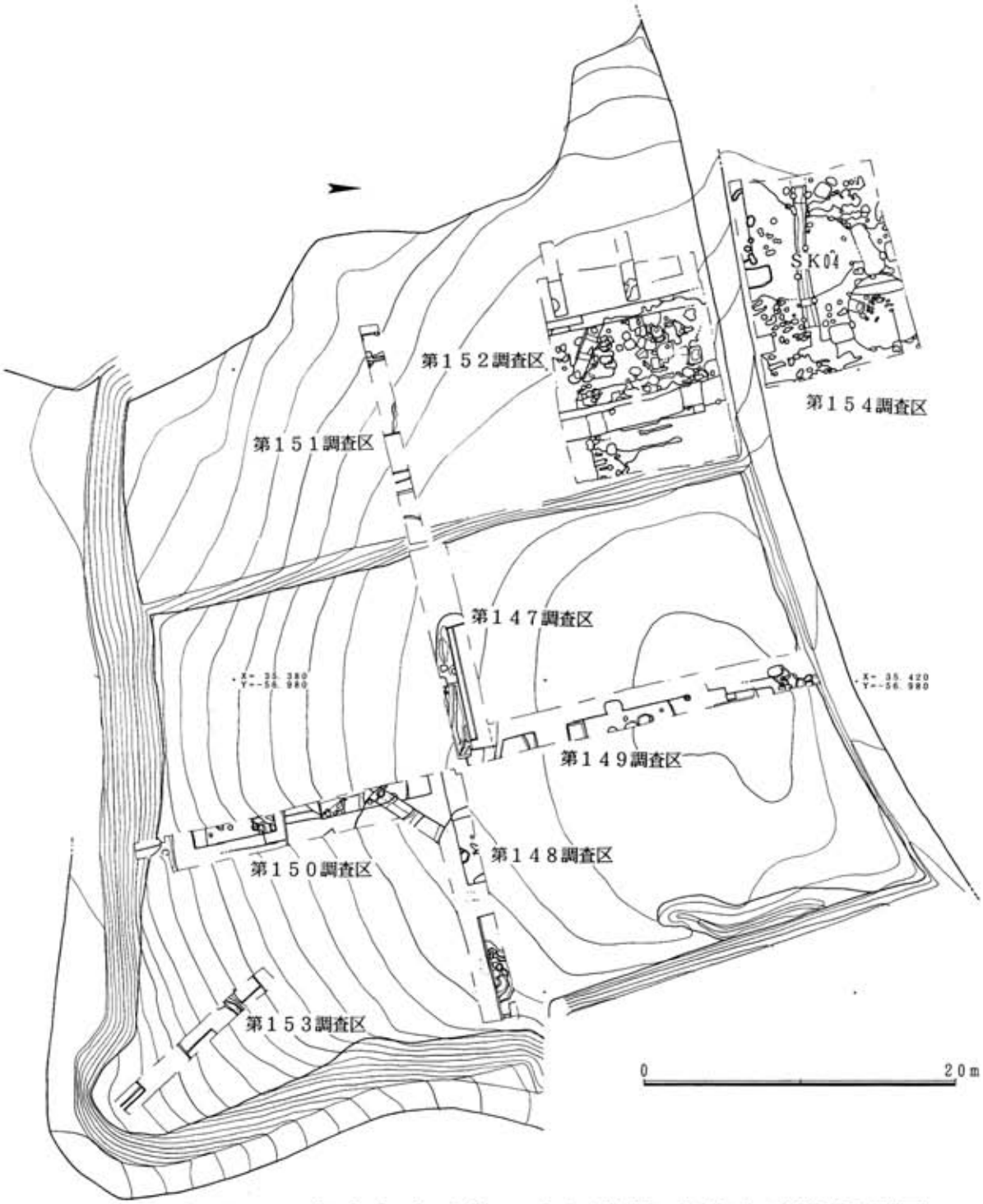


Fig.4 吉野ヶ里遺跡南墳丘墓・青銅器鋳造関連遺構実測図

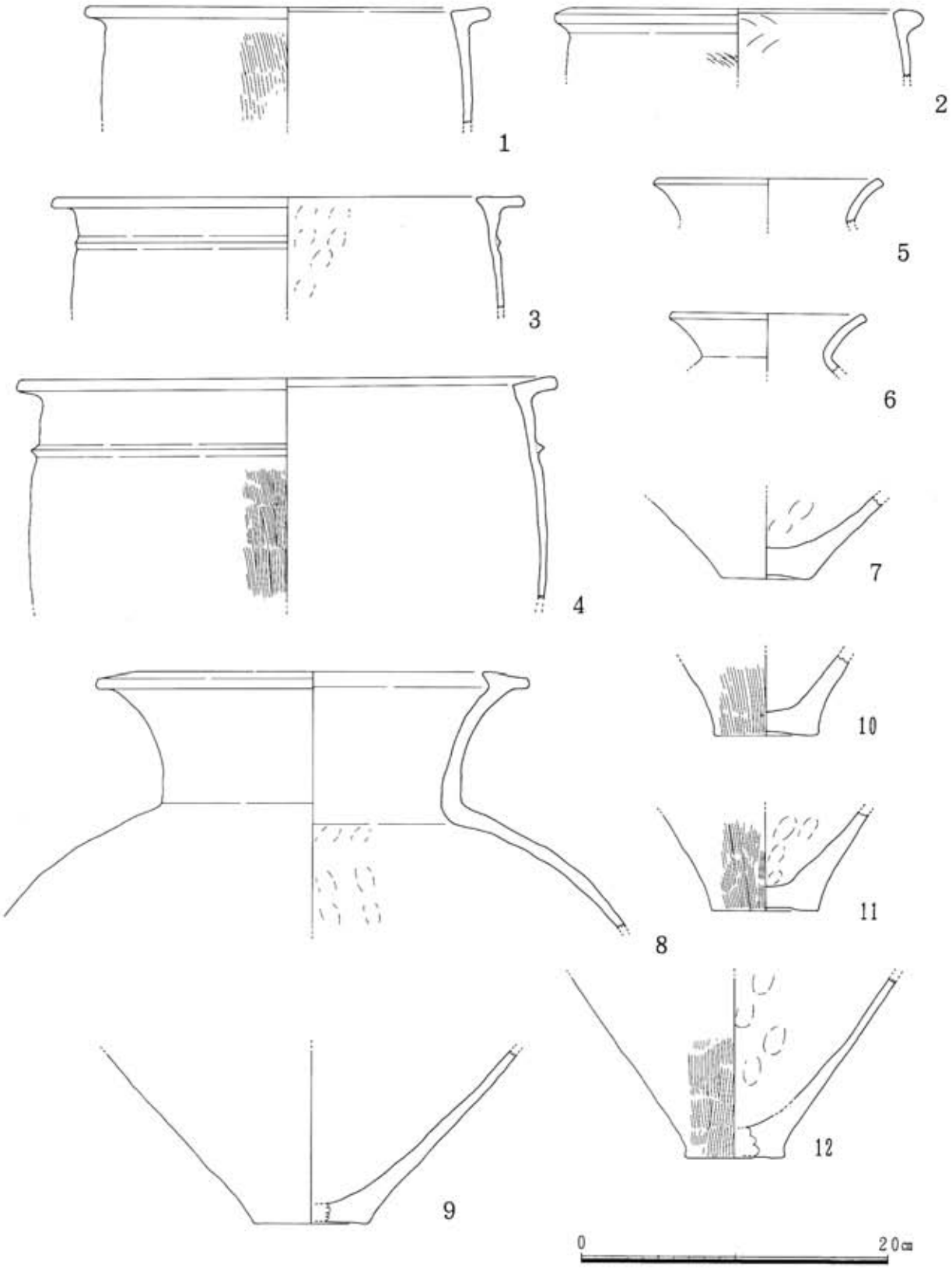


Fig.5 吉野ヶ里遺跡青銅器鋳造関連遺構出土弥生土器実測図

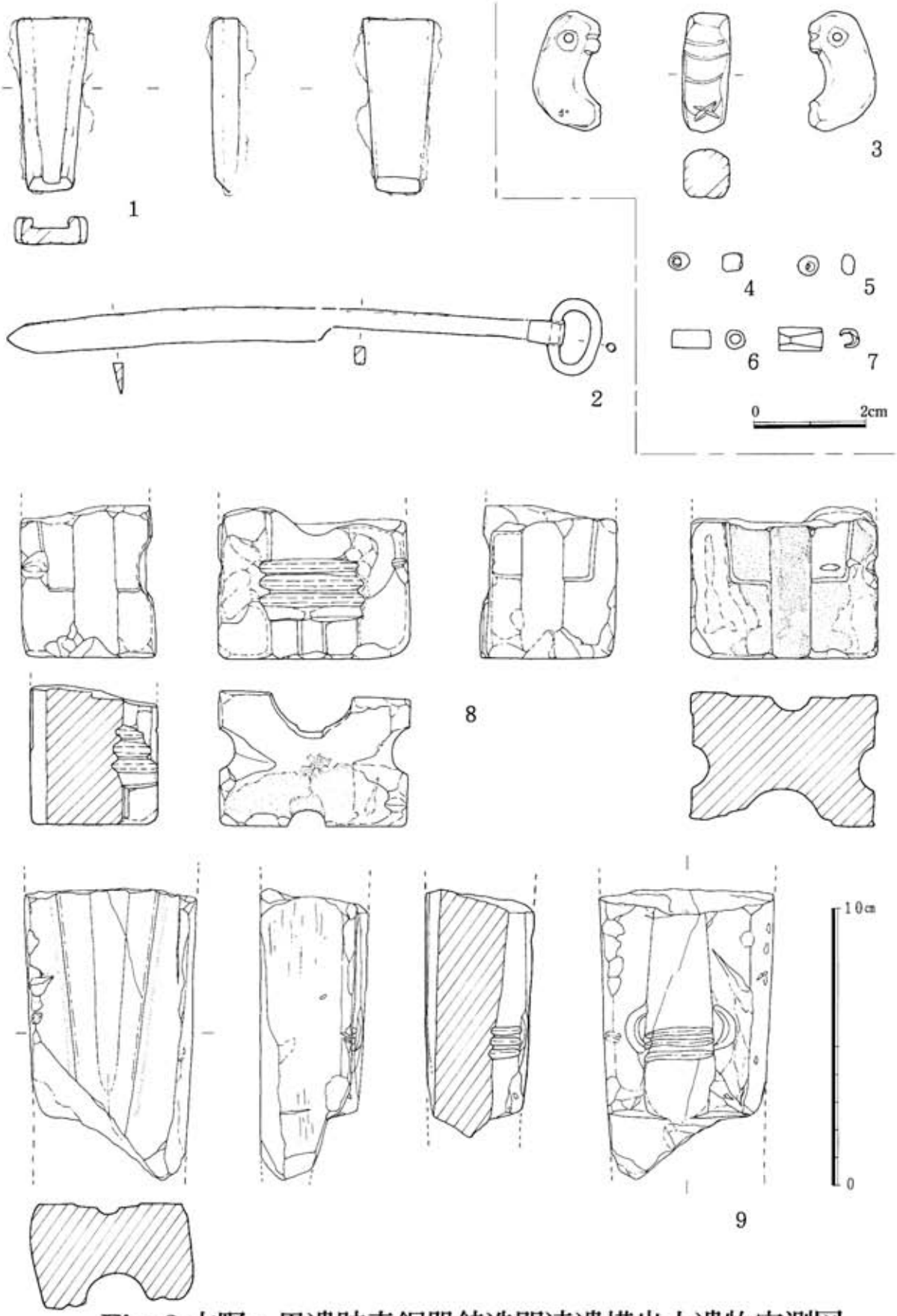


Fig.6 吉野ヶ里遺跡青銅器鋳造関連遺構出土遺物実測図

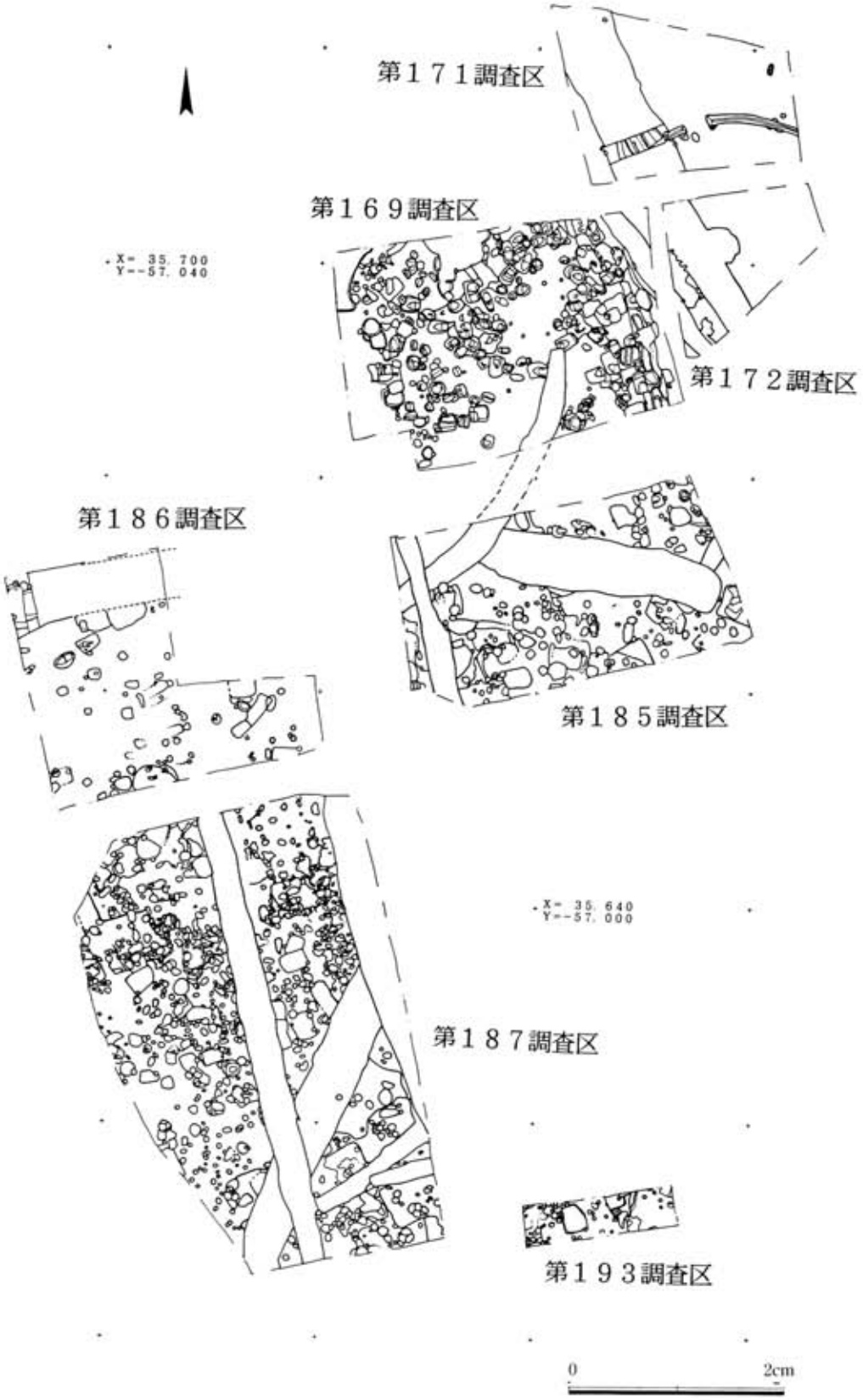


Fig.7 吉野ヶ里遺跡南内郭南方の調査区遺構分布図

将来再調査を実施して、この盛土された丘の全体規模や構造、この丘に伴う遺構などを明らかにするとともに、墳墓であるのかどうかについて確認する必要がある。

③南内郭跡南方・南東方（吉野ケ里丘陵地区Ⅶ・Ⅷ区、平成３・６年度調査）

平成３年度は、現在仮整備し公開している南内郭の南に接する地区の段丘尾根上の状況を知るために調査を実施した。吉野ケ里丘陵地区Ⅶ区の第 169調査区（約 580㎡）では弥生時代の甕棺墓 118（103?）基、土壙墓２基、壕・溝跡５条、土壙約20基などを発掘した。

甕棺墓は弥生時代前期末の金海式期に出現（全体の約18%）し、中期初頭の城ノ越式期と中期前半の汲田式期に増加（どちらも約37%）し、中期中頃の須玖式期の確実なものは１基のみであった。成人用と小児用の比率は成人用63%、小児用37%である。なお、甕棺墓については墓壙と棺内の埋土を完全に除去したものはなく、甕棺の口縁部の破片などを取り上げたに過ぎない。土壙墓は２基確認したが、うち１基には棺材の板の痕跡が残っており、木棺墓の可能性がたかい。墳墓に伴う副葬品などは出土しなかったが、甕棺内から少量の人骨片が出土した。

弥生時代後期のＳＤ壕跡は、幅 1.3ｍ～ 2.3ｍで断面は逆台形となっている。調査区の南端東寄りの位置から北へ約10ｍ区間検出したが、北端で途切れている。出入り口などの施設と考えられるが、調査区内では北側の壕跡は確認できなかった。内部からは後期後半を中心とした弥生土器群とともに、小形仿製鏡１点や鉄器１点が出土した。

また、第 169調査区の東および北東に設けた第 171調査区では弥生時代前期の溝跡（第 171調査区のＳＤ01）や中世の溝跡（第 171調査区のＳＤ02）などが確認された。弥生時代前期の溝跡は、一帯は後世の削平がひどく遺存状態が悪いが、幅 0.6ｍ～ 1.0ｍで、径約13ｍの平面円形に巡っているようであり、この弧の北部の西よりには幅 2.2ｍの掘り残しの出入り口部が存在する。断面形態はコ状に壁が立ち上がっているが、おそらく断面Ｖ字形の壕の最下部の直に掘られた部分だと考えられる。この溝跡の南および東への延長線は削平がひどく確認できず、この溝跡が昭和63年度に約 150ｍ区間発掘し、平成元年度にその延長線の行方を調査した田手二本黒木地区の段丘尾根を囲んで掘削された弥生時代前期の環壕の北への延長部分に当たるものか、単独に平面円形に掘削されたものかは不明であった。

平成６年度は、先の第 169調査区の南および東、南東一帯（吉野ケ里丘陵地区Ⅶ区）の確認調査を実施し、弥生時代から中世にかけての遺構を多数確認した。

吉野ケ里丘陵地区Ⅶ区の第 190・ 191・ 192調査区で、田手二本黒木地区の段丘尾根を囲んで掘削された弥生時代前期環壕跡の東側壕の北への延長線（ＳＤ1957）が確認された。第 191調査区の環壕跡周辺では弥生時代中期初頭から前半にかけての27基の甕棺墓群が検出されたが、ほとんどの甕棺が環壕跡に切り込んで営まれていたり、墓壙が環壕の肩と一致しているなど既に埋没していた環壕の存在は意識していたものと考えられる。

吉野ケ里丘陵地区Ⅶ区と田手二本黒木地区Ⅰ区付近に存在する段丘くびれ部（第 185・ 186調査区）では、段丘を南北に分断するような幅４ｍ前後、深さ 2.5ｍ以上の断面逆台形の弥生時代中期の大規模な壕跡（ＳＤ1801）を検出した。第 185調査区の南西隅では、この壕跡の掘り残して設けた出入り口跡が確認されたが、幅は 1.5ｍ前後と狭い。この壕跡とは別に第 187調査区で確認された断面逆台形の中期の壕跡（ＳＤ1836）も幅４ｍ前後と大規模であるが、遺存していた深さは約 1.5ｍであった。

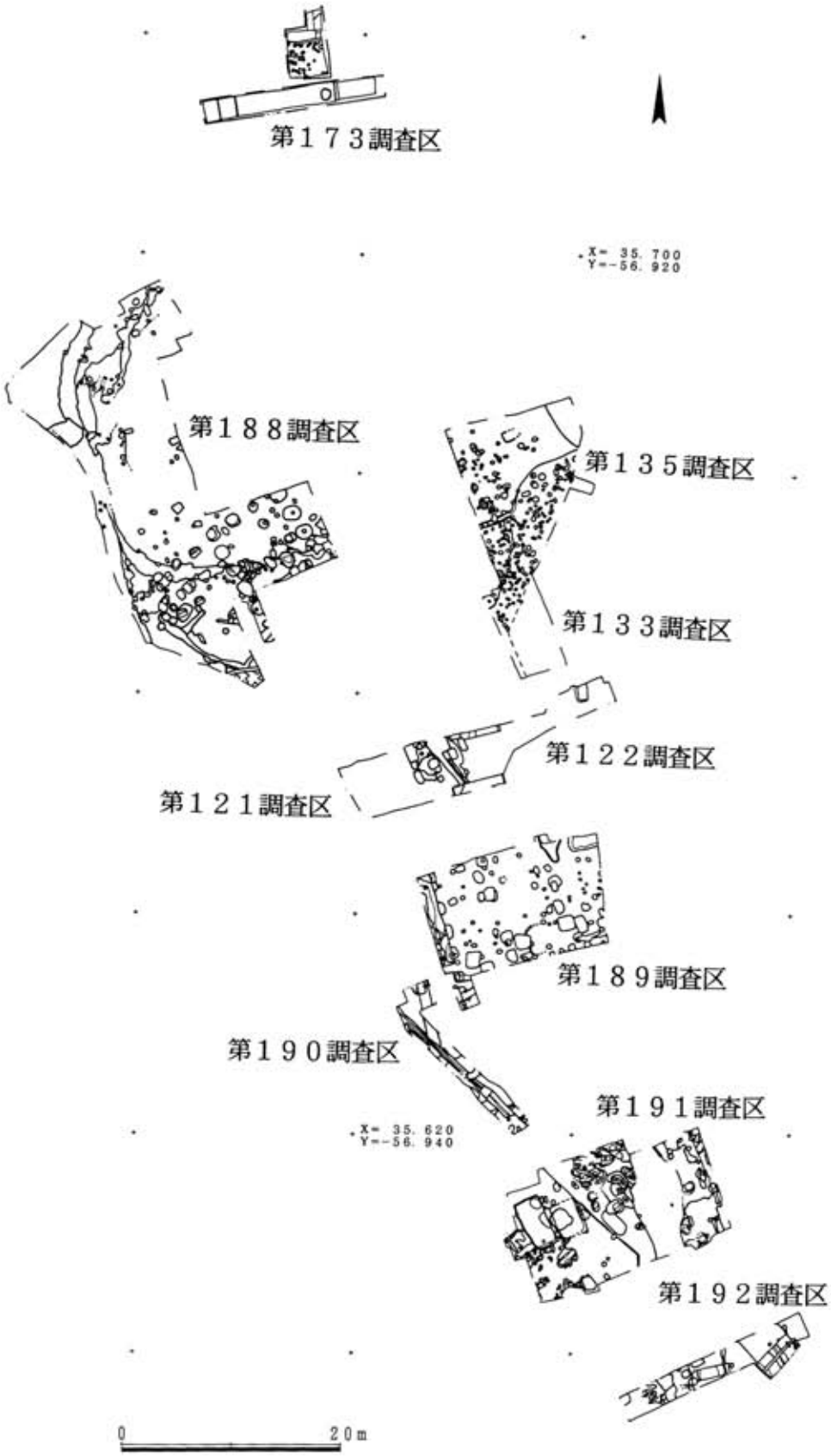


Fig.8 吉野ヶ里遺跡南内郭南東方の調査区遺構分布図

確認された前期から後期にかけての溝跡や環壕跡に伴う陸橋による出入り口跡は、特にこの周辺に集中しており、段丘くびれ部に東西から入り込んでいる谷が集落中心部へ至る主要な通路であったものと考えられる。この中期の壕跡の南方ではこれまでに中期の大きな墓地は確認されておらず、北方には近接して吉野ケ里丘陵地区Ⅶ区第169調査区の前期から中期にかけての甕棺墓地、その北には吉野ケ里丘陵地区Ⅲ区の弥生時代中期の甕棺墓地、さらに北方には大規模な甕棺墓地が営まれており、この環壕は中期段階において居住区と墓域とを区画する機能をもっていたものと考えられる。

第185・186・187調査区では、幅約3m、深さ約1mの断面逆台形の溝跡を含む弥生時代後期の溝・壕跡を数条確認したが、将来広域的な調査を実施し、設けられた意味や内容などを明らかにする必要がある。一帯からは中期から後期にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物跡を数基確認したが、特に後期の遺構は他の地域に比べると数・密度はともに少ない。積極的な土地利用がおこなわれていなかったのか、遺構として残りにくい施設が存在したのか、また、広場として利用されたのかは、今後の周辺の広域的な調査によって判明するものと考えられる。また、東側くびれ部に設けた第188調査区では、中世の遺構群の下部で弥生時代中期に埋没した幅23m以上で東方へ開く谷の跡を確認した。周辺の調査結果を考え合わせると人為的な谷とも考えられる。

一帯では弥生時代以降のものとして中世の壕跡や掘立柱建物跡などを確認したが、この周辺は東妙寺や妙法寺、石塔院などの中世以来の3寺院や、戦国時代以降の城郭などが展開した場所であり、これらに関連する遺構であることは間違いない。

④北墳丘墓周辺（吉野ケ里丘陵地区Ⅴ区、平成5・7年度調査）

平成5年度は、4年度実施の北墳丘墓の再調査を受けて、墳丘墓の南と北東に位置する甕棺墓を主体とする弥生時代墓地および墳丘墓東に存在する大型土壙の調査を実施した。この区域は昭和63年度の神埼工業団地計画に伴う発掘調査によって表土のみを除去し、甕棺墓の分布状況と時期、大型土壙の存在の確認のみにとどめていた。

墳丘墓南（第182調査区）では、1,886㎡の調査区内で、弥生時代の甕棺墓227基、、祭祀土壙10数基、掘立柱建物跡3基などを確認した。なお、甕棺墓については墓壙と棺内の埋土を完全に除去したものは少なく、甕棺の口縁部の破片などを取り上げたに過ぎない。甕棺墓群は南北方向に帯状に分布しており、中央部に1.2m前後の道状の空白地が存在する。弥生時代前期末の金海式期に出現し、中期中頃の須玖式期まで存続している。各時期の数の比率は、発掘の際の観察によると、金海式期が15%、城ノ越式期24%、汲田式期39%、須玖式期22%となっており、北墳丘墓の埋葬終了時期とほぼ同時期に埋葬を終了している。成人用と小児用の比率については成人用約91%、小児用約9%と、小児用の占める割合が極めて小さい。この空間が墓地として利用され始めた金海式期の甕棺墓群は幾つかのグループをなして特に中部から南部にかけて分布しているが、汲田式期になると先の通路状の空白地の両側に沿って甕棺が分布している。須玖式期になると、この空白地と角度を違えるものや列から離れるものが多くなる。甕棺内からは数体分の人骨が出土したのみで、副葬品など目立った遺物は出土しなかった。

墳丘墓北東（第184調査区）では、北区（422㎡）と南区（751㎡）を合わせて、甕棺墓130基、土壙墓1基、箱式石棺墓1基、祭祀土壙1基などを確認した。なお、甕棺墓については墓壙と棺内の埋土を完全には除去しておらず、棺内から遺物を出土した甕棺数基以外は、甕棺口縁部の破片などを取り上げたに過ぎない。北区と南区の北部と南部は、後世の畑開墾による削平がひどく、元来の甕棺墓分布は不明であるが、南区中部では甕棺墓群が径約30mの平面円形に分布していた可能性がつよい。このような甕棺墓の円形配置は、工業団地計画に伴う発掘調査でも数箇所で確認されており、墳丘墓に葬られたような特別な身分をもつ集団ではない一般的な身分の集

Fig.9 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓南と北東の弥生時代墓地遺構分布図

団の中にも、集団墓地の中で特別に区画された墓域をもったものが存在したことを示している。

北墳丘墓北東の両調査区では、甕棺墓は弥生時代前期末の金海式期から城ノ越式期にかけての時期に出現し、大方中期中頃の須玖式期まで存続している。各時期の数の比率は、発掘の際の観察によると、金海式期・城ノ越式期５％に満たず、汲田式期40％、須玖式期25％、中期後半の立岩式期と後期初頭の桜馬場式期がそれぞれ１基（１％未満）となっており、２基を除いて北墳丘墓の埋葬終了時期とほぼ同時期に埋葬を終了している。なお、成人用と小児用の比率は成人用71％、小児用29％である。

この円形墓域のほぼ中央に位置すると考えられる隣合う２基の甕棺墓（ＳＪ1768・ＳＪ1777）の棺内から人骨とともに多数の布片が出土した。ＳＪ1768甕棺墓は中期前半の汲田式期の甕棺を用いた成人墓で、下甕に収まった人骨人骨の胸の位置から臍の位置にかけて多数の破片が出土した。うち腹部から腰付近で縫い合わされた大きな布片を発見した。ＳＪ1777甕棺墓は中期初頭の城ノ越式期の甕棺を用いた成人墓で、傾斜角度がつよいため人骨とともに布片も下甕下部へずれ落ちていた。

この布片は京都工芸繊維大学の布目順郎名誉教授の分析によって絹布であることが判明したが、縫い目をもつ布片の発見は重要である。ＳＪ1768甕棺墓の２点はいずれも縫い目を境にして経糸と緯糸の方向が逆（直交）になっており、明らかに２枚の布を縫って繋げたものである。細かく観察すると、緯糸はほつれ易いため先端を三つ折りしてかがり、他方の布の先端付近の経糸と縫合しているようである。身頃と袖の縫合部分である可能性がある。なお、ＳＪ1777甕棺墓も小片ではあるが縫い目のある絹片が出土している。

他の出土品としては、人骨や、磨製石剣の切っ先片と打製石鏃などがある。中期のＳＪ1740甕棺墓は棺内に人骨は遺存していなかったものの、磨製石剣の切っ先片１点と打製石鏃２点が棺底から出土しており、元来被葬者の体内に刺さっていたものと推定される。同地区のＳＪ1716甕棺墓棺内からも打製石鏃１点が出土した。

墳丘墓東に存在する大型土壙の調査は、遺構が存在する範囲の表土をすべて除去し、さらにトレンチを設けて全体の規模や形態、時期などについて調査した。調査の結果、この土壙の規模は南北約53ｍ、最大東西幅約13ｍで、深さは２ｍ以上遺存していた。この土壙の東西方向に８本のトレンチを設けて、深さや埋土・遺物の堆積状況を調査した。人為的に埋められた様子はなく、大量の土器などを含んで自然に堆積したものとみられた。

土器は弥生時代中期中頃以降の祭祀用のものを含み、後期後半の時期のものまでを含んでいる。北墳丘墓築造以前は表面を覆っていた黒色（暗褐色）表土の下層に、この土壙の壁で確認される褐色系・黄色系・黄白色系などのローム層が堆積していたものと考えられる。北墳丘墓は前に報告したとおり、黒色（暗褐色）土や褐色系・黄色系・黄白色系などのローム層を積み上げて築造されているが、周辺でこの掘り上げられた土は確認されないので、この土壙掘削の主目的はおそらく墳丘盛土用の土の採掘ではなかったかと考えられる。北墳丘墓の北を巡る外環壕周辺にも、外環壕掘削以前の東西約25ｍ、南北約16ｍの平面楕円形の大型土壙を確認しているが、この土壙も盛土用の土の採掘跡であった可能性が高い。

平成７年度は、北墳丘墓の北方から西方にかけての確認調査を実施した。北墳丘墓が存在する段丘尾根の北斜面に設けた第206調査区では弥生時代後期初頭の甕棺墓１基と土壙墓１基が、その北方の段丘斜面から裾部に設けた第203・204調査区では弥生時代中期前半の竪穴住居跡15基と古墳時代（６世紀）の竪穴住居跡１基を検出した。また、墳丘墓南西の第211調査区では弥生時代後期の外環壕の出入り口部や、中期後半から後期初頭にかけての甕棺墓４基、古墳時代（６世紀）の竪穴住居跡２基などを、第210調査区では中期後半から後期初頭にかけての甕棺墓２基を検出した。

第211調査区の外環壕跡の調査では、環壕跡の規模が最大幅は5.7ｍで、深さは1.85ｍ遺存していた。出入り口

と考えられる幅約 6.5ｍの陸橋部を確認した。この陸橋部は、吉野ケ里地区Ｖ区の南内郭と西方の高床倉庫と考えられる掘立柱建物群とを結ぶ外環壕の陸橋部と同様、環壕を断面Ｖ字形に掘削した後、底の部分に木製樋管を設置して埋め戻し、通路としたらしいことを、環壕跡埋土下層の土層から判断した。この陸橋を東に渡ると、東進したのち北へ屈曲し墳丘墓の南正面へ通じる底が平坦な道路状の溝へと通じる。

⑤南部外環壕出入口周辺（田手二本黒木地区Ⅱ区第 221調査区、平成７年度調査）

昭和63年度の工業団地計画に伴う発掘調査で路線が確認されていた外環の出入り口跡の詳細な構造を知るために、第 221調査区を設けて調査を実施した。その結果、弥生時代後期の外環壕２条とその間の掘り残しの出入り口（陸橋）部、弥生時代前期の竪穴住居跡２基と貯蔵穴跡５基、平安時代の井戸跡３基、主に弥生時代のものと考えられる柱穴群や小穴群などが確認された。

外環壕出入り口部は、幅約 7.0ｍの掘り残しの陸橋で、北壕の南端を西側へ、南壕の南端を東側へずらし、さらに環壕の内側の平坦面を環壕側へ突出させた極めて特殊な構造となっていた。調査区内での環壕の規模は幅４ｍ前後で、断面形態はＶ字形を基本としているが南部にいくに従って底面が平坦に近くなっている。平成７年度にこの調査区の南端から南東約40ｍと60ｍの位置に設けた田手二本黒木地区Ⅲ区の第224 ・225 調査区で、この外環壕の南への延長部分を確認したが、断面形は底広く平坦な逆台形となっていることが判明し、段丘裾部から低地の平坦部付近の地形変換地点付近で、断面形態に変化が生じていることを確認した。弥生時代前期後半の竪穴住居跡２基（ＳＨ 268・ＳＨ276 ）はどちらも平面円形で、復元径はそれぞれ 4.3ｍと推定 5.4ｍの規模であるが、双方とも全域調査を実施していない。ＳＨ 268竪穴住居跡の内部には中央に炉状の穴とその両側に小穴、その周囲を主柱穴が平面円形に巡るが本数は不明である。また、壁に沿って位置にも浅い穴が巡っているが、半円の範囲で７個存在する。ＳＨ276 竪穴住居跡も周囲の壁に沿って穴をもつ同様な携帯である。

また、平安時代の井戸跡群を確認したことは、吉野ケ里地区Ｖ区の高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡群の集中地区内で昭和61年度の調査などで確認された平安時代の井戸跡群とともに、一帯の広範囲に平安時代の居住区が存在していたことを示した。

出入り口跡南北の外環壕の埋土中には後期前半から後半にかけての多数の弥生土器が存在していたが、出入り口部付近では壺形土器の完全に近いものが多数を占めていた。出入り口と深い関係をもって供献された可能性がある。また、これら土器群とともに青銅製鏃が出土した。弥生時代のものとしては珍しい柳葉形に近い形態である。茎の一部が欠損している。現存長2.90cm、現存最大幅1.35cm、厚さ0.48cm、重さ 2.0ｇである。

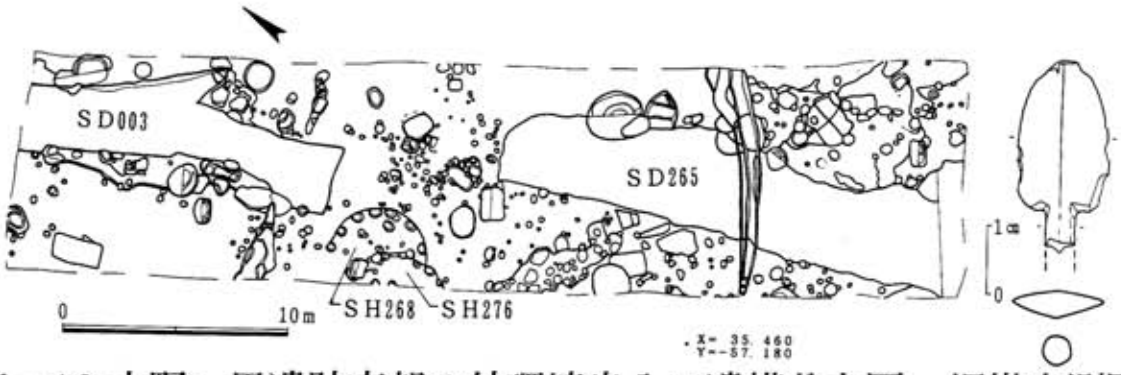


Fig.10 吉野ヶ里遺跡南部の外環壕出入口遺構分布図・銅鏃実測図

2．北墳丘墓

吉野ケ里丘陵地区Ⅴ区の北寄りの段丘上に存在するＳＴ1001墳丘墓は、平成元年度と平成４年度の２回調査を実施した。平成元年度は７基の甕棺墓を発掘し、把頭飾付き有柄銅剣をはじめとする細形銅剣５点、青銅製把頭飾１点、ガラス製管玉79点、絹布片、被葬者２人の人骨や歯の破片などが出土した。また、この時の調査で、墳丘は南北40ｍ～45ｍ、東西30ｍ弱の平面隅丸長方形か長方形の四隅を切り落としたような形態で、工法的には幾種類かの土を版築状に盛り上げたことが判明し、高さも本来4.5ｍ以上の大規模なものであったと推測した。

(1)遺構

平成４年度は、この墳丘墓の全容解明と将来の整備のための資料を得るため調査を実施した。調査の結果、新たに７基の甕棺墓が発掘され、棺内より３点の銅剣と青銅製把頭飾１点、人骨片が出土した。さらに、墳丘頂部の南北28ｍ、東西18ｍの範囲は、中世の城郭造営により削り取られているらしいことと、昭和29・30年前後の畑地開墾などによって削平を受けていることが明らかになった。しかし、墳丘の規模は、墳丘盛土が残存している範囲や、墳丘上部の平坦面の埋置された甕棺墓の位置・残存状況から甕棺墓が分布している南北27ｍ、東西15ｍの残存墳丘上の平面長方形の範囲がほぼ墳丘上部の平坦面と考えられる。また、盛土が存在する範囲が南北37.5ｍ、東西25.5ｍの平面長方形の部分であるので、元来の墳丘規模はかなり大きかったと考えられる。

墳丘の遺存状態がよかった大阪府加美遺跡の墳丘法面の傾斜角度などを参考にして、長辺側（南北）の法面を約35°、短辺側（東西）の法面を約30°と仮定してこの北墳丘墓の規模を復元すれば、南北約46ｍ、東西約27ｍということになる。墳丘の元来の高さについては、ＳＪ1005甕棺墓やＳＪ1009甕棺墓のように辛うじて甕棺が遺存する程度まで削平を受けていたので、甕棺墓一般の甕棺が埋置されている深さ２ｍ前後を、盛土が残存している高さ約2.5ｍに加え、最低約4.5ｍと推定している。

①甕棺墓の分布

平成元年の調査結果と削平状況などから、墳丘墓内には14基以上の甕棺墓が存在したことになる。甕棺は、汲田式と須玖式（弥生時代中期前半から後半）のものである。甕棺の器体の大半は昭和の開墾によって上半部（上甕）を破壊されたものが多く、内部にまで開墾時の土が入り込んだものが多い。

墳丘墓内ではもっとも古い汲田式期のＳＪ1006甕棺墓を取り囲むように順次埋葬が行われているが、基本的には、長方形と考えられる墳丘の平面形の長軸あるいは短軸方向に埋置されている。最古のＳＪ1006甕棺墓と同様、南北方向に埋置された甕棺墓が古く、東西方向に埋置された甕棺墓が新しいといった傾向が窺える。新しい須玖式期の甕棺墓の埋葬の順序にも規制があったらしく、概ね南から逆時計回りで埋葬が行われている。把頭飾付き有柄銅剣を出土したＳＪ1002甕棺墓が、須玖式期のものの中では二番目に新しい形態の甕棺を用いており、その北側に位置するＳＪ1050甕棺墓に用いられた甕棺が最も新しい形態のものである。この甕棺墓の南側に存在する空地が、次に埋葬が行われるべき位置であった可能性も考えられる。

②甕棺墓

墳丘盛土内で確認された14基の甕棺墓の墓壙は、すべて上部から掘りこまれていることが確認された。

14基の甕棺墓はいずれも甕と甕をあわせた大型棺であるが、上部の削平のため上甕はほとんど壊され、残りが悪い。時期的には中央部に位置するＳＪ1006甕棺墓が最も古く、中期前半の汲田式期の段階のものと考えられ、

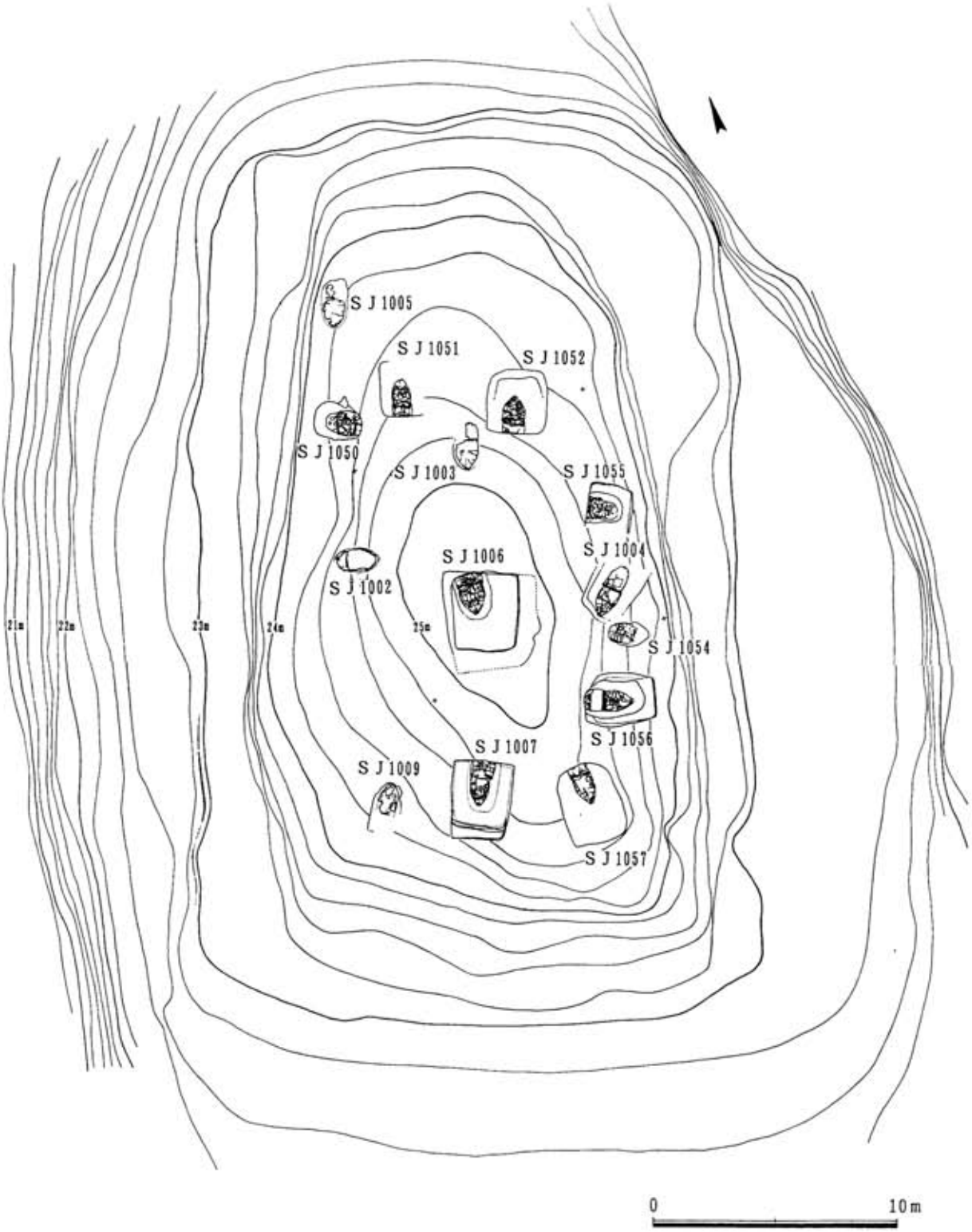


Fig.11 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓甕棺墓分布図

次いでその北側にＳＪ1050甕棺墓が、次いで須玖式期の甕棺墓が周辺に埋置され、最後にＳＪ1005・1002・1050・1057甕棺墓が埋置されたものと考えられる。

これら14基の内８基から副葬品などの遺物を出土した。棺内から副葬品などの遺物が出土しなかった他の６基の甕棺墓は、昭和の開墾によって棺内まで破壊されたものがほとんどであり、これらの甕棺墓が元来銅剣などが副葬されていたか否かは不明である。ただし、ＳＪ1052甕棺墓は、比較的遺存状態がよかったにもかかわらず、青銅器などの出土はなかった。

③各甕棺墓の概要

ＳＪ1002甕棺墓

墳丘墓西側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は上甕のほとんどが破壊され下甕の一部も破壊と土圧等での崩落を受けている。墓壙は一次墓壙は消失しており1.80ｍ×0.95ｍ、深さ0.68ｍの平面楕円形に近い二次墓壙のみが残存していた。傾斜角は約20°、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して直交する。下甕中央部内面は大量の水銀朱で覆われていた。

下甕のほぼ中央の棺底付近から切っ先を北に向けた細形有柄銅剣１点と、主に下甕上位から組み合わさった状態のガラス製管玉79点が出土した。

ＳＪ1003甕棺墓

墳丘墓北側に位置する成人用複式棺である。墓壙は二次墓壙の一部が深さ0.81ｍ残存しているのみである。下甕の一部のみに残存している。上甕はほとんどが破壊され、下甕の一部も破壊と土圧等での破壊を受けている。また、接合部には粘土が残存していた。傾斜角10°、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して平行である。

ＳＪ1004甕棺墓

墳丘墓中央に位置するＳＪ1006甕棺墓の東側に隣接する成人用複式棺である。墓壙は二次墓壙のみが0.70ｍ残存しているのみである。上甕は３分の１が破壊され下甕の一部も破壊と土圧等で破壊を受けている。傾斜角５°、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して斜めとなっている。

ＳＪ1005甕棺墓

墳丘墓北西側に位置する成人用複式棺である。破壊がひどく、2.00ｍ×1.18ｍの二次墓壙が深さ0.28ｍ残存していたのみである。上甕の一部と下甕の棺内部に水銀朱が残っている。上甕と下甕の接合部には大量の粘土が用いられたらしく、上甕胴部上部から下甕口縁部にかけて幅広く残っていた。傾斜角10°、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して平行である。

細形銅剣１点が下甕の底部寄りの西側の部分から、切っ先を口縁部側（北）に向けた状況で出土した。

ＳＪ1006甕棺墓

墳丘墓中央部に位置する成人用複式棺である。墓壙は4.12ｍ×3.74ｍ、深さ1.75ｍの平面長方形に近い形態で、北西に横穴が掘り込まれている。この横穴にほぼ水平に埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。傾斜角、０°（水平）で、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して平行である。

細形銅剣１点が甕棺下甕の中央のやや脇（西）に寄った部分から、切っ先を南西方向に向けて出土した。切っ先からおよそ５分の２の部分で２折している。先端のごく一部と刃部の多）の部分を小さく欠損している。また、上甕と下甕の接合部には大量の粘土が使用されている。棺内からヒトの歯が出土した。

ＳＪ1007甕棺墓

墳丘墓南側に位置する成人用複式棺である。墓壙は3.37ｍ×2.49ｍ、深さ1.68ｍの平面長方形に近い形態で、北側中央部に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。傾斜角８°、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して平行である。

細形銅剣１点が甕棺下甕のほぼ中央脇（北西）に寄った部分から、切っ先部を底部方向（北東）に向け、青銅製把頭飾１点と共に出土した。切っ先を欠失しており、残存する部分も先端からおよそ４分の１の部分で２折している。刹方部の刃部の片側と、先端付近の刃部の一部をわずかに欠損している。

ＳＪ1009甕棺墓

墳丘墓南西側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上甕部は削平を受けほとんど残っておらず、下甕も５分の４が破壊を受けており、2.13ｍ×1.18ｍの二次墓壙が深さ0.19ｍ残存していたのみである。主軸方向は墳丘の南北主軸に対して平行である。

細形銅剣１点が下甕の中央口縁部寄りの部分から切っ先を底部方向（北東）に向けて出土したが、切っ先部先端を欠損している。

ＳＪ1050甕棺墓

墳丘墓西北側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は上甕の５分の４が破壊を受けている。東側中央部に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。接合には大量の粘土が使用されていた。調査時の墓壙は1.98ｍ×1.56ｍの平面楕円形に近い形態で、棺の形態と合わせて掘られている。傾斜角15°、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して直行する。

ＳＪ1051甕棺墓

墳丘墓西北側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は上甕の２分の１が破壊されている。南側中央部に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。調査時の墓壙は2.31ｍ×1.71ｍ、深さ0.85ｍの平面長方形に近い形態で東側は破壊を受けている。棺内より、少量の骨片が出土した。傾斜角20°、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して平行である。

ＳＪ1052甕棺墓

墳丘墓北東側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は上甕の２分の１が破壊され、下甕の一部も破壊を受けている。調査時の墓壙は2.68ｍ×2.52ｍで、深さ1.38ｍの平面隅丸正方形に近い形態で、南側中央部に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。接合面には大量の粘土が使用されている。傾斜角27度、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して平行である。

棺内からは少量の人骨片が出土した。

ＳＪ1054甕棺墓

墳丘墓東側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は上甕がほとんど破壊され下甕の一部も破壊を受けている。墓壙は二次墓壙が一部残存していたのみである。埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。傾斜角15°、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して直交する。

下甕中央部のやや北寄りの位置から、切っ先を口縁（東）側に向けた細形銅剣１点が出土した。

ＳＪ1055甕棺墓

墳丘墓北東側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は上甕の４分の３が破壊され、下甕の２分の１も破壊を受けている。墓壙は1.92ｍ×1.88ｍの平面隅丸正方形に近い形態で、西側に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。傾斜角38°、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して直交する。

ＳＪ1056甕棺墓

墳丘墓南東側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は東側が一部受け上甕の３分の２、下甕の一部が土圧等で崩壊しているが、上下甕ともほとんど完全に復元できる。墓壙は2.96ｍ×2.22ｍ、深さ1.18ｍの平面楕円形に近い形態で、西側に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。接合面には大量の粘土が使用されていた。傾斜角５°、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して直交する。

下甕ほぼ中央部から切っ先を口縁（東南）に向けた細形銅剣１点が出土した。さらに、棺内より少量の人骨片が出土した。

ＳＪ1057甕棺墓

墳丘墓南東側に位置する成人用複式棺である。墓壙の削平が著しいが影響は少ないようであるが、土圧等で上下甕とも崩壊しているが、上下甕ともほとんど完形に復元できる。墓壙は3.33ｍ×2.49ｍの平面楕円形に近い形態で、西側に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。接合面には大量の粘土が使用されていた。傾斜角６°、主軸方向は墳丘の南北主軸に対して平行である。

下甕中央部から切っ先を口縁（南）に向けた細形銅剣１点が、上甕中央西脇から青銅製把頭飾１点が出土した。細形銅剣と把頭飾が離れて（71cm間隔）出土したが、その原因は不明である。

また、ＳＪ1006甕棺墓からは人の歯が、ＳＪ1007甕棺墓からは頭骨片と上肢骨片が出土した。長崎大学医学部の松下孝幸助教授（現　山口県豊北町立土井ヶ浜ミュージアム館長）の現地における観察によると、いずれも壮年の男性であるらしい。他にも、ＳＪ1050・1051・1052・1057甕棺墓など４基の甕棺墓棺内から人骨片が出土した。

墳丘墓から出土した14基の甕棺墓は、すべての甕棺に黒色塗料が塗布されており、７基の甕棺墓の甕棺の内部に水銀朱と考えられる赤色顔料が確認された。また、これらの甕棺墓に使用された甕棺は法量が大きいものが多いが、特にＳＪ1050甕棺墓の下甕は、器高 139cm、口外径 101.8cmと超特大であり、他にも器高 120.0cm、口外径 80cmを越えるものが11基あり、他の法量を復元できる甕棺も１ｍ以上のものばかりである。合わせ口甕棺をなす上下の甕棺の器種は、蓋として用いるものに鉢形土器を用いる例が中期前半から中頃以降増加するが、これら墳

丘墓の甕棺群に限ってすべてほぼ同形の甕形土器を用いている。これらのことから、墳丘墓の被葬者のために特別誂えの甕棺が製作されたものと考えられる。

(2)遺物

ＳＴ1001墳丘墓の盛土内に埋置された甕棺墓はこれまで14基であり、いずれも２個の大型甕形土器を用いた成人用のものである。器体の形態は砲弾形または裁頭卵形である。個体数としては28個である。

なお、前報告（佐賀県教育委員会『吉野ケ里（神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書）』１９９２年３月）では平成元年に調査を実施した７基の甕棺墓（ＳＪ1002・1003・1004・1005・1006・1007・1009甕棺墓）の12個の甕棺（ＳＪ1005・1009甕棺の上甕を除く）について、現地での計測結果や取り上げた破片をもとに報告していたが、平成４年度の再調査ですべての取り上げ、可能なものについては復元を施した（ほぼ全体が復元できた固体数は10基の15個）。復元品の実測や復元できなかった破片の計測・観察に基づきすべてのものについて概要を報告する。なお、全報告では、ＳＪ1002甕棺墓の甕棺の記述に際し、上甕と下甕を逆にしていたので今回訂正する。

①甕棺

ＳＪ1002甕棺墓

上甕　口縁部から胴部にかけての49.1cmが残存。口縁部は外に低く傾斜する断面Ｔ字形口縁をなし、内側を打ち欠いている。口縁部下に断面コ字形突帯が１条巡る。復元口外径78.6cm、復元口内径61.2cmである。須玖式期（新段階）。

下甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は断面Ｔ字形で、外に低く傾斜する。口縁下に断面三角形突帯が１条、胴部には断面三角形突帯が２条巡る。器高 119.6cm、最大胴径84.4cm、口外径82.6cm、口内径65.4cm、底径16.0cmである。須玖式期（新段階）。

ＳＪ1003甕棺墓

上甕　口縁部から胴部にかけての70.3cmが残存。口縁部は厚く、内側に大きく張り出し、外側への発達はあまりみられない。胴部はやや丸みをもつ。口縁下に断面三角突帯が１条、胴部には断面三角突帯が２条巡る。復元口外径83.0cm、復元口内径66.5cmである。須玖式期。

下甕　口縁部から胴部にかけての一部を欠損していたが、ほとんど完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面Ｔ字形をなし、外に低く傾斜する。胴部はやや丸みをもつ。口縁下に断面Ｍ字形突帯が１条、胴部には断面三角形突帯が２条巡る。器高 115.3cm、最大胴径88.4cm、口外径83.2cm、口内径66.0cm、底径14.6cmである。須玖式期。

ＳＪ1004甕棺墓

上甕　口縁部から胴部にかけての63.0cmが残存。口縁部は厚く、内側に大きく張り出し、外側への発達はあまりみられない。胴部はやや丸みをもつ。口縁下に突帯はない。胴部に断面三角形突帯が２条巡る。復元口外径72.0cm、復元口内径55.0cmである。須玖式期（古段階）。

下甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部も内外に発達し断面Ｔ字形をな

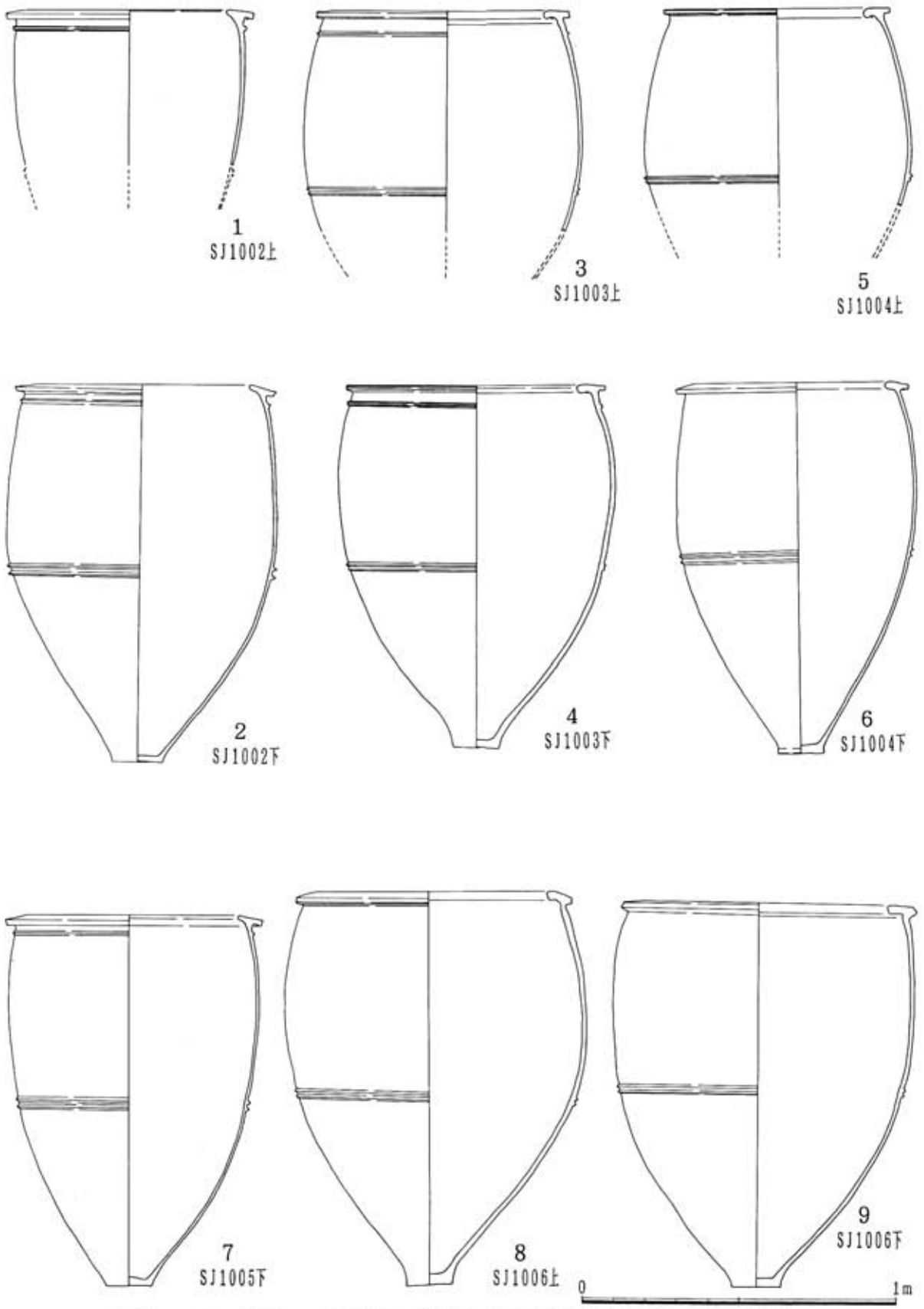


Fig.12 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓出土甕棺実測図(1)

し、外に低く傾斜する。口縁部下はややすぼまり突帯はない。胴部には断面三角形突帯が２条巡る。器高117.9cm、最大胴径77.9cm、口外径74.5cm、口内径59.0cm、底径14.5cmである。須玖式期（古段階）。

ＳＪ1005甕棺墓

下甕　口縁部から胴部にかけての一部を欠損していたが、全体規模が分かる程度には復元することができた。口縁部は外側にに発達した断面Ｔ字形で、下方に垂れ下がった形状をなす。口縁下には突帯なく、胴部に断面三角形突帯が２条巡る。器高 117.8cm、復元口外径81.8cm、復元口内径66.0cm、底径14.4cmである。新段階の須玖式期。

ＳＪ1006甕棺墓

上甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内側に大きく張り出し、外側への発達はあまりない。胴部は径が大きく丸味をもつ。口縁下には突帯はなく、胴部に断面三角形突帯が２条巡る。器高125.2cm 、最大胴径は95.6cm、口外径87.4cm、口内径71.6cm、最大胴径95.6cm、底径14.6cmである。汲田式期。

下甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内側に大きく張り出し、外側への発達はあまりない。口縁上面は上甕が傾斜しているのに対し水平となっている。胴部は径が大きく丸味をもつ。口縁下には突帯はなく、胴部に断面三角形突帯が２条巡る。器高 121.6cm、最大胴径は98.3cm、口外径94.5cm、口内径75.4cm、底径15.5cmである。汲田式期。

ＳＪ1007甕棺墓

上甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面Ｔ字形をなし、外に少し傾斜する。口縁下には突帯はなく、胴部に断面三角形突帯が２条巡る。器高118.4cm 、最大胴径78.8cm、口外径75.4cm、口内径59.0cm、底径13.8cmである。須玖式期（古段階）。

下甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部も内外にに発達した断面Ｔ字形をなし、外に低く傾斜する。胴部は丸味をもつ。口縁下に断面Ｍ字形突帯が１条、胴部には断面三角形突帯が２条巡る。器高120.0cm 、最大胴径93.9cm、口外径86.0cm、口内径67.6cm、底径15.4cmである。須玖式期（古段階）。

ＳＪ1009甕棺墓

上甕　発掘の段階で、ほとんどが遺存しておらず、辛うじて口縁部の一部が下甕の口縁部に付着して出土した。断面Ｔ字形をなす成人用甕棺の口縁部で、おそらく下甕と同規模の大型甕棺だったものと推定される。

下甕　口縁部から胴部にかけての69.2cmが残存。口縁部は内外に発達した断面Ｔ字形をなし、外に低く傾斜する。口縁下には断面コ字形突帯、胴部には断面コ字形突帯が２条巡る。復元口外径77.6cm、復元口内径58.0cmである。須玖式期。

ＳＪ1050甕棺墓

上甕　口縁部から胴部にかけての44.8cmが残存。口縁部は断面Ｔ字形をなし、外に低く傾斜する。口縁下に断面コ字形の突帯が２条巡る。復元口外径93.7cm、復元口内径73.4cmである。残存した部分から判断すると、下甕と同様非常に大型の甕棺と考えられる。須玖式期（新段階）。

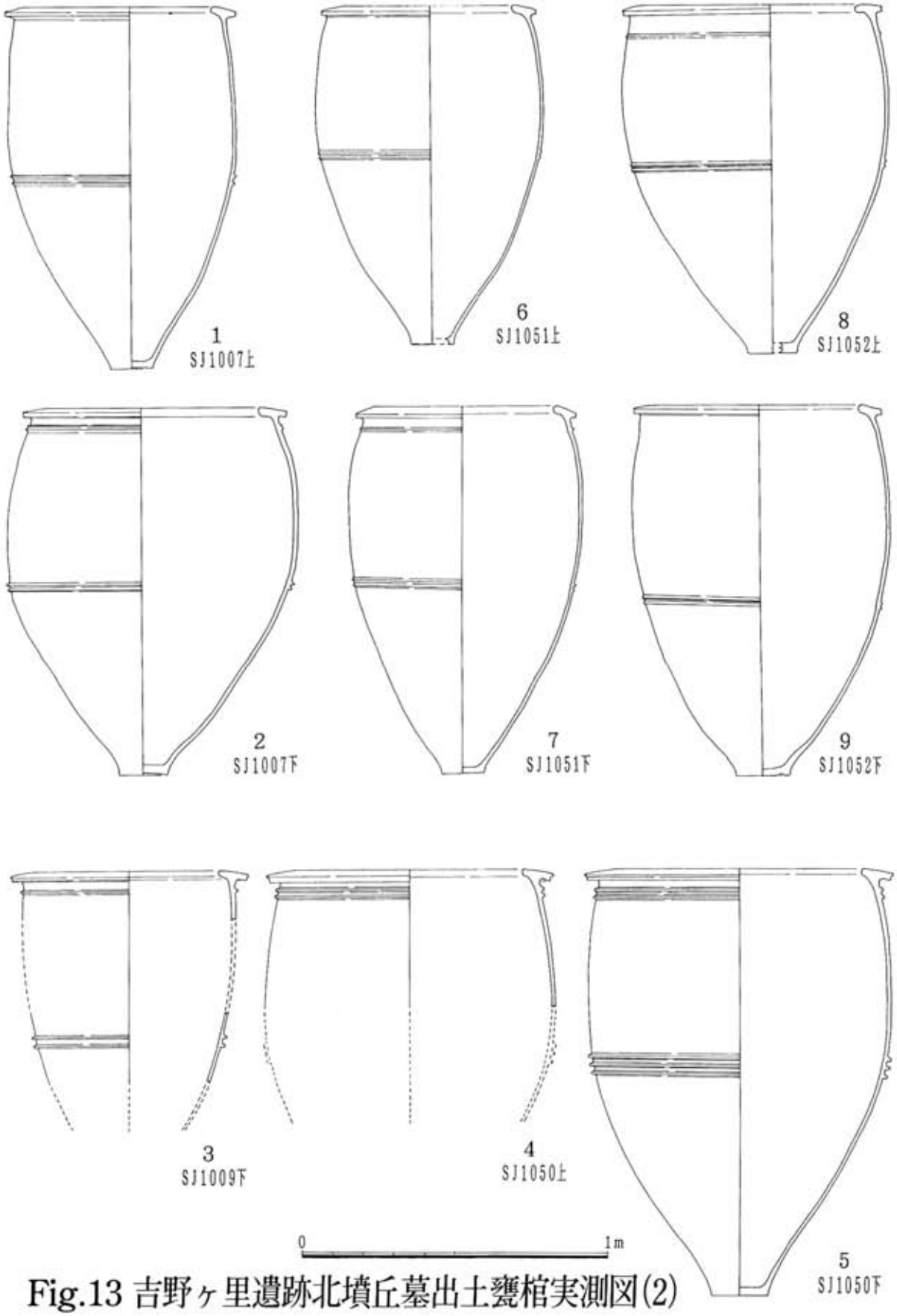


Fig.13 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓出土甕棺実測図(2)

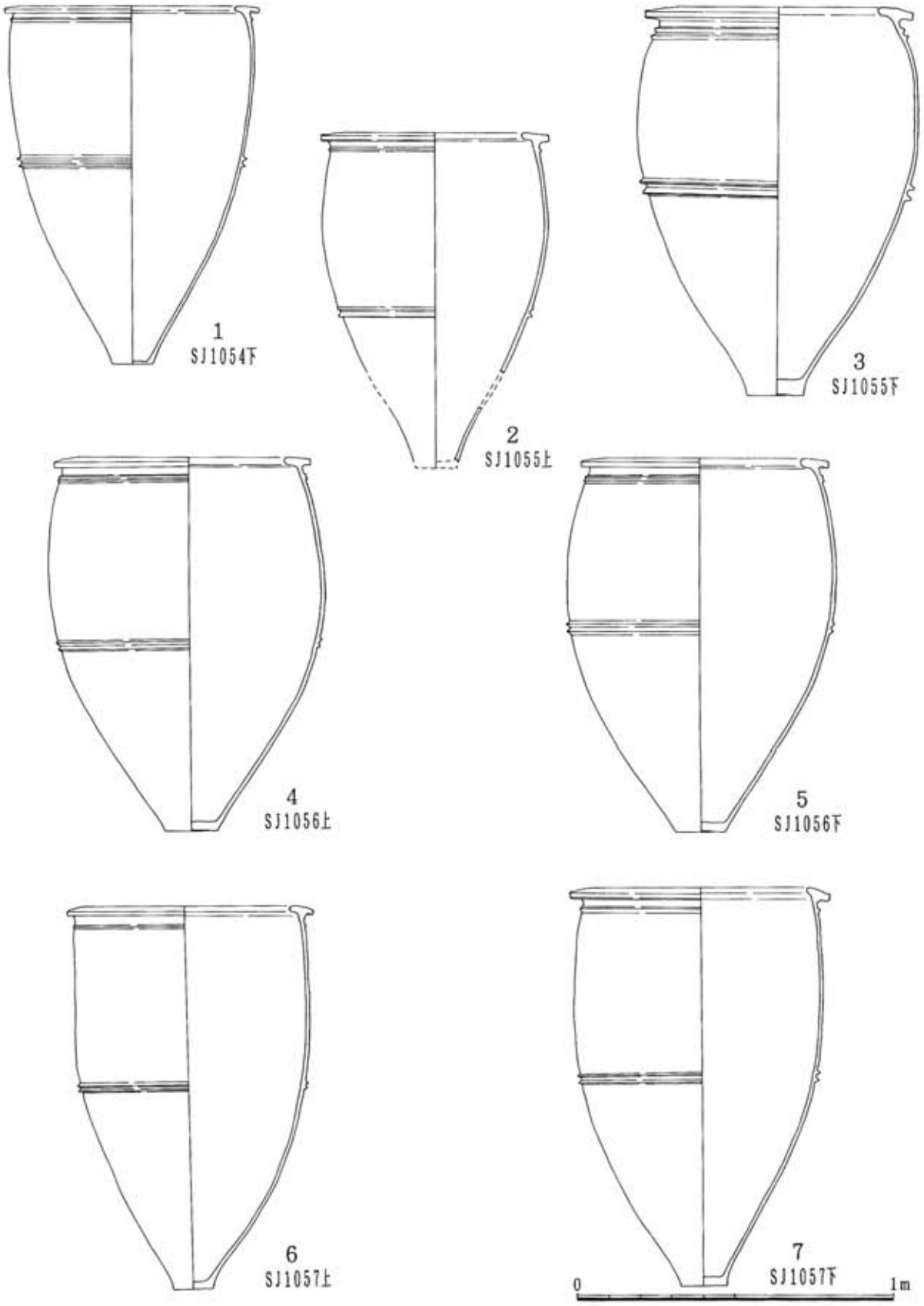


Fig.14 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓出土甕棺実測図(3)

下甕　口縁部から胴部の上部までの一部分を欠くが、ほぼ完全に復元することができた。口縁部は断面T字形をなし、外に少し傾斜する。胴部はやや丸味をもつ。口縁下に断面コ字形の突帯が２条巡る。胴部中位に断面コ字形の突帯が３条巡る。器高 139.0cm、最大胴径99.3cm、復元口外径 101.8cm、底径18.5cmである。北墳丘墓内の甕棺では最も器高の高いものであり、容積も最大のものと考えられる。須玖式期（新段階）。

ＳＪ1051甕棺墓

上甕　破片が不足し、全体の復元は不可能であった。口縁部は内側に大きく張り出し、外側への発達はあまりみられず、外に少し傾斜する。口縁部下には突帯はなく胴部中央部に断面三角突帯が２条巡る。復元器高110.6cm 、復元口外径70.8cm、復元口内径54.8cm、底径14.0cmである。須玖式期（古段階）。

下甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内側に大きく張り出し、外側への発達はあまりなく外に少し傾斜する。口縁部下には１条の断面三角突帯が１条、胴部中央部に断面三角突帯が２条巡る。器高 120.2cm、最大胴径77.4cm、口外径72.4cm、口内径57.6cm、底径13.6cmである。須玖式期（古段階）。

ＳＪ1052甕棺墓

上甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなす。胴部はやや丸みをもつ。口縁部下には断面三角形突帯が１条、胴部中央部に断面三角形突帯が２条巡る。復元器高114.3cm 、最大胴径87.6cm、口外径86.7cm、底径15.0cmである。須玖式期（古段階）。

下甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に少し傾斜する。胴部はやや丸みをもつ。口縁部下には突帯はなく、胴部中位下部に断面三角形突帯が２条巡る。復元器高 121.3cm、最大胴径86.6cm、口外径81.8cm、口内径66.4cm、底径17.6cmである。須玖式期（古段階）。

ＳＪ1054甕棺墓

下甕　口縁部から胴部にかけての一部を欠損していたが、全体規模が分かる程度には復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に少し傾斜する。口縁部下には断面三角形突帯が１条、胴部中央部に先端が丸い大きな断面三角形突帯が２条巡る。器高 113.7cm、復元口外径81.5cm、復元口内径66.0cm、底径13.4cmである。須玖式期。

ＳＪ1055甕棺墓

上甕　口縁部から胴部にかけての大半の部分を欠損していたが、全体規模が分かる程度には復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に少し傾斜する。口縁部下には断面三角形突帯が１条、胴部に先端が丸い大きな断面三角突帯が２条巡る。復元器高 106.8cm、復元口外径72.4cm、復元口内径55.0cmである。須玖式期。

下甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に少し傾斜する。胴部はやや丸みをもつ。口縁部下には１条の断面三角突帯が２条、胴部中央部に断面コ字形突帯が２条巡る。器高 123.3cm、最大胴径90.5cm、口外径84.4cm、口内径62.0cm、底径17.8cmである。須

玖式期。

ＳＪ1056甕棺墓

上甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面Ｔ字形をなし、外に少し傾斜する。胴部はやや丸みをもつ。口縁部下には断面Ｍ字形突帯が１条、胴部中位下部にに断面三角突帯が２条巡る。器高 117.4cm、最大胴径88.0cm、口外径86.0cm、口内径66.0cm、底形16.5cmである。須玖式期。

下甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面Ｔ字形をなし、外に少し傾斜する。胴部はやや丸みをもつ。口縁部下には１条の断面Ｍ字形突帯が１条、胴部中央部に断面三角形突帯が２条巡る。器高 126.2cm、最大胴径89.8cm、口外径78.0cm、口内径63.6cm、底径15.1cmである。須玖式期。

ＳＪ1057甕棺墓

上甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面Ｔ字形をなし、外に少し傾斜する。口縁部下には断面三角形突帯が１条、胴部中位下部にに断面三角突帯が２条巡る。器高 121.6cm、最大胴径74.4cm、口外径78.4cm、口内径63.2cm、底形13.0cmである。須玖式期。

下甕　ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は厚みをもち、特に外側に発達した断面Ｔ字形をなし、外に傾斜する。口縁部下には１条の断面三角形突帯が１条、胴部中央部に断面三角形突帯が２条巡る。器高 126.4cm、最大胴径78.5cm、口外径82.2cm、口内径66.8cm、底径14.6cmである。須玖式期。

②銅剣

細形銅剣５（ＳＴ1001墳丘墓　ＳＪ1054甕棺墓）

切っ先部刃部のごく一部と、刃部の一部が欠損しているが、その部分以外はほとんど完形を保っている。刃部の一部には錆化のために黄色を帯びた薄い緑色となっており、他の部分は暗緑色となっている。刃部の研ぎ出しは切っ先から刻方下端まで施されている。全体的には、刻方部から切っ先にかけてやや先細りとなっている。長さ29.1cm、刻方下端部3.65cm（最大幅）、刻方先端部 3.2cm、茎の厚さ 1.2cmである。重量は 264ｇ。

細形銅剣６（ＳＴ1001墳丘墓　ＳＪ1056甕棺墓）

切っ先部をわずかに欠失し、刃部周縁にごくわずかな欠損があるが、ほとんど完形を保っている。剣身下端約３分の１が錆化のためやや黄色を帯びたごく薄い緑色となっており、他の部分は青みがかった緑色となっている。刃部の研ぎ出しは切っ先から刻方下端の部分まで施されている。また、剣身中央やや先端部に布片の痕跡と刻方から茎の間に朱が一部認められる。残存長29.9cm、刻方下端部（最大幅） 3.9cm、刻方先端部 3.2cm、茎の厚さ 1.1cmである。重量は 242ｇである。

中細形銅剣（ＳＴ1001墳丘墓　ＳＪ1057甕棺墓）

切っ先の一部が破損しているが、その他の部分に関しては欠損はごく一部である。全体に暗緑色の錆が認められる。また両面の一部に朱の痕跡が、片面には刻方から関と茎の部分にかけて布片の痕跡が認められる。刃部の研

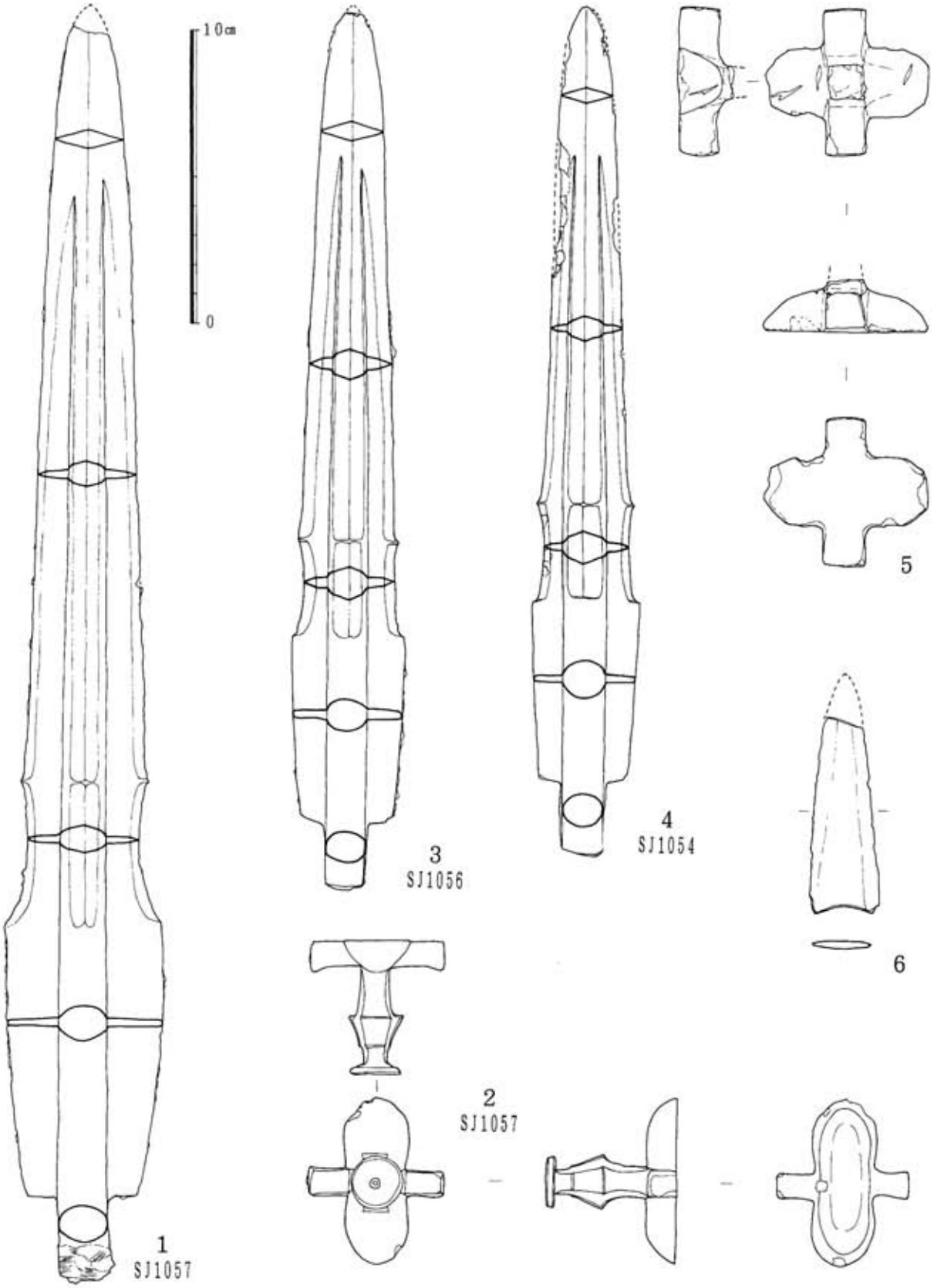


Fig.15 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓出土遺物実測図

ぎ出しは切っ先から刹方下端まで施されている。残存長43.0cm、刹方先端幅 4.3cm、刹方下端部で 5.4cm（最大幅）、関部で 4.7cm、茎の厚さ 1.3cmである。重量は 460 g である。

③その他の遺物

青銅製把頭飾

十字形のもので、中膨れの方柱には四方に切り込みがあり、その先端には円盤がつく。ごく一部に欠損があるのみである。ＳＪ1007号甕棺墓出土の把頭飾に比べ大型であるが形態的に酷似する。やや明るい黄褐色味がつよい緑色となっている。長さ4.35cm、方柱部の径1.85cm、十字部分の長さ 5.7cm× 4.7cmである。重量は85.1 g である。

磨製石鏃・石製把頭飾

昭和の開墾によって削り取られた墳丘盛土の堆積層内から、弥生時代中期の甕棺片や前期から中期前葉の生活用土器に混じって、磨製石鏃や石製把頭飾などが出土している。磨製石鏃は細形銅剣を副葬していたＳＪ1005甕棺墓の西側で多数の甕棺片とともに出土したので、この甕棺墓の副葬品あるいは遺体に残存していたものと考えられるが、把頭飾は、周囲あるいは墳丘の下に中期初頭から前葉にかけての竪穴式住居跡も存在するため、必ずしも墳墓の副葬品とは断定できない。

吉野ヶ里丘陵地区Ｖ区のＳＴ1001墳丘墓の調査の結果、墳丘の規模、盛り方の解明や新たに発掘された７基の甕棺墓を含む14基の甕棺墓の調査により甕棺副葬品について新たな問題も提起された。

墳丘の規模は、盛土が存在する範囲が南北27ｍ、東西25.5ｍの平面長方形の部分で確認された。しかし、中世および昭和の削平から考えると、それ以上の規模であったことは確かである。そこで、墳丘墓の周辺の遺構の状況から考えると墳丘の西から北にかけて外壕が巡っており、東側には弥生時代中期から後期にかけての祭祀専用土器を含む大量の土器を出土した大型の土壙があり、さらに南側には墳丘墓前面に至る墓道と考えられる溝状遺構が存在する。この範囲で考えると墳丘の最大規模は、南北60ｍ、東西45ｍ程と考えられる。

墳丘の盛り方は、断面観察によると全体を断面蒲鉾状の盛土で周囲を囲み、その内部に小山を築いて、水平に埋め、さらに小山を築いて水平に盛っているようである。これまでに、墳丘内から発掘した甕棺はすべて遺存している墳丘の上から墓壙が掘り込まれており、また位置的にも個々の盛土の小山と個々の甕棺は無関係に存在しているということなどから、墳丘が完成した後に埋葬がおこなわれたものと考えられる。盛土に用いられた土は、当時の表土らしい黒色系の土、あるいは褐色・白色・灰色・黄色などのローム土である。それらの土は、墳丘墓東側にある大型の土壙、当時深さ３ｍ以上と考えられ、規模も南北50ｍ、東西30ｍ弱あるのでかなりの土量がここから採取することができると考えられる。また、墳丘墓の北を巡る外環壕周辺にも、外環壕掘削以前の東西約25ｍ、南北約16ｍの平面楕円形の大型土壙を確認しているが、この土壙も盛土用の土の採掘跡であった可能性が高い。当時の表土から下層の各種ローム土が、墳丘盛土の種類と対応していることから十分可能性がある。

墳丘墓の甕棺については、甕と甕を合わせた大型棺であり、配置を見ると、甕棺の方向は大方、平面長方形の墳丘の主軸方向（南北）と平行なものと、直交するものとに分かれている。一般墓地においても、汲田式期・須玖式期の甕棺墓の埋置方向は、基本的には地形の等高線と平行の甕棺墓は古く、直交するものが新しいという傾向があるが、この墳丘墓においても同様である。

埋置された甕棺の時期は、その形態により、汲田式期、古段階の須玖式期、須玖式期、新段階の須玖式期と大きく４つに分けることができる。汲田式期の甕棺は、中心部に位置するＳＪ1006甕棺墓が最も古く、最初に埋置される。須玖式期の古段階の甕棺はＳＪ1006甕棺墓の北側にＳＪ1052甕棺墓が埋置される。須玖式期の甕棺は９基あるが、主軸方向（南北方向）に埋置されるのは、ＳＪ1006甕棺墓の北側のＳＪ1003・1051甕棺墓、南側にＳＪ1009・1007甕棺墓が埋葬された。墳丘墓の北側と南側に埋置される。

主軸方向に直交（東西）して埋置されるのは、ＳＪ1006号甕棺墓東側のＳＪ1056・1054・ＳＪ1004・ＳＪ1055甕棺墓である。須玖式期の新段階甕棺は、墳丘墓南東部と北西部にＳＪ1002・1057・1005・1050甕棺墓などが埋置される。なお墳丘墓内で最後に埋置された甕棺はＳＪ1050甕棺墓とみられる。

墳丘墓のすべての甕棺は、内外面には黒色の顔料が付着しているが、これは分析の結果、炭素と鑑定された。吉野ケ里遺跡では、この黒塗りの甕棺は、副葬品をもつ甕棺墓など特殊なものを除いて一般の墓地からは希にしか発見されない。内部には水銀朱が残っており、その量は点として残っていたり、面として大量に残っていたり様々であった。

これらの甕棺墓に伴って銅剣が８点出土している。以前この墳丘墓付近から細形銅剣１点が発見されていて計９本銅剣が出土したことになる。調査で出土した８点の内７点が細形銅剣で、形態や法量は様々であるが、そのうち１本は、ＳＪ1002甕棺墓から出土したのは把頭飾付き有柄銅剣である。ＳＪ1057甕棺墓から出土した銅剣は中細形銅剣で、他の細形銅剣を出土したと同じ須玖式期の甕棺である。これにも、大型の把頭飾が伴出している。佐賀県鳥栖市の柚比本村遺跡で、甕棺墓群からさらに古い汲田式期の甕棺から細形銅剣３点と中細形銅剣が４点が出土しており、細形から中細形へ単純に形態が変化していくのではなく、かなり早い段階で２つの形態に分化したことが窺えられる。なお、出土した銅剣のうち、ＳＪ1007甕棺墓の細形銅剣とＳＪ1057甕棺墓の中細形銅剣の切っ先は欠損していた。

また、墳丘を破壊した土の中から磨製石鏃と石製把頭飾がそれぞれ１点出土した。磨製石鏃は墳丘北西部に位置するＳＪ1005甕棺墓のすぐ脇で、ＳＪ1005甕棺墓の破片とともに出土したもので、もともとこの甕棺内にあった可能性がある。ただ副葬品であったか、射込まれたのかは不明である。

墳丘墓の時期は、墳丘に設けたトレンチの墳丘中央部に平面円形の竪穴住居の壁が検出された。おそらく直径10ｍを越える非常に大型の住居跡が墳丘墓の下に存在する。その、南一帯にも２・３基の平面円形の竪穴住居が検出されている。これらは、弥生時代前期末から中期初頭のもので、それらを一挙に埋め込んで墳丘が造られている。この竪穴住居は自然に埋没したのではなく単一の土層で一挙に埋め、その上に盛土を行っていたことから墳丘の築造と、この区域の竪穴住居に住んでいた人々との関係が深く感じられる。

墳丘の盛土からは中期前半までの土器片しか出土せず、出土した甕棺の時期からみても築造時期は中期前半と考えられる。墳丘墓への埋葬が終わる時期については、最も新しい甕棺を用いているのがＳＪ1050甕棺墓で、中期中頃の内でもっとも新しい形態を備えている。その後の時期の甕棺片は、墳丘墓内からも墳丘を壊した土からも出土していない。

墳丘墓には、14名の死者が葬られていたことになる。彼らの多くは、身分を示すと考えられる銅剣や管玉をもっており、弥生時代中期の吉野ヶ里集落の歴代の首長と考えられる。しかし、この墳丘墓は、現在確認された甕棺の時期幅からみて、せいぜい100年に満たない期間しか営まれなかったものと考えられる。このことは、首長としての身分をもつ期間がかなり短かったことを示しているのかも知れない。

Tab. 2　北墳丘墓内甕棺墓一覧表

甕棺番号	時　　期	墳丘主軸方向と甕棺主軸（傾斜角度）	出　土　遺　物	備　　考
1002	中期中頃（新）	直交（20°）	把頭飾付き有柄細形銅剣1・ガラス製管玉79・布（絹・大麻）片（銅剣に付着）	黒塗り、朱あり
1003	中期中頃	平行（10°）	石鏃1［棺内埋土中、この甕棺に伴うかどうか不明］	黒塗り
1004	中期中頃（古）	斜め（5°）		黒塗り、朱あり
1005	中期中頃（新）	平行（10°）	細形銅剣1	黒塗り、朱あり
1006	中期前半	平行（0°）	細形銅剣1・鏃	黒塗り、朱あり
1007	中期中頃（古）	平行（8°）	細形銅剣1・青銅製把頭飾1・人骨片	黒塗り
1009	中期中頃	平行（3°）	細形銅剣1	黒塗り、朱あり
1050	中期中頃（新）	直交（15°）	人骨片	黒塗り
1051	中期中頃（古）	平行（20°）	人骨片	黒塗り
1052	中期中頃（古）	平行（27°）	人骨片	黒塗り
1054	中期中頃	直交（15°）	細形銅剣1	黒塗り、朱あり
1055	中期中頃	直交（38°）		黒塗り
1056	中期中頃	直交（5°）	細形銅剣1	黒塗り
1057	中期中頃（新）	平行（6°）	中細形銅剣1・青銅製把頭飾1・人骨片（毛髪？）	黒塗り

3．北内郭跡

平成4年度及び5年度に吉野ケ里丘陵地区Ⅵ区（178・181調査区）として調査を行ったところ、弥生時代後期の2重の環濠で囲まれた区画跡を検出したため、以前より知られていた環濠区画跡を「南内郭跡」と呼び、新たに発見した区画跡を「北内郭」と呼ぶこととした。なお、この調査区の西部には甕棺墓を主体とする墳墓跡群も存在するが、ここでは環濠内及び周辺の集落跡についてのみ報告する。

北内郭跡は吉野ケ里段丘の南先端から北約800m、標高約22m～23mの段丘上に存在する。この場所は、段丘東側裾部には田手川が南流し、南側には田手川に開く谷が存在する。さらに、西側から北側にかけて細く谷が入り、一見すると独立段丘状をなす。また、約120m北方には墳丘墓が存在しており、現況では最も高所となっているが墳丘墓の基底が23mであることと北内郭跡が削平されている事を考え合わせると、少なくとも弥生時代においては周辺地形で最も高所に位置していたと考えられる。なお、南内郭跡は南西約150mに位置する。

これまでの調査結果より、北接する地区（吉野ケ里丘陵地区Ⅴ区182調査区）には前期末から中期中頃の甕棺墓群（約250基）、西接する地区（吉野ケ里丘陵地区Ⅱ区）には中期前半から後期前半の甕棺墓を主体とする墓地群（約260基）が存在する。

Fig.16 吉野ヶ里遺跡北内郭跡遺構分布図

発掘調査は神埼工業団地造成時に文化財緑地用地として除外されていた部分約 8,950㎡について実施し、弥生時代から中世にかけての集落跡や墓地跡を検出している。弥生時代のものでは竪穴住居跡、掘立柱建物跡、環壕跡及び溝跡、土壙、柵跡等を検出している。古墳時代のものでは竪穴住居跡３基以上、土壙、小規模な古墳と考えられる石室の痕跡や周溝、平安時代では木棺墓10基以上、中世では壕跡等を検出し、平安時代から中世の土壙墓・木棺墓から鹿角装刀子や青磁椀などを発掘した。

しかし、いずれもみかん園の造成を中心とする開墾や採土のために遺構の残存状況は悪い。さらに、この区域が平成２年度及び３年度に史跡及び特別史跡に指定され恒久的に保存されることが決定したため、調査においても遺構の完全発掘を行わず部分的な試掘により遺構を把握することとした。そのため、詳細な点において不明な部分が多々ある。

以下、弥生時代の主要な遺構と遺物について記すが、遺構では集落の主要な構成要素である竪穴住居跡や掘立柱建物跡、環壕・壕跡などについて、遺物では弥生土器と鉄器・青銅器について概要を記す。

(1)弥生時代の遺構

弥生時代の遺構としては、竪穴住居跡75基、掘立柱建物跡25基以上、環壕・壕跡４条、柵列、土壙等を検出した。なお、墓地関連の遺構としては甕棺墓34基、土壙墓12基、箱式石棺墓２基、祭祀土壙１基などを検出し、中期後半のＳＪ1204甕棺墓の合せ口部の粘土目張り中から鉄剣を発見した。

竪穴住居跡については、調査区全域で確認されており、希薄な時期があるものの前期から後期終末までのものがほぼ継続して存在する。これらは円形基調のものと方形基調のものに大別でき、前期から中期前半までは両者が混在し、それ以後は後者のみになる。また、その配置関係より後期初頭までは地形的制約が優先し、後期中頃、少なくとも後期後半には人為的制約が優先し、後期終末以後はまた地理的制約が優先しているものと考えられる。掘立柱建物跡については壕跡に関連した棟方向を示したり、突出部内に伴うなど、極めて壕との関連が深い。現在、詳細な整理がなされておらず時期等に付いては述べられないが、このことより後期後半～終末期にかけてのものと推定される。また、その規模は、１間×１間、１間×２間のものが大半を占めるが、環壕内部には３間×３間の大型のものも存在する。

壕跡については後期中頃のものを１条検出している。断面は逆台形を成し、突出部を中心に約50ｍ区間を検出したが、両端は削平されており、壕跡の走行は不明である。突出部の形状より南側が集落内部と考えられるが、同時期の遺構が希薄であるため決め手には至らない。また、後期後半では２重（外壕を入れると３重となる）の壕跡を検出した。内側を巡る壕跡（以下内保壕跡とする）は南西部を頂点とするＡ字形をなし北東部及び南東部に半円形の突出部、北東部に方形の突出部を有する。また外側を巡る壕跡（以下中壕跡とする）は内壕と一定の間隔をもって巡り半円形の突出部は有しないが、北東部に同様の方形突出部を有している。この中壕跡は改修により、元来西に向かって伸びていたものを内壕に沿わせたり、東側にゆるやかな半円形突出部を増設している。

柵列については、まず、入り口部分で検出している。中壕及び内壕の切れ間をつなぐ一列と鍵形に曲がる一列を確認している。これらの２本に挟まれた部分が通路となる。また、２列間の最狭部は約 1.1ｍとなっており、目隠し及び容易に進入できないようにするための施設と考えられる。ほかにも柵列と考えられる遺構は存在しているが、まだ十分な検討ができていない。

土壙については大半のものが中期前半の貯蔵欠と考えられる。形態は方形のものが中心であり、調査区北半に点在する。本調査区でも中期前半と考えられる竪穴住居跡を確認しており、これらに伴うものと考えられる。

①竪穴住居跡

本調査区では前期から古墳時代初頭の竪穴住居跡75基を検出しているが、上記のとおり完掘していないため、規模や時期等に不明な点が数多く存在する。また、調査した住居跡の一部についても、後世の削平がひどく、不明な点が多い。これらのうち出土遺物より時期の特定が可能なものを中心に述べたい。

前期のものと考えられるものはＳＨ1164竪穴住居跡である。平面形態は方形であり、屋内中央部に炉状ピットが存在する。

中期前半代のものは、平面形態が円形、楕円形と隅丸長方形のものが14基存在している。円形のものは径4.38ｍ～6.20ｍであり、柱穴は中央部に２個と周辺に数個巡ると考えられる。このうちＳＨ1178竪穴住居跡内には作業台と考えられる石が遺存していた。また、ＳＨ1179竪穴住居跡は小穴群より竪穴住居跡と考えられるものであり、その規模は径８ｍ以上となる。ＳＨ1157竪穴住居跡は平面形態は楕円形であり、柱穴は２個で中央に炉状ピットをもつ。さらに南半分では小溝が壁際に巡る。一方、隅丸長方形のものは長辺4.46ｍ～6.50ｍ、短辺3.14ｍ～4.50ｍである。ＳＨ1168竪穴住居跡には壁際に小溝が巡る。これら中期前半の建物群の配置において明確な規則性は認められないが、調査区北側や西側のほぼ同時期の甕棺墓群とは一定の間隔をもっている。

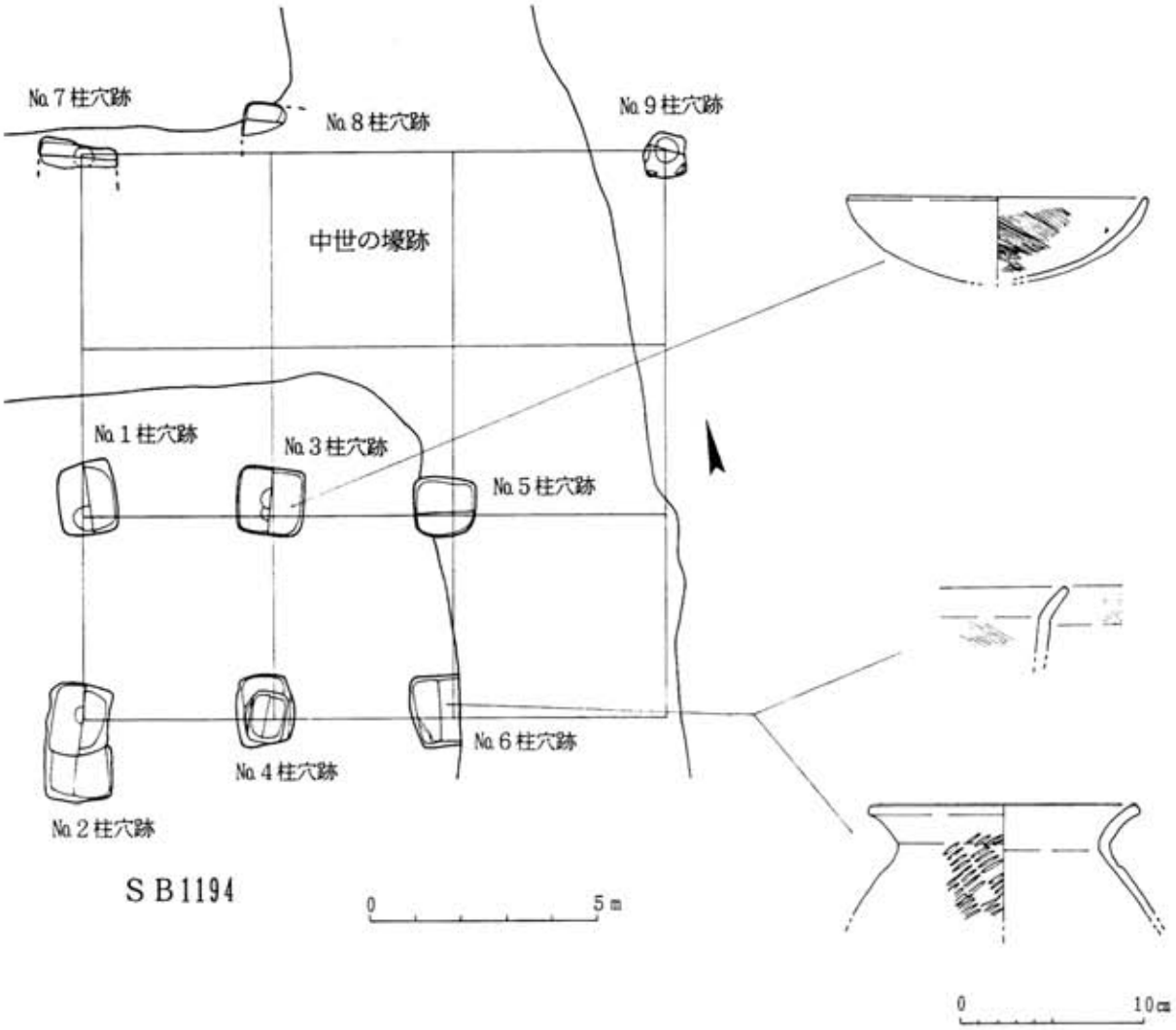
中期後半のものは２基検出している。いずれも遺存状況が悪く詳細は不明である。

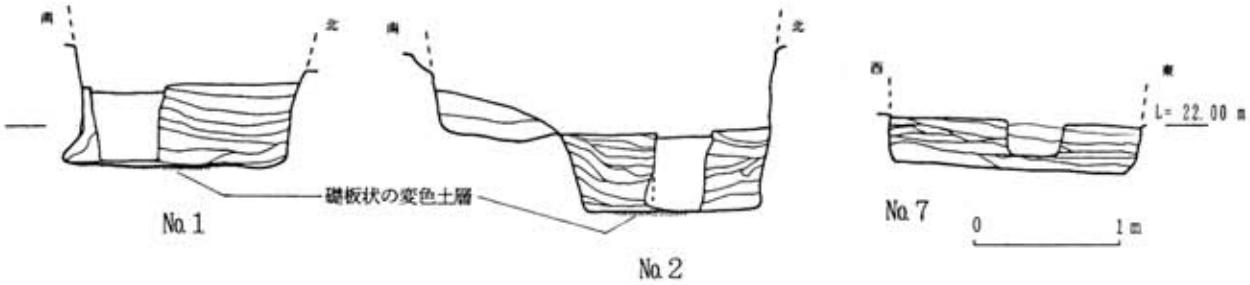
後期前半のものは14基を検出している。その平面形態は長方形であり、長辺は2.92ｍ～6.04ｍ、短辺3.54ｍ～5.54ｍで２本柱と考えられる。内部施設としては一部に壁際の小溝跡が認められる程度である。また、その配置においては調査区中央南北に存在している。ここで遺構の残存状況より当時の地形復元を試みると、竪穴住居は尾根筋に沿って、その東側を利用していると考えられ、尾根を境に甕棺墓群には入り込んでおらず、居住域と墓域の区別が明確に認められる。

後期中頃のものは５基を検出している。平面形態は長方形と考えられる。このうちＳＨ1115・ＳＨ1107・ＳＨ1272竪穴住居跡は切り合うか、極めて近接する位置にあることより建て替えの可能性も考えられる。また、これらは調査区の縁辺部に存在しており、調査区中央部の削平具合から勘案すると、住居跡の存在を否定しがたいが、調査区中央部を空間としていた可能性が考えられる。

後期後半のものは３基検出しており形態や屋内施設を知るものはＳＨ1186竪穴住居跡である。柱穴は２個で中央部に炉状ピットをもつ。壁際には小溝が巡る。後期中頃のもの同様、時期を知ることのできる住居跡は３基と少ないが、空間の意識は続いていると考えられる。

終末期のものは10基を検出している。平面形態や屋内施設を知るものにはＳＨ1106・ＳＨ1113・ＳＨ1176・ＳＨ1143・ＳＨ1153竪穴住居跡がある。ＳＨ1106・ＳＨ1143・ＳＨ1153竪穴住居跡は長方形プランで２本柱であり、ＳＨ1113・ＳＨ1176住居跡は長方形プラン４本柱と考えられる。一連のものと考えられる吉野ケ里丘陵II区（北内郭西側に隣接する）おいても長方形の４本柱建物が存在する。屋内施設においてはＳＨ1106・ＳＨ1176・ＳＨ1143・ＳＨ1153・ＳＨ1307竪穴住居跡にはベット状遺構が伴う。これらには削り出しのみのものと、削り出しと張り付けの併用ものがあり、ＳＨ1106・ＳＨ1307竪穴住居跡は前者に、ＳＨ1143・ＳＨ1153・ＳＨ1176竪穴住居跡は後者にあたる。また、小溝においてもＳＨ1106・ＳＨ1143・ＳＨ1153竪穴住居跡のようにベットの内側を巡るものと、ＳＨ1146・ＳＨ1176・ＳＨ1277竪穴住居跡のように壁際を巡るものがある。またＳＨ1153・ＳＨ1176竪穴住居跡には壁際土壙が付随する。炉跡についてはＳＨ1153竪穴住居跡において炉跡と考えられる方形に巡る小溝が存在する。この時期の竪穴住居の配置状況は大半のもの（ＳＨ1106、ＳＨ1113以外）が後述する環壕跡を切るか隣接する位置にあり、同時併存は考えがたい。





柱穴断面図

※埋土は層状に締まっている

Fig.17 吉野ヶ里遺跡大型堀立柱建物跡・柱穴出土土器実測図

以上、平面形態や屋内施設について時期別に見てみると、前期は長方形、中期前半には円形・隅丸長方形・楕円形である。円形のものは中央に炉跡と２個の柱穴、その周囲に数本の柱穴をもつ。中期後半から終末には長方形となる。基本的には２本柱のものと考えられるが終末には４本柱のものも出現する。また、後期後半以後のものにはベット状遺構を伴うものがある。

一方、配置状況について同一丘陵上に存在し隣接する吉野ケ里丘陵地区Ⅱ区及び吉野里丘陵地区Ⅴ区での状況を考え合わせると、中期前半で墓域と集落の区別が大まかに確定し、以後居住域としての意識は継続する。その配置においては不規則であり、地形的な要因が感じられる。しかし、後期中頃、少なくとも後期後半には居住域の縁辺部に配置され、中央に空間を設けると考えられる。この空間との時間的差異は明確ではないが、環濠が営まれる。終末期以後は規則性は認められない。

②掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は25基を検出した。規模の分かるものでは１間×１間のもの８基、１間×２間のもの12基、３間×３間のもの１基である。

また、出土遺物や方向性よりほぼ環壕に伴う時期のものと考えられ、その配置状況では環壕内には10基、環壕外には13基、切り合うもの２基を検出している。環壕外ものは調査区北西部に集中している。

環壕内のものについては、まず内壕の北側の半円形および方形の突出部それぞれに物見櫓と考えられる１間×２間の掘立柱建物跡（ＳＢ1104，ＳＢ1105）を検出した。ＳＢ1104掘立柱建物跡は半円形突出部の内側で壕方向に平行して存在しており、梁行3.40ｍ、桁行 4.5ｍとなる。調査は完掘しておらず、柱痕等は不明である。ＳＢ1105掘立柱建物跡は壕方向に対して棟方を若干違えて存在する。梁行3.10ｍ、桁行 4.1ｍとなる。柱穴底面の痕跡より、横木が据えられていたと考えられる。また痕跡より柱の径は0.22ｍ～0.30ｍと考えられる。

また、ＳＢ1194掘立柱建物跡は中世の壕跡による削平のため柱穴は９基しか検出し得なかったが、その配置より３間×３間の掘立柱建物跡と考えられ、梁行は12.3ｍ、桁行は12.7ｍとなる。柱穴の規模は残存状況の良好なもので、長軸で 2.6ｍ、短軸で 1.4ｍ、深さ1.17ｍである。柱穴の一部には階段状に掘り込まれたものが認められ、これらは最深部を中央部に向けて掘削している。柱穴の一部の埋土には柱痕が認められるが、その径は0.40ｍ～0.55ｍである。また、埋土は版築様に層状に締まっている。

ＳＤ1101壕跡（SD1163壕跡）の北東の突出部内にＳＢ2070掘立柱建物跡が存在する。ＳＢ2070掘立柱建物跡は１間×３間で棟方向を壕に対して平行に向ける。柱穴は棟方向と垂直方向であり、階段状もしくゆるやかな傾斜をもって最深部が内側に来るように掘削されている。また、底面の痕跡より横木を据え柱を立てていたと考えられ、柱の径は0.24ｍ～0.30ｍと推定される。

環壕外のものについては、11棟が調査区の北西に位置する。１間×１間、１間×２間であり、その棟方向はＳＤ1101壕跡に対し、平行もしくは直行している。このことや出土遺物を考え合わせると、ＳＤ1101壕跡とほぼ同時期のものと考えられる。また、その切り合いにより数度の立て替えを行っている事が分かる。

ここで、吉野ケ里遺跡全体でみると、掘立柱建物群は南内郭西方（吉野ケ里地区Ⅴ区西部）に集中しており、これらは全体に係わる倉庫群と考えられるのに対して、本調査区環壕外のものはこの環壕のみに付属する施設と考えられる。このことは本集落の性格や特徴を知るうえで重要である。

一方、構造的に見てみると、柱穴内の底面に横木の痕跡及び柱痕が認められるものが多数ある。横木を配する手法は佐賀平野の低湿地遺跡でしばしば認められるが、丘陵上にある本遺跡でも認められることは興味深い。また、

ＳＢ1194掘立柱建物跡には横木は認められず、礎板状の木材の痕跡らしい土層があったが、そもそも横木や礎板は沈下防止のための設備と考えられ、径が50cm程度であれば、これらがなくても柱下面自体がその役割を果たすのかもしれない。

環壕内の掘立柱建物跡群の柱穴跡から出土した遺物は大半が小破片であり、まだ詳細な検討をおこなっていないため、建物跡の細かな時期等については不明確である。しかし、壕に規制された配置状況を取る点から考えると、ほぼ環壕と建物群は併存していたものと考えられ、壕内に竪穴住居跡が極めて少ない点より、これら掘立柱建物が北内郭主体となる区域であったと考えられる。

③環壕・壕跡

北内郭では壕跡を４条検出している。このうちＳＤ1101環壕跡は切合いや土層断面により掘直しが認められる（新段階がＳＤ1163、古段階がＳＤ1162）。

ＳＤ1102壕跡は後期後半から終末期のものと考えられる。南西部を頂点とする平面Ａ字形に巡り、北東部及び南東部に半円形の突出部、北東部に方形の突出部を有する。これらの内側には　それぞれＳＢ1104・ＳＢ1105掘立柱建物跡が認められる。さらに、南東部においても現在は畑の開墾により削平を受けているが、環壕の屈曲部を検出しており北東部同様の方形の突出部が設けられていたものと考えられる。つまり、南西から北東に中軸線をとると左右対称となる。また、Ａ字形頂部付近には掘り残しによる陸橋部を設けている。幅 2.0ｍ～ 2.5ｍで断面形状は逆台形であり、その土層観察より外側に土塁があったものと考えられる。

ＳＤ1101壕跡は当初、１条と考えられたためＳＤ1101壕跡としたが、調査区の拡張による切り合い部分の確認や土層観察により掘る直しが認められたため、重複部分をＳＤ1101に、未重複部分については古段階（後期後半）の壕跡をＳＤ1162、新段階（後期後半～終末）の壕跡をＳＤ1163壕跡とした。

ＳＤ1162壕跡は東側より、ＳＤ1102壕跡と約15ｍの一定距離を保ち北東部に方形の突出部をもち、西側に続く（ＳＤ1101壕跡）。西側よりＳＤ1102壕跡との一定間隔は失われ南西の調査区外に延びる（213・215調査区で確認）。幅約２ｍであるが、Ａ字形底部においては土層観察より幅約3.5ｍとなる。

一方、ＳＤ1163壕跡は北側ではＳＤ1162壕跡と重複し、西側では南に延び、ＳＤ1102壕跡との一定間隔を保ちＡ字形に巡る。ＳＤ1102と同様の半円形の突出部はもたない。この遺構配置より、少なくともＳＤ1102壕跡とＳＤ1163壕跡は同時併存と考えられる。また、再掘削時には、Ａ字形底部に緩やかな弧を描く半円形の突出部を設けている。内部にはＳＢ2070掘立柱建物が認められた。幅約２ｍである。いずれも断面形状は逆台形であり、土層観察より外側に土塁があったと考えられる。また、ＳＤ1163壕跡についてはＡ字形の頂部よりやや東よりに出入口を設けるが、ＳＤ1102壕跡の陸橋部とはずれる位置にある。このＳＤ1102壕跡とＳＤ1163壕跡の入口間には小穴列が存在しており、柵列によって鍵形に導かれる通路と考えられる。なお、最狭部は約1.1ｍとなる。

ＳＤ1122壕跡は調査区中央部に位置しており、幅約２ｍで、断面は逆台形をなし、突出部を中心に約50ｍ区間を検出したが、両端は削平されており、壕跡の走行は不明である。突出部の形状より南側が集落内部と考えられ、壕跡の時期は後期中頃から後半にかけてと考えられる。また、埋土の状況から判断すると、人為的に埋め戻している可能性がある。突出部東側より中広形銅戈が出土していることを考え合わせると、ＳＤ1101（ＳＤ1162）及びＳＤ1102壕を掘削する際にＳＤ1122壕は埋め戻され、銅戈は地鎮具として埋納されたと考えられる。

Tab. 3　吉野ケ里遺跡北内郭跡周辺竪穴住居跡一覧表

（単位：m）

遺構番号	形態	規模		棟方向	屋内施設					主な出土遺物	切り合い	時期
		長さ×幅×深さ	床面積		柱穴	燃焼施設	ベッド	溝	その他			
SH1103	方形	5.78×4.82×0.21	27.860	N−48.5°−E	1（1）	不明	無	有			SD1102より新	終末期〜古墳初頭
SH1106	長方形	(4.98)×(3.80)×0.18		N−63.5°−E	1（1）	焼土	有	有				弥生後期終末期
SH1107	長方形	5.60×(3.70)×0.09		N−52.0°−E	不明	炉跡	無	無			SH1272より新	弥生後期前半〜中頃
SH1108	長方形	6.04×4.28×0.07	28.851	N−28.5°−W	不明	不明	無	無			SD1101より古	弥生後期前半（古）
SH1109	長方形	5.13×(3.68)×0.11		N−49.0°−E	不明	不明		無			SH1110より古	弥生後期前半（古）
SH1110	長方形	(3.40)×−×0.14		N−78.5°−E	不明	不明	不明	無			SH1109より新	弥生後期前半
SH1111	長方形	5.60×(3.60)×0.07		N−23.0°−E	2	炉状ピット	不明	有			SH1278より新	古墳初頭
SH1112	長方形	5.88×(2.90)×0.09		N−51.0°−E	不明	不明	不明				SD1101より古	弥生後期前半
SH1113	長方形	7.04×5.40×−	38.016	N−43.0°−E	1（3）	不明	無			鉄鏃・鉄斧	SD1122より新	弥生後期終末期
SH1114	円形	径5.30			4？	不明	無		焼面			弥生中期前半
SH1115	長方形	4.20×3.49×0.09	14.658	N−57.5°−E	1＋（1）	炉状ピット	無					弥生後期前半〜中頃
SH1116	長方形？	2.92×(2.69)×0.08		N−33.0°−W					焼面		SD1101より古	弥生後期前半（古）
SH1120	長方形	6.04×4.48×0.17	27.659	N−53.5°−E	1＋（1）	不明	無				SD1122より古	弥生後期前半
SH1121	楕円形？	3.76×(2.55)×0.17			不明	不明	不明		焼土		SD1122より古 SH1123より古 SH1120より古	弥生中期前半
SH1123	長方形	4.78×3.54×0.06	16.921	N−76.0°−E	1＋（1）	炭化面	無		焼面	鉄鏃	SD1122より古 SH1121より新	弥生後期前半
SH1141	長方形	5.30×3.42×0.21	18.126	N−38.0°−E	（2）	不明	無					弥生後期後半
SH1143	長方形	6.50×4.90×0.16	31.850	N−57.0°−E	1＋（1）	炉状ピット	有				SH1144と切り合	弥生後期終末期
SH1144	長方形	8.32×5.40×0.10	44.928	N−82.5°−E	2	不明	有				SH1143と切り合	古墳初頭
SH1145	長方形	(4.22)×3.44×0.10		N−48.5°−W	不明	焼土	不明				SH1146より新	弥生後期終末期
SH1146	（方形）	5.47×4.96×0.03	27.131	N−53.0°−W	不明	不明	不明				SH1145より古 SH1149より新	弥生後期終末期
SH1147	（方形）	4.56×2.91×0.26	13.270	N−33.5°−E	不明	不明	不明		焼面		SH1148より新	弥生後期終末期
SH1148	不明	(1.02)×−×0.25			不明	不明	不明				SH1147より古	
SH1149	（方形）	(6.96)×(1.7)×0.07			不明	不明	不明		焼面		SH1146より古	
SH1153	長方形	9.50×6.78×0.31	64.410	N−32.0°−E	2	方形炉	有				SD1162より新	弥生後期終末期
SH1156	長方形	3.00×(2.70)×−		N−41.5°−E	4？	焼土(炉？)	不明					
SH1157	長方形	6.50×4.38×0.19	28.145	N−48.0°−E	2	炉状ピット	無					弥生中期前半
SH1158	不明	(2.54)×−×−		N−32.5°−E	不明	不明	不明					弥生中期前半
SH1164	長方形	(5.00)×(4.40)×−		N−47.0°−W		焼土	不明					弥生前期？
SH1165	不明	(3.38)×−×−				不明	不明				SD1163より古	
SH1166	長方形	(4.40)×3.14×0.04		N−52.0°−W		不明	不明					弥生中期前半
SH1167	長方形	(4.52)×3.20×0.02		N−72.0°−E	不明	焼土	不明					
SH1168	方形	4.46×4.36×−	19.446	N−43.5°−E	不明	不明	不明					弥生中期前半
SH1169	不明			N−56.0°−E						未発掘		
SH1174	長方形	4.34×2.98×0.22	12.933	N−61.0°−W	不明	不明	不明					弥生後期終末期？
SH1176	長方形	8.12×(7.36)×0.29			2＋（2）	不明	有				SD1163より新	弥生後期終末期
SH1177	円形	径5.64			7？	炉状ピット	無				SD1163より古 SH1176より古	弥生中期前半

遺構番号	形態	規模		棟方向	屋内施設					主な出土遺物	切り合い	時期
		長さ×幅×深さ	床面積		柱穴	燃焼施設	ベッド	溝	その他			
SH1178	円形	径6.20			6	炉状ピット	無	無				弥生中期前半
SH1179	円形	径(8.00)				炉状ピット	無	無				弥生中期前半
SH1180	長方形	4.70×3.76×0.12	17.672	N−62.5°−E	1+（1）	不明	無	無				弥生後期前半
SH1184	長方形	(4.58)×(3.35)×−		N−38.5°−E	不明	不明	不明			鉄鏃・鉄鑿		
SH1186	長方形	6.80×5.16×0.09	35.088	N−75.5°−W	2	炉状ピット	不明	有				弥生後期後半
SH1193	（方形）	(4.16)×−×−		N−32.5°−W	不明	不明	不明			未発掘		弥生後期前半〜中期
SH1195	（方形）	(2.4)×（1.40)×−			不明	不明	不明					
SH1196	（方形）	(6.22)×(1.34)×−		N−49.0°−W	1+（1）	不明						弥生中期後半
SH1197	（方形）	(4.60)×(4.30)×−		N−44.0°−W	不明	不明	不明					弥生後期前半
SH1199	長方形	(6.28)×(1.44)×−		N−51.0°−E	不明	不明	不明					弥生後期前半〜後半
SH1200	（方形）	(3.90)×−×0.09			不明	不明	有	有				
SH1226	（円形）				不明	不明	不明					
SH1260	（方形）	4.72×(1.30)×−			不明	不明	不明				SD1317より古	
SH1261	長方形	4.58×3.35×−		N−41.0°−E	不明	不明	有				SD1317より古	
SH1262	（方形）	3.65×(2.28)×−		N−78.0°−W	不明	不明	不明	有				
SH1263	（方形）	4.18×(1.64)×−		N−50.0°−W	不明	不明	不明				SD1262より古 SD1102より古	
SH1265	不明			N−57.0°−E	不明	不明	不明				SD1102より古	弥生中期
SH1266	不明	3.90×−×−			不明	不明	不明					
SH1267	（方形）	6.00×(2.88)×−		N−55.5°−W	不明	不明	不明	有				
SH1269	長方形	(5.38)×(5.00)×−		N−33.5°−W	2	焼土	不明					弥生後期前半
SH1272	（方形）	(2.28)×−×−		N−59.0°−E	不明	不明	有				SH1107より古	弥生後期前半〜中頃
SH1273	（方形）	(2.30)×(2.25)×1.10		N−71.0°−E	不明	不明	不明	有				弥生後期後半〜終末期
SH1277	（方形）	(3.90)×(1.20)×1.10		N− 5.0°−E	不明	焼土	不明	有			SH1103より古	弥生後期終末期
SH1278	楕円形	4.40×−×−		N−76.5°−W	不明	不明	無	無			SH1111より古	弥生中期前半
SH1282	（方形）	(5.46)×5.12×−		N−33.0°−W	不明	不明	無		一部未発掘		SD1102より新	弥生後期前半
SH1290	不明	−×−×0.20		N−23.0°−E	不明	不明	不明	無				弥生後期前半
SH1291	（方形）	(3.40)×−×0.22			不明	不明	不明			鉄鑿？		弥生中期後半〜後期前半(古)
SH1292	円形	径4.38									SH1113より古	弥生中期前半
SH1301					不明							弥生後期前半〜中頃
SH1302	長方形	5.36×4.20×0.15	22.512	N−83.0°−E	不明	不明	有	有	一部未発掘			古墳初頭
SH1303	（円形）	径5.20			不明	不明	不明	無			SH1306より古	弥生中期前半(古)
SH1304	（方形）	−×5.54×−		N−80.0°−E	不明	焼土	不明					弥生後期前半
SH1305	（方形）	−×4.10×−		N−65.5°−E						未発掘	SH1306より古	
SH1306	（方形）	(4.24)×4.48×−		N−47.5°−E						未発掘	SH1305より新 SH1303より新	弥生中期後半
SH1307	（方形）	−×4.20×−		N−46.5°−W	不明	不明	有	無				弥生後期終末期
SH1308	（方形）	5.10×4.50×−		N−63.0°−E	不明	不明	不明			未発掘	SD1101より古	弥生中期前半
SH1309	（円形）	(4.92)×−×−		N−60.0°−W	不明	不明	有？				SD1102より古	弥生中期前半
SH1313	（方形）	6.10×5.80×−		N−46.0°−W						未発掘		
SH1879	（方形）	(4.76)×−×−		N−87.0°−W	1+（1）	不明	有					

Tab. 4　吉野ケ里遺跡北内郭跡周辺掘立柱建物跡一覧表

（単位：m）

遺構番号	規模		桁行		梁行		棟方向	柱穴			備考
	間数	建物面積（m²）	全長	柱間	全長	柱間		平面形態	平面規模	深さ	
SB1104	1×2	15.300	3.40		4.50	2.25	N−38.0°−E	方形	0.84×84～0.60×0.64	0.100～0.120	
SB1105	1×2	12.710	3.10		4.10	2.05	N−75.5°−E	方形	0.56×0.64～0.96×1.12	0.060～0.280	柱痕径（0.22～0.30）
SB1126	1×2	18.993	4.10		4.63	2.18	N−6.5°−W	方形	0.56×0.92～0.80×1.16	0.180～0.270	柱痕径（0.13～0.31）
SB1129	1×（1）		2.88			1.80	N−39.0°−W	方形	0.84×1.46～0.90×1.54	0.460～0.600	
SB1130	1×2	14.654	3.44		4.26	2.13	N−36.0°−W	方形	0.70×0.78～0.74×1.38	0.330～0.540	柱痕径（0.09～0.11）
SB1131	1×1	6.096	2.40		2.54	2.54	N−41.0°−E	方形·円形	0.58×0.64～0.84×0.92	0.190～0.320	柱痕径（0.24）
SB1132	1×1	11.776	3.20		3.68	3.68	N−44.3°−W	方形	0.80×0.84～0.84×0.84	0.430～0.530	
SB1133	1×（1）		3.64			3.00	N−43.5°−E	方形	0.60×0.64～0.70×0.72	0.240～0.430	
SB1134	1×1	7.276	2.58		2.82	2.82	N−0.5°−W	方形	0.52×0.52～0.58×0.64	0.280～0.360	
SB1135	1×1	6.760	2.60		2.60	2.60	N−44.0°−W	方形	0.76×0.80～0.88×1.20	未発掘	
SB1136	1×2	14.592	3.20		4.56	2.28	N−29.0°−W	方形	0.78×1.02～1.10×1.36	0.180～0.420	
SB1137	1×2	16.800	3.36		5.00	2.50	N−66.0°−W	方形	0.88×1.00～1.20×1.30	0.590～0.890	柱痕径（0.20～0.26）
SB1138	1×2	15.645	3.50		4.47	2.235	N−51.5°−W	方形	0.70×0.80～0.85×0.85	0.120～0.515	柱痕径（0.12）
SB1150	1×1	13.901	3.62		3.84	3.84	N−52.0°−W	方形	0.76×0.94～0.92×1.15	0.130～0.440	
SB1161	1×1	8.112	2.40		3.38	3.38	N−54.5°−W	方形	0.66×0.82～0.88×0.92	0.150～0.280	柱痕径（0.22～0.23）
SB1172	×2				4.78	2.39	N−37.5°−E	方形	0.78×0.78～0.84×1.22	0.370～0.740	柱痕径（0.22）
SB1194	3×3	156.210	12.30	4.10	12.70	4.233	N−79.0°−W	方形	1.05×1.12～1.57×2.30	0.070～0.810	柱痕径（0.40～0.55）
SB1310	1×2	21.996	3.90		5.64	2.82	N−51.0°−W	方形	0.90×0.98～1.00×1.34	0.400～0.470	柱痕径（0.28）
SB1311	1×1	13.280	3.32		4.00	4.00	N−47.0°−W	方形	0.66×0.70～0.96×0.98	0.150～0.340	柱痕径（0.10～0.24）
SB1312	1×2	11.165	2.90		3.85	1.925	N−5.5°−W	方形	0.66×0.88～0.83×1.02	0.080～0.250	柱痕径（0.14～0.25）
SB1314	1×2	18.150	3.30		5.50	2.75	N−63.5°−E	方形	0.84×0.88～1.28×1.28	0.120～0.290	柱痕径（0.20～0.24）
SB2067	1×2	19.584	3.46		5.66	2.83	N−15.0°−E	方形	0.76×0.90～0.84×1.02	0.335～0.425	柱痕径（0.14～0.30）
SB2068	1×1	8.112	2.60		3.12	3.12	N−34.5°−W	方形	0.68×0.84～0.80×0.84	0.095～0.240	
SB2069	1×（3）		3.46		(7.44)	(2.48)	N−50.7°−E	方形·円形	0.53×0.58～0.94×1.00	0.195～0.380	柱痕径（0.21～0.30）
SB2070	1×2	29.250	4.50		6.50	3.25	N−33.0°−W	方形·円形	0.96×1.20～0.82×1.52	0.300～0.465	柱痕径（0.24～0.30）

④その他の遺構

その他の遺構には柵列と穴倉がある。

まず、柵列は北内郭の入り口周辺、つまりSD1163壕跡とSD1102壕跡の切れ間をつなぐ位置より検出した。前述したように、SD1163壕跡とSD1102壕跡はそれぞれ掘り残しによる陸橋部が存在する。これらをつなぐ様な２条の柵列跡及びSD1102壕跡内部に２条を検出した。

西側の柵列（ＳＡ1181柵列跡）は直線で、東側の柵列（ＳＡ1182柵列跡）は鍵形に曲がって壕をつなぐ様に配置されていた。また、２条ともＳＤ1102壕跡には接続しておらず１ｍほどの空間を持つが、壕の土層観察より、外側に土塁の存在を推定でき、そのためと考えられる。

ＳＤ1181柵列跡については12古個の柱穴で構成されており、その径は40cm～80cmである。ＳＤ1163の陸橋部西端から西へ約５ｍの位置からＳＤ1102壕跡の陸橋部西端へほぼ直線的に延びる。全長約 8.5ｍで、柱穴間の長さは一定していない。また、ＳＤ1182柵列跡については12個の柱穴を検出しており、その径は40cm～ 110cmである。柱穴の形状はすり鉢状をなす。ＳＤ1163壕跡の陸橋部東端よりＳＤ1102壕跡に向かって垂直に約 4.5ｍ延び、西側にむかってほぼ直角に折れ曲がる。さらに、約 5.3ｍ西に延びた後、再びＳＤ1102壕跡に向かって直角に折れ曲がり約 4.5ｍ延びる。

これらの２条の柵列は環壕及び土塁と相まって、ＳＤ1102環壕内部に容易に進入できないようにする施設と考えられる。また、これらの柱穴より土器等の明確な遺物は検出しえなかったが、このことよりＳＤ1163壕跡と同時期、つまり後期後半から終末期と考えておきたい。なお、この２条の柵列の最狭部中央に柱穴を検出している。これについても土器等の出土遺物は検出しえなかったが、柵列の柱穴同様すり鉢状の形状を呈しており、扉等の施設に伴うものと推定される。

また、さらに、ＳＤ1102壕跡の内側においても２条の柵列跡を検出している。ＳＤ1102壕跡の陸橋部西端より北へ約３ｍ延び西南に向かって鋭角に折れ曲がり、約３ｍ延びる。13個の柱穴で構成されており、柱穴の径は約30cm前後である。さらにその西側にも南北に約 4.5ｍ延びる柵列跡を検出した。４個の柱穴で構成されており、柱穴の径は40cm前後である。これらについても、並びが雑然としていたり、柱穴が小さいなど、上記の２条の柵列とは様相が異なるが、同様に内部への容易な進入を拒むための施設と考えたい。

以上、これらの遺構についてみてみると、内部への進入に対して厳重な警戒が成されていたことが知れる。北内郭同様に内壕で囲まれている南内郭についてはこれほどの施設は整備しておらず、北内郭の性格を知るうえでの重要な資料となる。

一方、穴倉については調査区北半部で検出したが、前述したように十分な調査がなされておらず、詳細については不明である。本調査区にも、中期前半代の竪穴住居跡が多数存在することより、これらに伴うものであると推定される。

(2)弥生時代の遺物

弥生時代の遺物としては、多数の土器のほか、鉄器や青銅器などがある。

①土器

北内郭跡からは竪穴住居跡等の削平はひどいものの、壕跡を中心に大量の土器が出土している。また、後期を中心に時期的には前期末より継続する場所であり、今後本地域を考えるうえで重要と思われるが、整理途中であり、紙数の関係上一部についてかい摘んで報告したい。

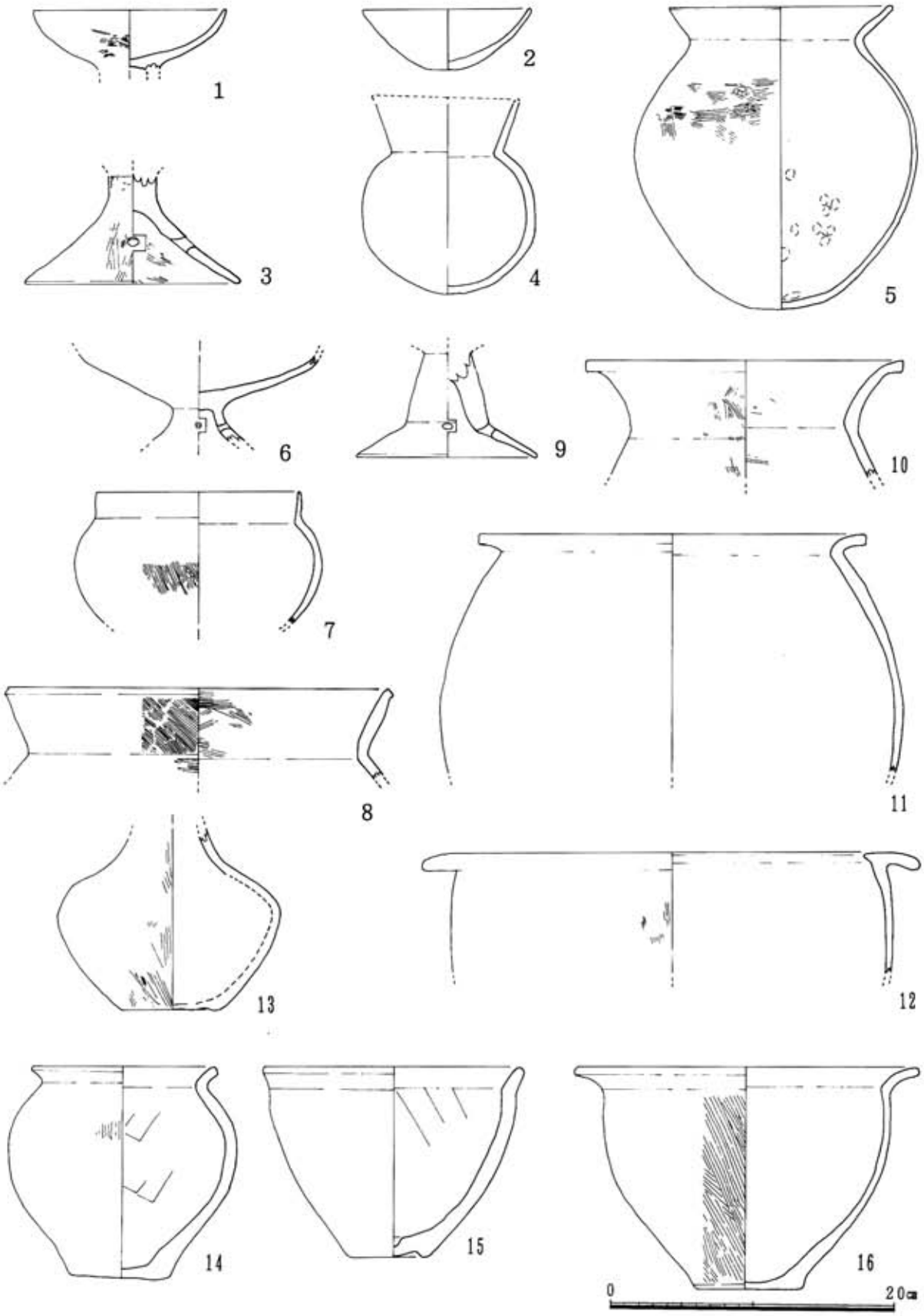


Fig.18 吉野ヶ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(1)

(1～5…SH1103　6～8…SH1106　9・10…SH1111　11・12SH1116　13～16…SH1123)

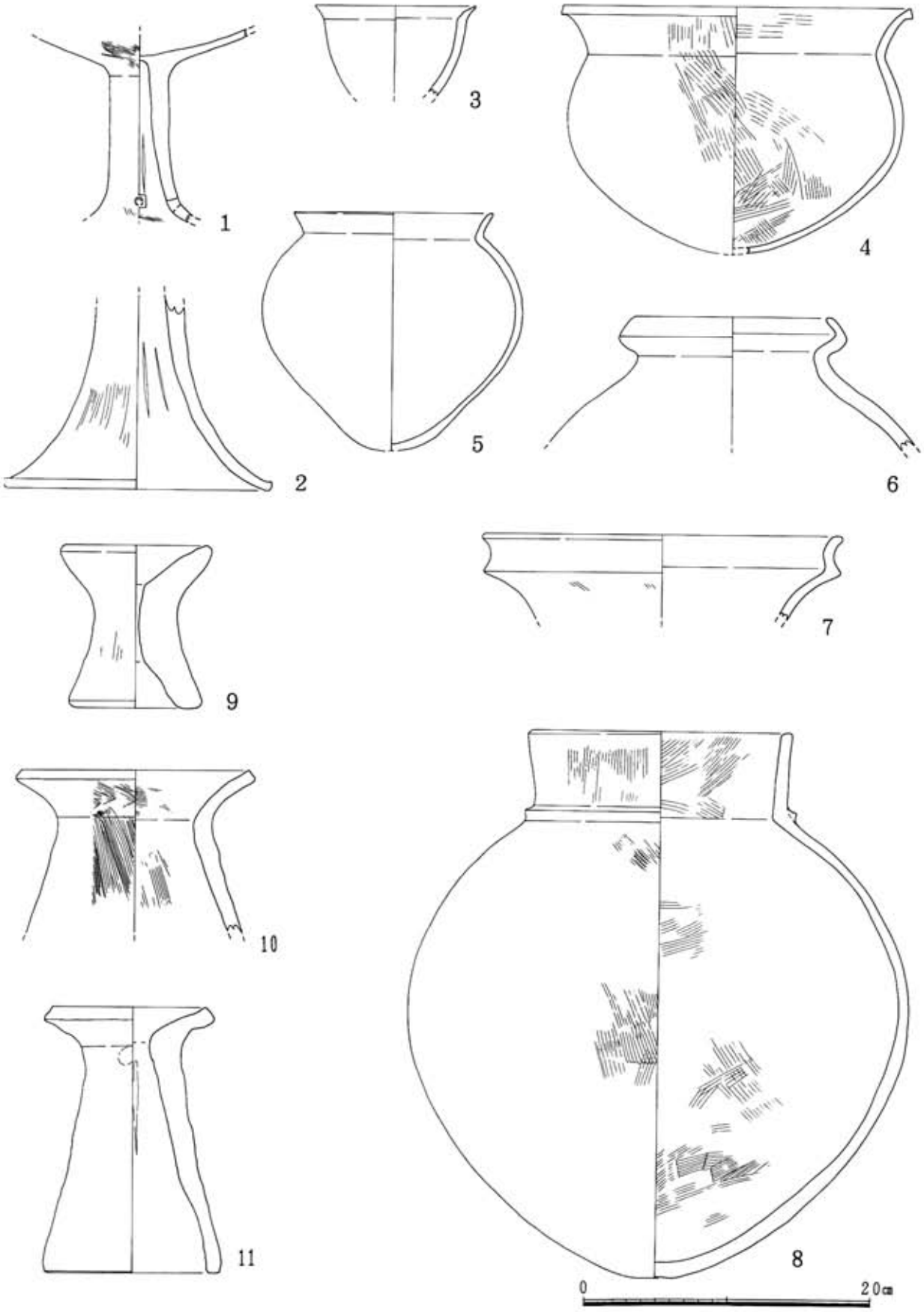


Fig.19 吉野ヶ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(2)

(SH1113)

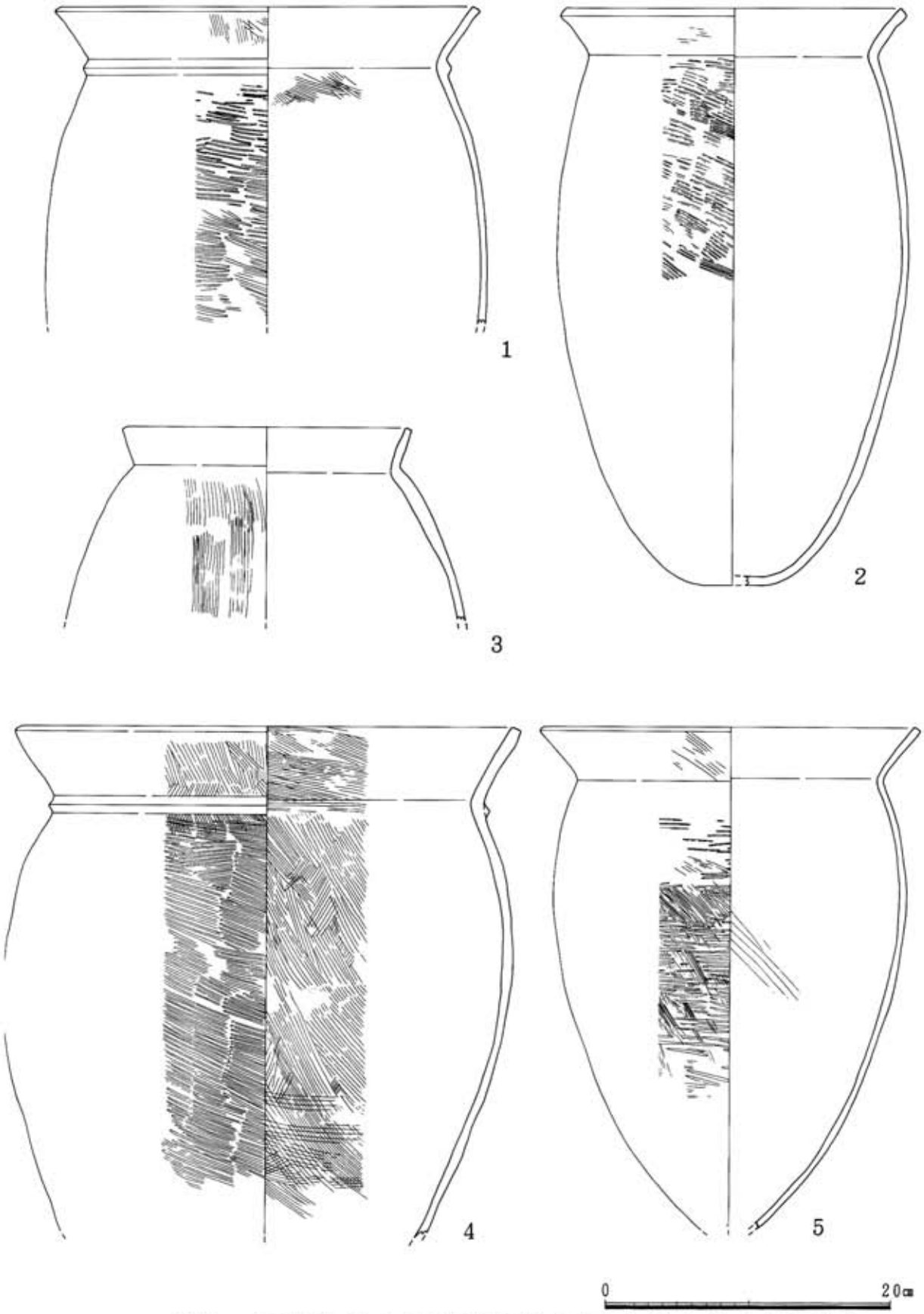


Fig.20 吉野ヶ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(3)

(SH1113)

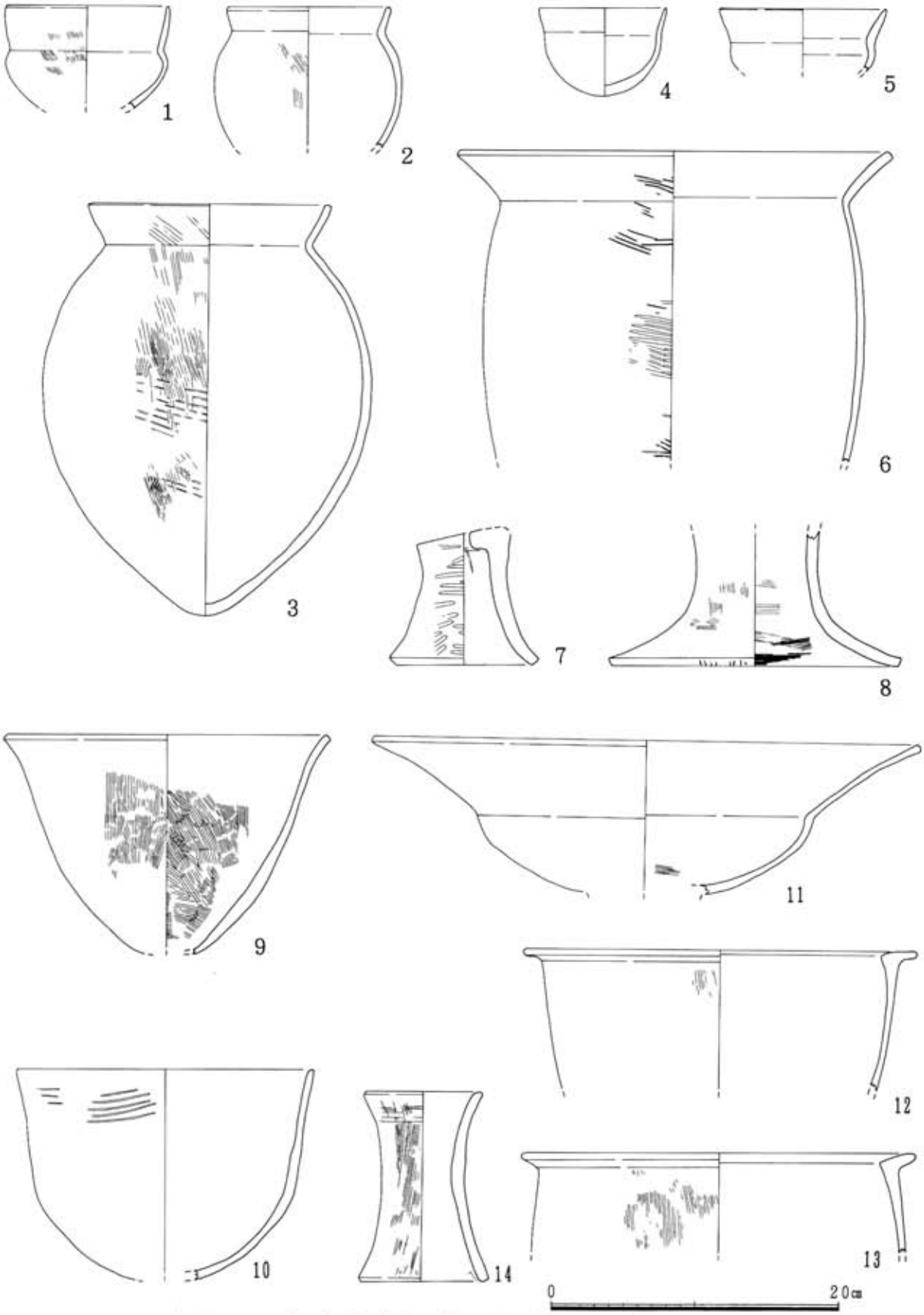


Fig.21 吉野ヶ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(4)

(1～3…SH1143　4～8…SH1145　9・11…SH1146　12・14SH1157)

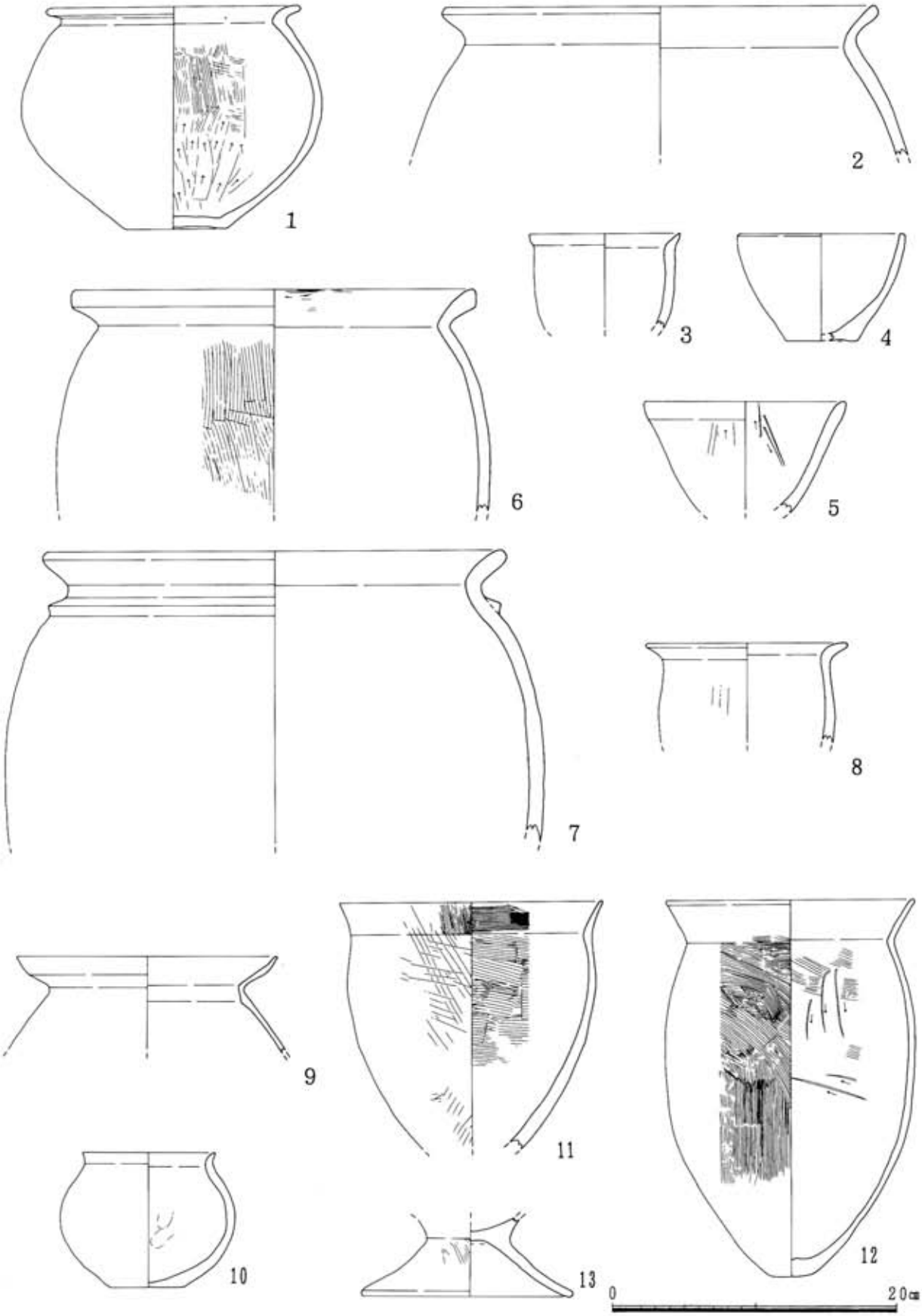


Fig.22 吉野ヶ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(5)

(1～…SH1178　2～5…SH1272　6～8…SH1290　9…SH1302　10…SH1304　11～13…SH1307)

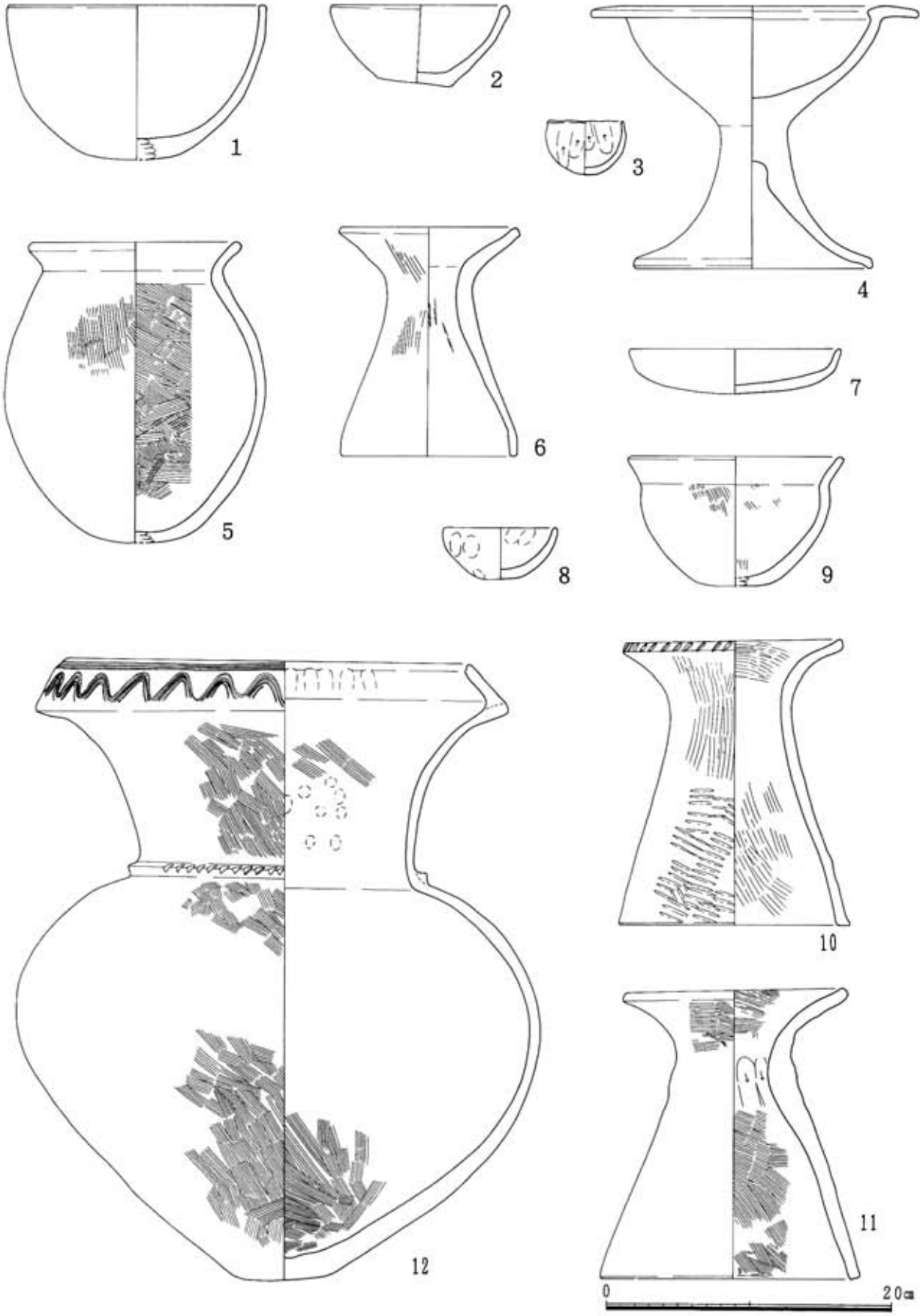


Fig.23 吉野ヶ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(1)

(1～6…ＳＤ1122　7～10…ＳＤ1163　11・12…ＳＤ1162)

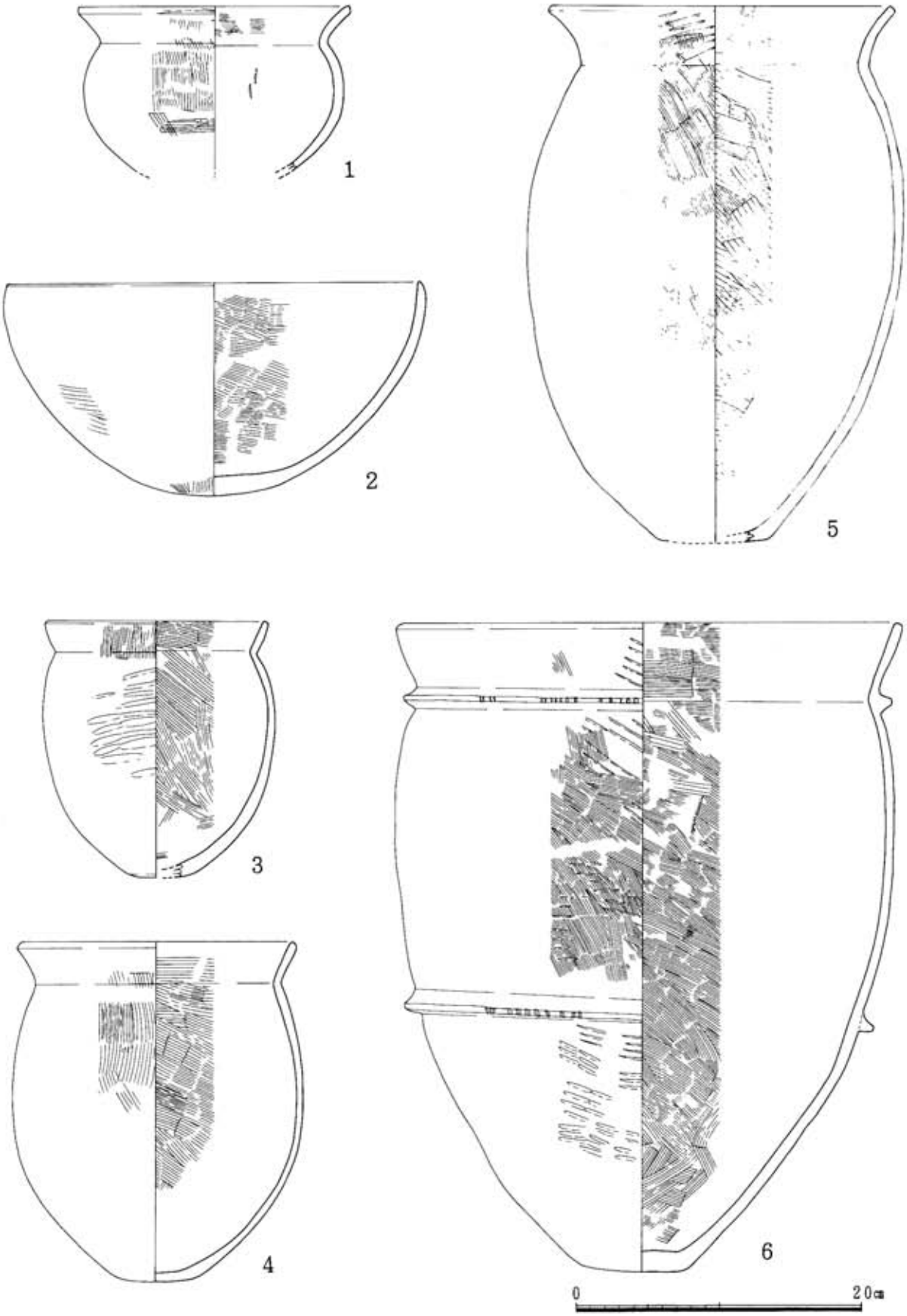


Fig.24 吉野ヶ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(2)

(SD1162)

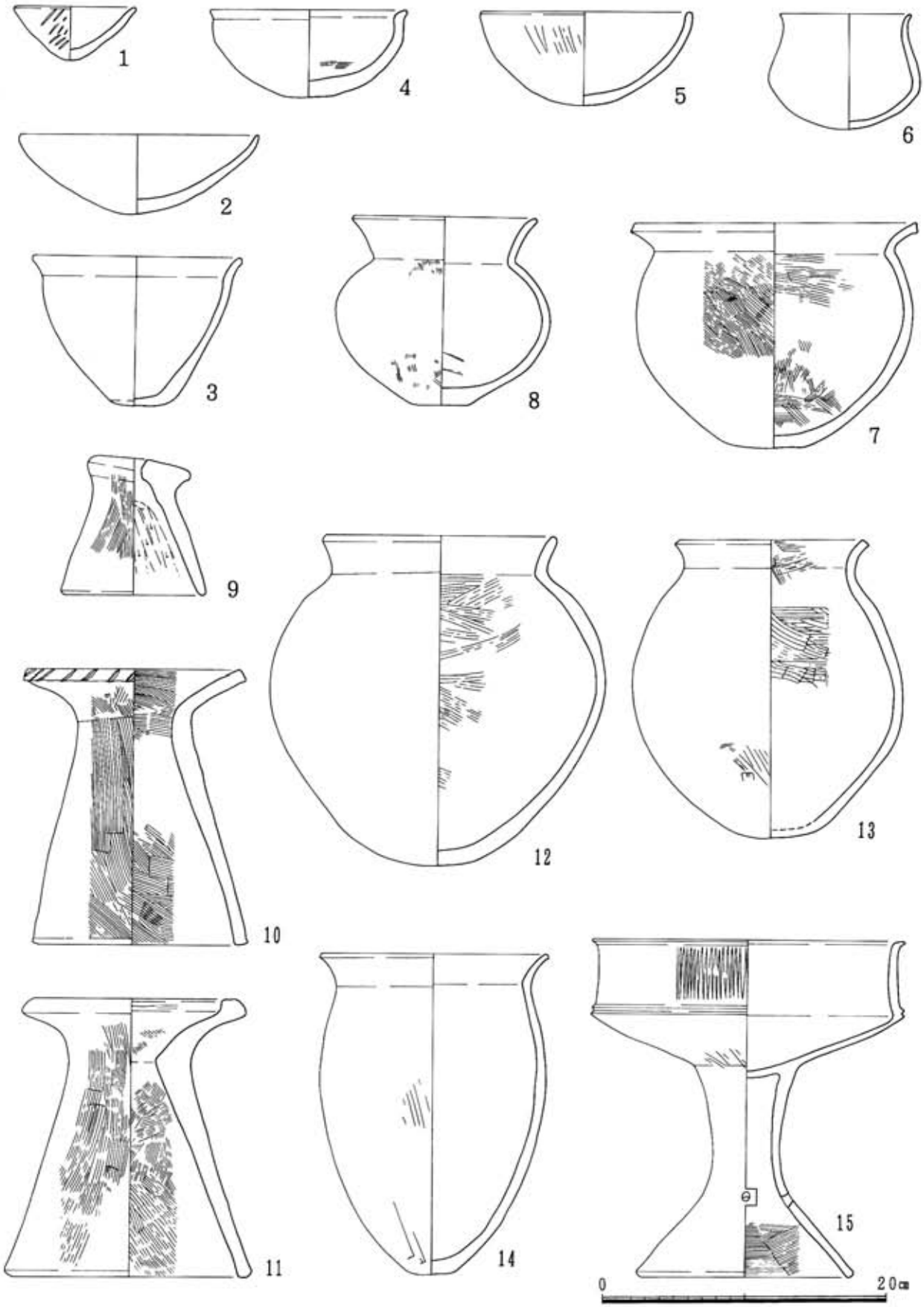


Fig.25 吉野ヶ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(3)

(SD1102)

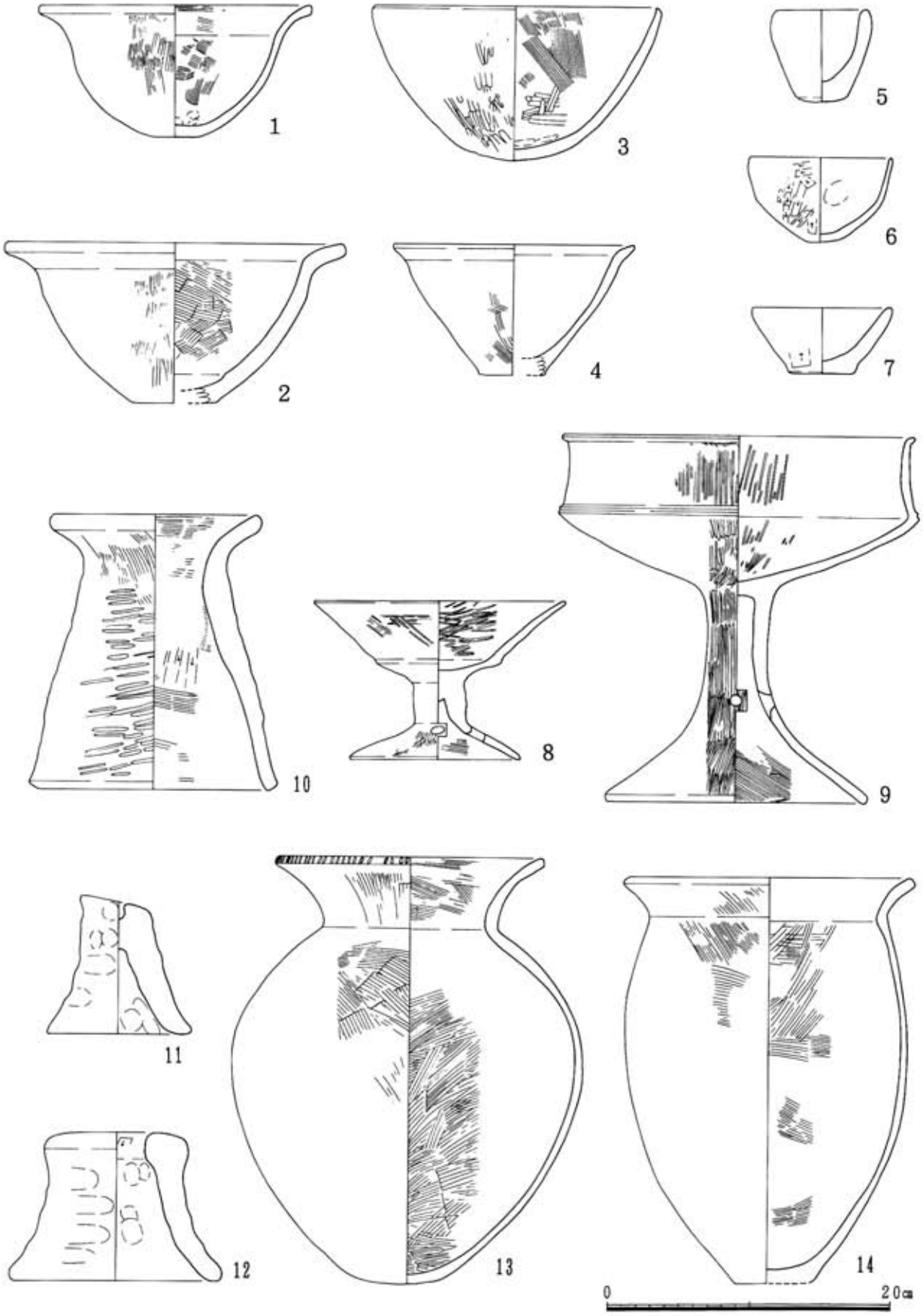


Fig.26 吉野ヶ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(4)

(SD1101)

なお、弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器については、北内郭跡の変遷を考える場合に細かな時期細分が必要と考えられるので、その時期決定については蒲原宏行氏論文(佐賀県立博物館調査研究書台16集「古墳時代初頭前後の土器編年」1991) の佐賀平野を中心とした古墳時代初頭前後の土器編年を使用した。

竪穴住居跡出土土器（Fig.18～22）

ＳＨ1103竪穴住居跡からは甕、壺、高坏、鉢が出土している（Fig.18）。５は甕であり、外面ハケ目調整で丸底を呈する。１・３の高坏は畿内系の低脚杯であり、脚柱部から裾部にはなだらかに移行する。古墳時代の初頭（夕ケ里式期）のものと考えられる。

ＳＨ1106竪穴住居跡からは甕、壺、高坏が出土している（Fig.18）。６は高坏であり、口縁部及び脚裾部を欠損する。低脚杯と考えられる。７は口縁部が短く直立する直口壺である。８は甕であり、口縁部から頸部にかけて残存する。内外面ともハケ目調整を施す。後期終末期（惣座２式）と考えられる。

ＳＨ1111竪穴住居跡からは壺、高坏が出土している（Fig.18）。９は畿内系の高坏であり、杯部は欠損する。やや、内湾ぎみに開く短い脚柱部を持つ。10は広口壺であり、口頸部が大きく外反し、なで肩となる。古墳時代初頭（夕ケ里式期）のものと考えられる。

ＳＨ1116竪穴住居跡からは甕、壺が出土している（Fig.18）。11は短頸壺であり、底部を欠損する。12は甕であり、いわゆる「Ｔ」字状口縁部を持つ。口縁端部は垂れ下がる。中期後半代のものと考えられる。

ＳＨ1123竪穴住居跡からは壺、鉢が出土している（Fig.18）。14は壺であり、口縁部が外反気味に短く開き、底部は平底となる。後期前半と考えられる。

ＳＨ1113竪穴住居跡からは甕、壺、高坏、器台が出土している（Fig.19･20）。２（Fig.20）は在地系の甕であり、凸レンズ底をなす。外面上半に横位のタタキを施す。７（Fig.19）は二重口縁壺であり、口縁部が直立ぎみに立ち上がり、端部はゆるやかに外反する。８は直口壺であり、口縁部はやや外傾するものの直立ぎみに立ち上がる。胴部最大径は中位にあり、底部は丸底となる。また、頸部には凸帯が巡る。後期終末期（惣座１～惣座２）と考えられる。

ＳＨ１１４３竪穴住居跡からは甕、壺、鉢が出土している（Fig.21）。１は鉢であり、口縁部は直立気味に長く延び、肩の張った扁球形を成す。３は甕であり、横方向のタタキを残し底部は尖り気味の丸底を呈する。後期終末期(惣座２式) と考えられる。

ＳＨ1145竪穴住居跡からは鉢、甕、器台、支脚が出土している（Fig.21）。６は甕であり、口縁部は大きく開き、端部は面取りしている。外面にはタタキが残る。後期後半と考えられる。

ＳＨ1146竪穴住居跡からは鉢、高坏が出土している（Fig.21）。11は高坏であり、坏部のみ残存する。坏上半部は外反し、坏下半部は内湾する。後期終末期(惣座２式) と考えられる。

ＳＨ1157竪穴住居跡からは甕、器台が出土している(Fig.21)。12、13は甕であり、口縁部は逆Ｌ字形を成す。中期前半と考えられる。

ＳＨ1178竪穴住居跡内小穴からは壺が出土している（Fig.22）。１は短頸壺である。中期前半である。　ＳＨ1272竪穴住居跡からは甕、壺、鉢が出土している（Fig.22）。２は広口壺であり、口外縁部は短く開く。３は甕である。後期前半と考えられる。

ＳＨ1290竪穴住居跡からは甕が出土している（Fig.22）。６は甕であり、口縁はくびれが強く、口縁端部に向かって厚くなる。外面及び口縁部内面にハケ目調整を施す。７も甕であり、頸基部のくびれが強く、凸帯をもつ。

後期前半と考えられる。

ＳＨ1302竪穴住居跡からは甕が出土している（Fig.22）。胴部以下が欠損する。口縁部は外傾内湾し、肩はなで肩となる。畿内系の精製甕と考えられる。古墳時代初頭と考えられる。

ＳＨ1304竪穴住居跡からは壺が出土している（Fig.22）。10は短頸壺である。後期前半である。

ＳＨ1307竪穴住居跡からは甕が出土している（Fig.22）。11・12は甕であり底部は尖り気味であり丸底である。後期終末期(惣座２式) と考えられる。

環壕・壕跡出土土器（Fig.23～26）

ＳＤ1122壕跡では鉢、壺、高坏が出土している（Fig.23·24 ）。後期前半～後期後半と考ている。

ＳＤ1163壕跡では鉢、器台が出土している。

ＳＤ1162壕跡では甕、壺、鉢、器台が出土している（Fig.23）。12は二重口縁壺である。口縁は内傾し、外面には櫛描波状文及び沈線を施す。底部は凸レンズ状を成す。６（Fig.24）は甕である。５は口縁部は外湾し、端部は面取りを行っている。底部は平底である。６は口縁部が直線的に立ち上がり、最大径は肩部にある。底部は凸レンズ状である。頸部及び胴部には凸帯を巡らし、端面にはキザミを施す。外面上半はタタキをハケによって消している。後期後半と考えられる。

ＳＤ1102壕跡からは甕、壺、鉢、器台、高坏が出土している（Fig.25）。15は高坏であり、坏上半部が直立し、端部は外方向に屈曲する。外面には縦方向の暗文を施す。７は壺であり、口縁部は外湾気味に大きく開く。底部は凸レンズ状を成す。内外面ともハケ目調整を施た。８は壺であり、口縁部は長く、大きく開く。底部は平底を成す。後期終末期（惣座式) と考えられる。

ＳＤ1101壕跡からは甕、壺、鉢、器台、高坏、支脚が出土している（Fig.26）。８は畿内系と考えられる高坏である。口縁部は直線的に延びる。坏柱部はやや内湾気味に短く延び、脚裾部に至る。９は高坏であり、口縁部が直線的に立ち上がり、端部は外方向に屈曲する坏下半部と直立する口縁部の接合部外面には凹線を巡らしている。外面はヘラミガキを施している。13は広口壺である。胴部最大径はやや上位にあり、底部は凹レンズ状を成す。口縁部にはキザミを施す。11、12は支脚である。11は受部が傾斜し、12は受部が水平に近く中空である。14は甕である。後期後半～終末期（惣座２式）と考えられる。

②その他の遺物

土器以外の遺物としては、青銅器、鉄器、石器がある。これらは現在整理中であり、整理の終わった鉄器の一部と青銅器についてのみ報告したい。

鉄器では工具類、農具類、武器類が出土している（Fig.28）。

工具類では鑿、鉋 、鉄斧等が出土している。まず、鑿と考えられるものは５～８の４点出土している。５～７は鍛造品、８は鋳造斧転用鑿である。７はＳＨ1184竪穴住居跡からの出土であり、それ以外は検出時の出土である。５は刃部が湾曲しており、使用による破損と考えられる。また、突合せは重なる。全長約12.4cmで、刃部幅は1.1cmとなっている。６は基部に叩かれたような痕跡が見られたので、鏨の可能性も考えられる。全長10.4cm、刃部幅 0.8cmとなる。７は全長10.4cm、基部幅７cmであり、刃部までほぼ同様の幅である。

８は以前青銅器鋳造関連遺構（田手一本黒木地区Ｉ区　第 154調査区　ＳＫ04土壙）から出土したもの同様、鋳造鉄斧の側辺を利用したものである。全長 8.9cm、基部幅 2.8cm、刃部幅 1.4cmである。

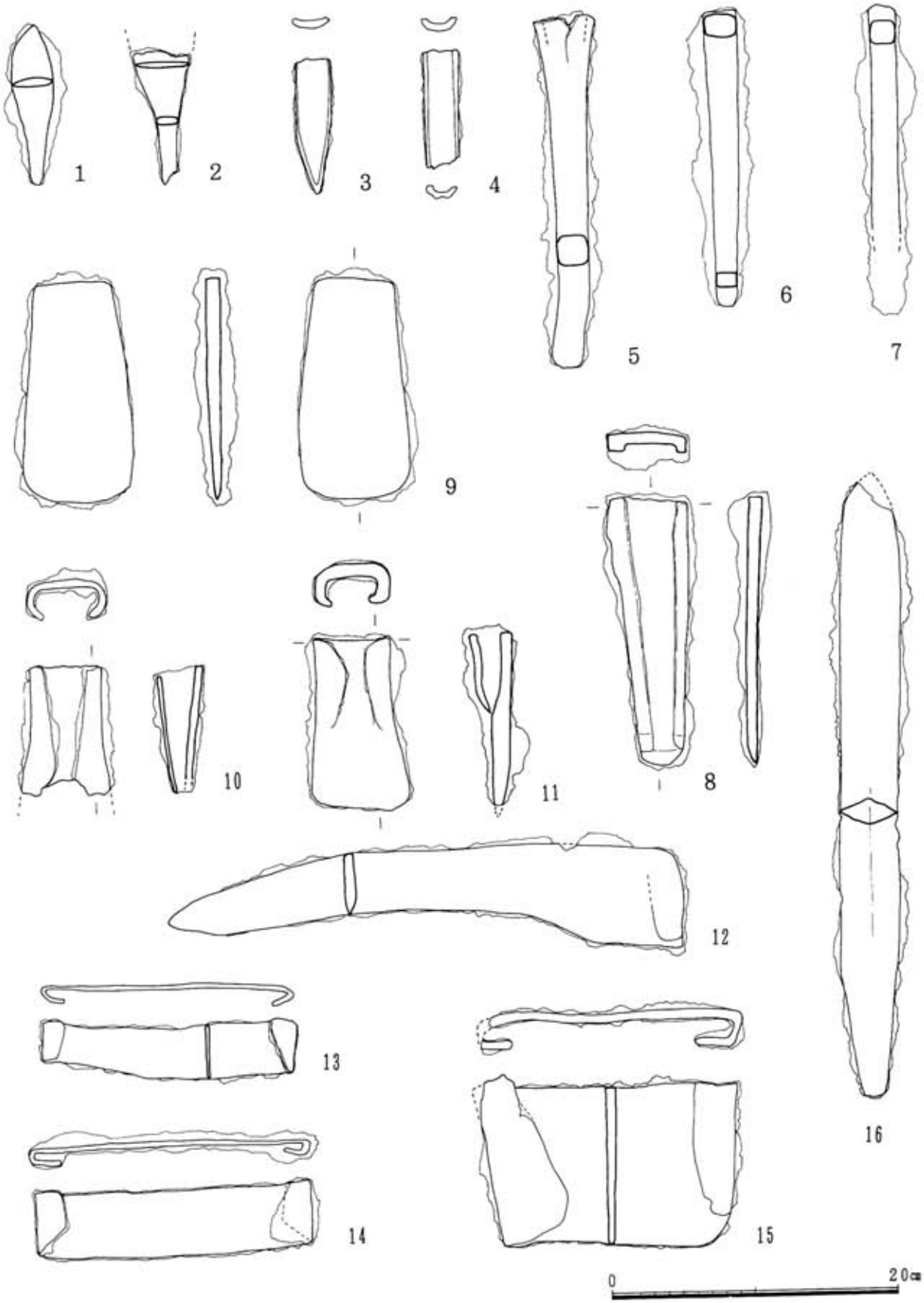


Fig.27 吉野ヶ里遺跡北内郭跡出土鉄器実測図

3・4は　である。3は検出時の出土であり、刃部のみ残存しており、残存長 4.7cmである。裏スキを持つタイプである。4はＳＤ1101壕跡出土であり、身部のみであり残存長 4.2cm、幅 1.1cmで、断面Ｕ字形を成す。

鉄斧は９～11の３点が出土している。袋状鉄斧２点、板状鉄斧１点である。10は袋状鉄斧であり、ＳＨ1113竪穴住居跡からの出土である。刃部が欠損し、袋部のみ残存する。残存長は 4.6cm、基部幅は 2.6cmである。11はＳＤ1101壕跡出土のものである。完形であり、全長 6.0cm、基部幅 2.7cm、刃部幅 3.4cmであり、刃部幅の方が大きい。９は板状鉄斧であり、所属建物不明の柱穴出土の完形品である。全長 7.8cm、最大幅 3.9cmである。

農具類では鎌、摘鎌、鋤先が出土している。12は鎌はであり、ＳＤ1102壕跡より出土している。全長18.1cm、基部幅 3.4cmである。刃部は曲刃であり、基部の折り返しは横Ｕ字形になる。基部及び折り返し部には木質は残存していない。13・14の摘鎌は、ＳＨ1113竪穴住居跡及びＳＤ1162壕跡から各一点ずつ出土している。13は刃幅９cm、縦幅２cmである。また、ＳＤ1162出土の摘鎌（14）は刃幅 9.8cm、縦幅 2.3cmである。背面には有機物が付着する。13は鋤先であり、刃幅 7.9cm、縦幅 5.7cmである。刃部は使用により折り返し部分まで摩耗している。また、折り返しの一方は叩き出しを行っておらず、縦方向に対して鋭角に折り曲げることによって折り返しを形成し、刃部の使用を可能にしている。現時点では破損品の再利用の可能性を考えておきたい。

武器類としては鉄鏃２点、鉄剣１点が出土している。１は有茎で柳葉形のであり、全長5.70cmである。２も同形と考えられるが、先端部を折損している。残存長4.85cmである。16は短剣である。関が不明瞭であり、幅広の長めの茎を持つ。目釘穴は認められない。鎬も不明瞭であり切っ先を欠損する。全長21.5cm、剣身長17.2cmである。

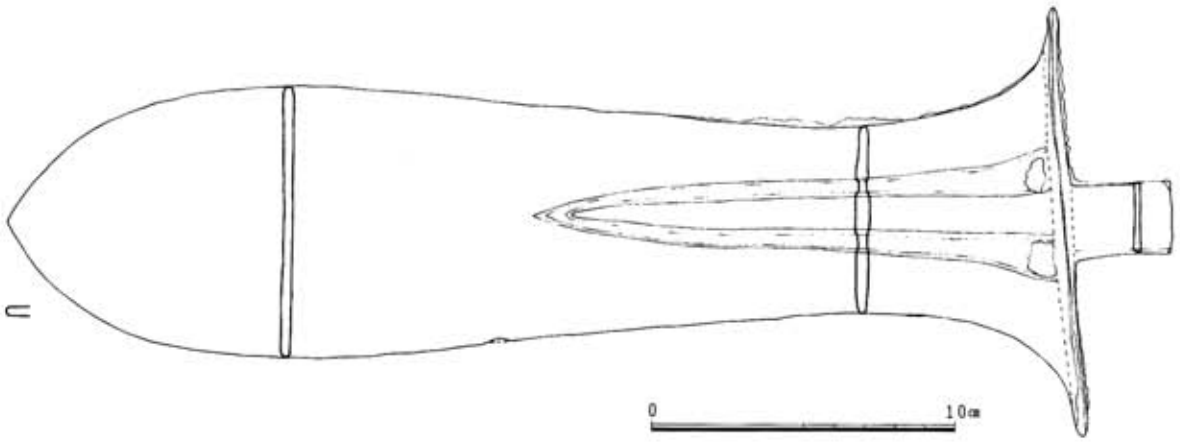


Fig.28 吉野ヶ里遺跡北内郭跡出土中広銅戈実測図

以上、北内郭は完全な発掘をおこなっていないにもかかわらず、多量の鉄製品を出土した。調査面積から勘案するとさらに多量の鉄製品を包含しているものと考えられる。また、すべてを見尽くしたうえで判断すべきであるが、注目すべき点として、工具の割合が非常に高いことがあげられる。

青銅器としては、SD1122壕跡内に掘り込まれた小穴から銅戈が出土している。小穴は、SD1122壕跡方形張り出し部の東側基部付近に掘削されており、平面形態は楕円形であり、長軸48cm、短軸24cm、であった。壕跡は深さ約20cm残存しており、周辺の遺構の深さを勘案すると小穴は壕の埋土上面より掘削されたものではなく、壕の埋没過程途中に埋納されたものと考えられる。さらに、このことより銅戈の埋納は壕跡の埋没に関連したものと考えられる

銅戈（Fig.27）はその小穴の底部に刃部を横にして埋納されていた。切っ先の方向は北である。全長38.1cm、刃部最大幅8.98cm（厚さ0.35cm）、刃部最小幅6.42cm、茎幅2.55m、茎の厚さ0.41cm、関幅13.82cm、関厚さ1.97cmで、重量は481grである。刃部は丁寧に面取りされている。樋内部に文様などは認められない。また、鎬は認められないがその大きさや形態より広形銅戈に近い中広銅戈に属すると考えられる。なお、小穴の土層観察等から、埋納容器等の痕跡は認められなかった。

通常は集落から離れたところから出土するが、今回のように集落内部の特に壕跡から出土したということは興味深い。ＳＤ1122は内壕が掘削され北内郭が成立する直前に埋没しており、何らかの関係が認められる。

北内郭跡は極めて計画的に設計された区画と言える。前述したように、南東から北西ラインを中軸線に取ると、南北はほぼ対象形となる。さらに、入り口も柵列や土塁によって鍵形に屈曲し、容易に中には侵入できないような構造をもっていた。

また、周辺との配置関係を考えると、まず、少なくとも中期前半以来、隣接する甕棺墓群とは厳密に区画されている。前期末には北内郭に北接する場所に甕棺墓群が営まれ、中期後半まで続く。その後ＳＤ1101環壕跡が掘削されるが、墓域には全く侵入していない。さらに、西接する位置にも中期から後期初頭の甕棺墓及土壙墓等が存在するが、北側同様に居住域の侵入は全く見られない。居住空間と墓域としての意識は住居跡及び甕棺墓が出現する、前期末から後期まで存続しているようである。さらに、他地区と異なり連綿とこの意識が続いていることより、当初より単なる居住域を越えた意味合いのある場所であったことが想定される。また、北接する甕棺墓群（吉野ケ里丘陵Ⅴ区）では中央部に幅約1.2ｍの通路状の空白地が存在している。さらにその北部では弥生時代後期の掘立柱建物跡や立柱と考えられる柱穴がある。ここにおいて、墳丘墓の中心に位置する最古のＳＪ1006甕棺墓、立柱跡、掘立柱建物跡、通路状の空白地、北内郭内の大型建物跡などを見た場合、これらは一直線に配置されていることが分かる。また、これらについては、墳丘墓の構築は中期前半であり、埋葬は中期後半まで継続し、甕棺墓群は前期末から中期後半まで、掘立柱建物は後期のものと考えられ、形成時期はそれぞれ異なる。おそらく墳丘墓を中心として、徐々に古いものを取り込み一連の空間を成立させたものとみられる。これら一連の施設群によって墳丘墓を中心とした祭祀的空間を形成したものと考えておきたい。

4．妙法寺跡

田手一本黒木地区Ⅰ区の 220調査区は、吉野ヶ里遺跡南内郭の復元集落から南南東に 500ｍ、ＪＲ長崎本線の北50ｍに位置する。現在の東妙寺とは南流する田手川を挟み西に約 220ｍ離れている。標高は約16ｍの吉野ケ里段丘の南先端部付近にあたる。調査前までは畑として野菜類が生産されていたところであり、調査区は南東方向にや

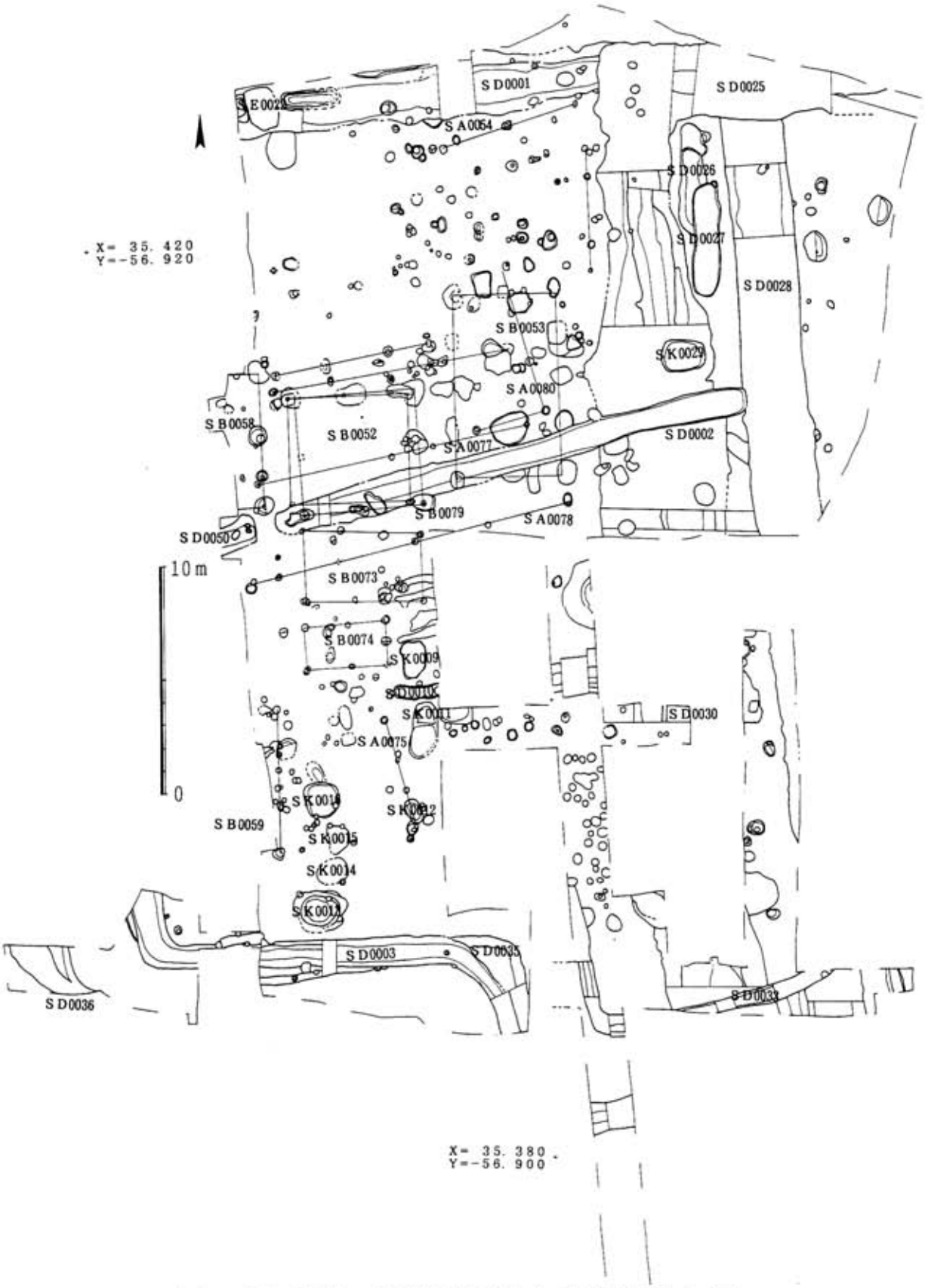


Fig.29 吉野ヶ里遺跡妙法寺跡遺構分布図

や傾斜している。調査面積は947㎡で、東南部はトレンチを設けて部分的な調査を実施した。

この調査区で確認された遺構は、弥生時代中期のものとみられる貯蔵穴跡２基を除いて、ほとんどが鎌倉時代から戦国時代にかけてのものとみられる溝跡20条、掘立柱建物跡７基、柵跡７列、土壙30基、井戸跡１基、小穴多数などを確認した。中世の遺構・遺物の概要については、以下のとおりである。

(1)遺構

①溝跡

溝跡には、建物跡群などが存在する空間を区画するものや、その他の機能をもつと考えられるものが存在する。また、調査区南から北、さらには西、そして再び北へ巡る溝跡も存在する。この溝跡も内部空間の区画線の一部と考えられるが、この溝跡と並行して通称「深道」と呼ばれている中世から現代まで遺存した規模の大きい道路跡が存在している。

ＳＤ0001溝跡

調査区北端の東西溝跡である。幅は約２ｍ、深さは最深部で0.58ｍを計る。方位は北に５度振れる。断面形は逆台形状で壁は上部がやや開いて立ち上がる。また、溝の底は西から東へ緩やかに高くなっている。東はＳＤ0025溝跡によって切られており、延長16ｍが残存していた。

ＳＤ0002溝跡

調査区の中央を東西に走る断面逆台形の溝跡。全長21.4ｍで調査区内において完結している。幅は 1.0ｍ～1.6 ｍ、深さは検出面から最深部までで0.48ｍを計る。方位はE-15°-N である。東端は削平のためわずか0.09ｍの立ちあがりを確認した。また、さらに東側は地形が傾斜しており後世の削平が激しく、この溝の延長上に対応する溝跡は検出できなかった。

ＳＤ0003溝跡

調査区最南部でクランク状に折れ曲がる溝跡を検出した。東西に13ｍ遺存する溝跡が、東端は南へ西端は北へそれぞれ曲がり、調査区内での延長は17.5ｍとなる。方位は東から真西へそしてほとんど真北を向いている。南へは弧を描くように曲がる。溝跡の幅は 0.9ｍ～ 1.2ｍで、深さは 3.5ｍ～ 5.0ｍ遺存していた。

ＳＤ0025溝跡

調査区東を南北に通り、調査区北端で東に直角に曲がる溝。断面形は床が幅広く上部が開くＵ字形である。溝の幅は 3.1ｍ～ 5.6ｍ、深さ0.82ｍ～1.18ｍを計る。屈曲部から南に20ｍ検出し、さらに南へはトレンチで溝の行方を確認した。南になるにしたがって溝の中軸がゆるやかに東に湾曲している。

ＳＤ0028溝跡

調査区東を南北に通り、調査区北端でＳＤ0025溝跡の東西ラインに切られる溝跡。断面形は床が幅広いＵ字形である。溝の幅は 2.7ｍ、深さ 0.4ｍ～ 0.6ｍを計る。南に18ｍ検出し、さらに南へはトレンチで溝の行方を確認した。総延長39.5ｍを検出した。方位はE-5°-Nである。

ＳＤ0030溝跡

調査区東を南北にはしる溝跡をＳＤ0025溝跡の１～５トレンチ（２トレンチのぞく）の下層で検出した。断面はＵ字形で、３・４トレンチでは明確な段がついており、ＳＤ0025溝跡との境が明瞭に観察できた。ＳＤ0025溝跡が掘られる前に掘られた溝である。ＳＤ0025溝跡の延長でＳＤ0030溝跡を検出できなかった部分はＳＤ0025溝跡の底面より浅くなっていたものとみられる。

ＳＤ0033溝跡

調査区南東部に東西にはしる溝跡である。ＳＤ0003溝跡と３ｍの間隔をとり、ほぼ平行してクランク状に曲がる。幅0.45ｍ～0.75ｍ、深さ0.25～0.36ｍの断面逆台形である。東西方向の部分の方位はＳＤ0002溝跡等と同じE-15°-Nと一致している。この溝の延長は東に向かう方向の溝は調査区内では検出できなかった。

ＳＤ0035溝跡

調査区南中央部でＳＤ0003溝跡の掘替えと考えられる溝跡を検出した。検出できたのは北東の曲がり部のかたの部分と、西の曲がり部西北部である。加えてＳＤ0035溝跡の土層からみると滞水したと考えられる水平堆積がみられ、ＳＤ0003溝跡のトレンチ土層の下層が同じように水平堆積がみられた。ＳＤ0003溝跡と同じ方向に掘られているので掘替えと判断した。また、西の拡張部に於いてもＳＤ0003溝跡に切られる溝状のものがみられる。

ＳＤ0036溝跡

調査区西端南のトレンチからＳＤ0003溝跡に３ｍの間隔をとって平行してめぐる溝跡を一部検出した。断面形はＶ字形と考えられるが、西側のかたは調査区外で未検出。表土面から3.25ｍ下からは小石を含む非常に固く締まった砂質の層があった。調査区外南部にもこの溝跡に続いて同じようにクランク状に折れた溝状の落ち込みが地形として残っている。

その他の溝跡

SD0010溝跡は、調査区南西部に位置する断面逆台形状の溝。東西方向に 1.9ｍ検出した。幅0.6 ｍ、深さ 0.1～0.3ｍで床面は調査区外に向かって緩やかに低くなっている。この溝の東約５ｍの位置にあたる平成元年度に実施した４トレンチの調査で検出されたＳＤ03溝跡と同一のものと考えられる。ＳＤ0026溝跡は、ＳＤ0025溝跡北部の西に約１ｍの間隔をもって存在する南北方向の溝跡である。全長 3.9ｍ、幅 1.2ｍ、深さ 0.2ｍの規模である。遺物なし。ＳＤ0027溝跡は、ＳＤ0026溝跡の南に接して存在する溝跡である。全長 4.9ｍ、幅1.15ｍ、深さ 0.7ｍの規模で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ＳＤ0050溝跡は、ＳＤ0002溝跡から西に 0.9ｍ間隔をもってはじまり、調査区外の西にのびると考えられる溝跡。ＳＤ0002溝跡と床面の高さを比べるとＳＤ0050溝跡のほうが0.35ｍ程高い。溝床の東端で柱穴を検出した。

②掘立柱建物跡

調査区では多数のピットを検出した。溝跡の方位との一致や位置関係・柱穴の間隔からみて７基を掘立柱建物跡と判断した。

ＳＢ0052掘立柱建物跡

調査区中央のやや北西寄りにある２間×１間（全長5.24ｍ×5.14ｍ）の平面方形の建物跡である。柱穴の平面形態はほぼ楕円形である。柱穴の大きさは 1.0ｍ～ 1.2ｍ、柱痕跡は径0.15ｍ～0.20ｍである。北中央の柱穴では六角形をした柱痕跡を検出した。六角形の柱痕跡は２本密着した状態で、東の柱は西の柱に対して大きく建物の軸はＳＤ0025・ＳＤ0028溝跡などの方位と一致している。溝に対して建物の方位を合わせているが、柱穴掘り方の大きさに対して小さい柱を用いている。

この建物跡の南には、 0.8ｍの間隔をもち東と西の柱筋を揃えたＳＢ0073掘立柱建物跡と、さらに約１ｍの間隔をもち西側の柱筋を揃えたＳＢ0074掘立柱建物跡が存在する。

ＳＢ0053掘立柱建物跡

調査区の中央部にある２間×４間で建物面積36.0㎡の南北棟の建物跡である。柱穴の平面形態は隅丸方形で不定

型なものや方形のものも含まれる。柱穴の規模も径約１ｍと大きいが、柱痕跡は小さく径0.30ｍ～0.38ｍである。軸はほぼ南北軸に合い１°西に振れる。

ＳＢ0058掘立柱建物跡

調査区中央西端に桁行２間、梁行は調査区外西にのびると考えられる建物跡。柱穴は平面ほぼ円形で0.70ｍ～0.88ｍ柱痕跡0.30ｍ～0.38ｍ、柱間は3.0ｍとなっている。南北軸から５°西に振れるもので、ＳＤ0025・ＳＤ0028溝跡などの方位と一致している。

ＳＢ0059掘立柱建物跡

調査区南西部のＳＫ0016土壙を囲む位置にある１間×１間（2.25ｍ×3.1 ｍ）の平面方形の建物跡である。柱穴は小規模である。

ＳＢ0073掘立柱建物跡

ＳＢ0052掘立柱建物跡の南に方位を揃えて並ぶ１間×３間（1.8 ｍ×3.5 ｍ）と考えられる南北棟の建物跡である。柱穴は小規模である。

ＳＢ0074掘立柱建物跡

ＳＢ0073掘立柱建物跡のさらに南に並ぶ１間×２間（3.05ｍ×5.2 ｍ）の東西棟の建物跡である。梁行の間隔は1.6 ｍ～1.9 ｍと差がある。方位は並んでいる他の建物に比べて若干（約２°）西傾向している。柱穴は平面円形で小規模である。

ＳＢ0079掘立柱建物跡

ＳＢ0052掘立柱建物跡を建替えたと思われる建物跡。規模はほぼ同じ。

③柵跡

柱穴の規模が小さく、柱穴の間隔が広いことや列の総延長が長いものを柵列と考える。４基が存在する。

ＳＡ0075柵跡は７ｍ区間（４間分）を検出した。柱間隔は 1.5ｍで、列方向はE-15°-N 。ＳＡ0076柵跡は20ｍ区間（４間分）を検出した。柱間隔は 5.0ｍで、ＳＤ0002溝跡北西部を囲む柵列跡。方位はE-10°-N で他の柵列の角度と異なる。ＳＡ0077柵跡は６ｍ区間（３間または６間分）を検出した。柱間隔は 2.0ｍ、列方向はE-15°-N で、SD0002溝跡に沿って存在する。西の延長部分は後世の削平を受けているが、さらに西約６ｍの位置で同一の柵跡のものと考えられる柱穴を確認したので、総延長は12ｍ以上となる可能性もある。ＳＡ0078柵跡は７ｍ（または14ｍ）区間（２間または４間分）を検出した。柱間隔は 3.5ｍで、列方向はE15°N である。ＳＤ0002溝跡の南に沿って存在する。ＳＡ0080柵跡は12ｍ区間（４間分）を検出した。調査区中央部に位置するＳＤ0002溝跡の北を東西方向に走り、東から北へ直角に曲がる柵列跡。柱間は 3.0ｍで、方位はE-15°-N である。

④土壙

ＳＫ0009土壙（長径1.56ｍ、短径0.96ｍ、深さ0.11ｍ）は、平面形がいびつな長方形の土壙で、壁は真っ直ぐに立ち上がる。方位は北向き。ＳＫ0011土壙（長径2.60ｍ、短径1.05ｍ、深さ0.24ｍ）は、平面形がやや細長い楕円形の土壙で、２段掘りとなっている。東南部は削平を受けている。ＳＫ0012土壙（長径1.07ｍ、短径0.64ｍ、深さ0.20ｍ）は、平面形が隅丸長方形の土壙で、壁は摺り鉢状に緩やかに立ち上がる。ＳＫ0013土壙（長径2.46ｍ、短径1.80ｍ、深さ0.55ｍ）は、平面形が楕円形の土壙で、壁は床面から緩やかに立ち上がる。ＳＫ0014土壙（長径2.90ｍ、深さ0.05ｍ）は、平面形が方形か長方形の土壙で、削平が激しい。ＳＫ0015土壙（長径1.23ｍ、短径0.87

m、深さ0.11m）は、平面形が不整方形の土壙で、壁はやや急に立ち上がる。ＳＫ0016土壙（長径1.23m、短径0.87m、深さ0.11m）は、平面形が不整方形の土壙で、壁はやや急に立ち上がる。遺構中央部床面では焼土・炭化物がみられる。ＳＫ0029土壙（長径1.94m、短径1.37m、深さ0.45m）は、平面形が隅丸方形の土壙で、壁の立ち上がりは急である。長軸を東西に向けている。ＳＤ0025溝跡の中層から検出したもので、溝が中程まで埋まった後に掘削されたものらしい。

⑤井戸跡

ＳＥ0022井戸跡は長径1.94m、短径1.32m、深さ1.08mの、平面形が隅丸長方形の掘り形をもつ井戸跡で、壁の立ち上がりは急である。井戸枠は痕跡を含め検出できなかった。床面は標高13.4m。ＳＤ0001溝跡の幅に納まる。ＳＤ0001溝跡との関係では、溝のアゼの下層に水平堆積があり、滞水していたとみられる。しかし、溝が高まったところにあることや井戸の長軸が溝の方位と無関係に掘られていることから、溝と井戸が同時に併存していた可能性はないものと考えられる。

(2)遺物

出土遺物としては、土器、陶磁器、瓦、金属製品、石製品などがある。土器の種類は土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器などである。陶磁器は青磁、白磁、青白磁、無釉陶器、褐釉陶器などである。弥生土器・石斧・石戈・石鏃など弥生時代の遺物も出土したが、ここでは中世の遺物についてのみ概略を報告する。

①土器

土器には土師器（土師質土器）の小皿、杯、鍋、壺、羽釜、瓦器の椀、瓦質土器の火鉢などがある。

i. 小皿（Fig.30－１～17）

小皿は、形態的に、深みのあるものと器高が低く扁平なものに分けられる。深みのあるものは、底部から体部が開くように立ち上がるもの、底部から稜をもって体部が急な角度で立ち上がるもの、底部の径が小さく体部が開くものなどに分けられる。すべて底部は糸切り離しで粘土塊から離している。糸切り離し痕が残っているものが多く、中には板状圧痕がついたものも存在する。

ＳＤ0025溝跡の中層からは33個体がまとまって出土したが３・４枚ずつが重なった状態であった。完形のものは26個ある。すべてが糸切り離し。板状圧痕がみられるものは６点で、その内の５点は非常に板目が細かい圧痕がみられた。口縁部がＵ字状に欠けているものが13点あった。うち23個体が口径 6.8cm～ 7.2cm、器高 1.8cm～2.05cm 、底径 4.8cm～ 5.2cm、他の３点が口径 7.4cm～ 7.5cm、器高 2.0cm～2.15cm、底径 5.0cm～ 5.2cmである。

ii. 杯（Fig.30－18～28）

杯は、深みのある小皿の形態と同じく、底部から体部が開くように立ち上がるもの、底部から稜をもって体部が急な角度で立ち上がるもの、底部の径が小さく体部が開くものなどに分けられる。すべて底部は糸切り離しで粘土塊から離している。糸切り離し痕が残っているものが多く、中には板状圧痕がついたものも存在する。口径11.0cm～13.3cm、器高2.8cm ～4.3cm 、底径5.4cm ～8.9cm である。

口径11.4cm～11.8cm、器高 3.4cm～ 3.8cm、底径 7.8cm～ 8.0cmの杯（20）は、外面が丁寧なロクロナデ調整で、内面体部から底部にかけてヘラミガキ様の跡がみられる。焼成良好のためか明褐色となっている。

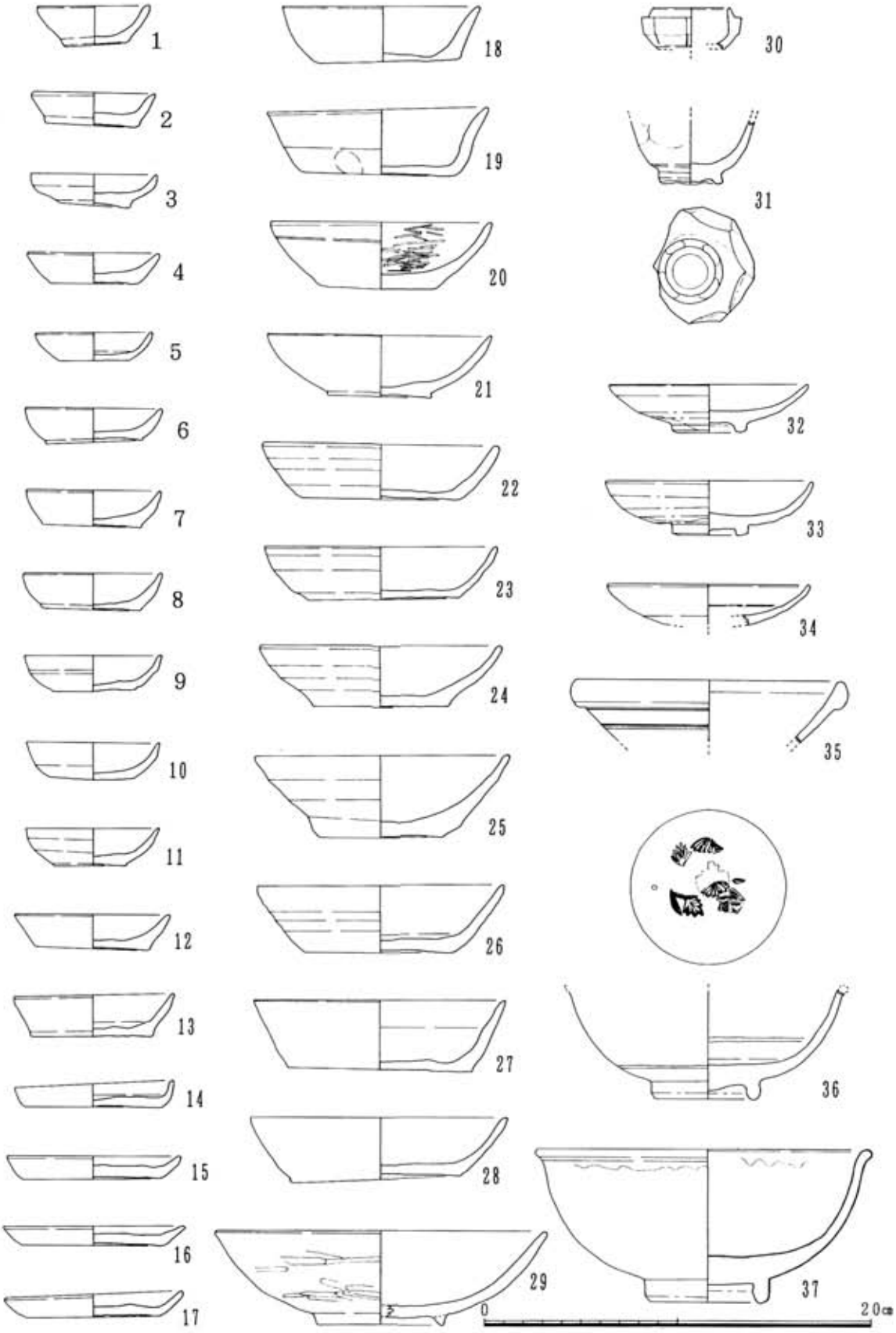


Fig.30 吉野ヶ里遺跡妙法寺跡出土土器・陶磁器実測図(1)

(1…SD0002　2・5~8・12・13・15~19・29・30・32・33・36・37…SD0025　3・9~11・20・21…SK0029　4…SD0027
14・23・27…SK0016　28…SD0001　26・34・35…SD0028・24…SK0011　22・25…SE0022　31…SK0009)

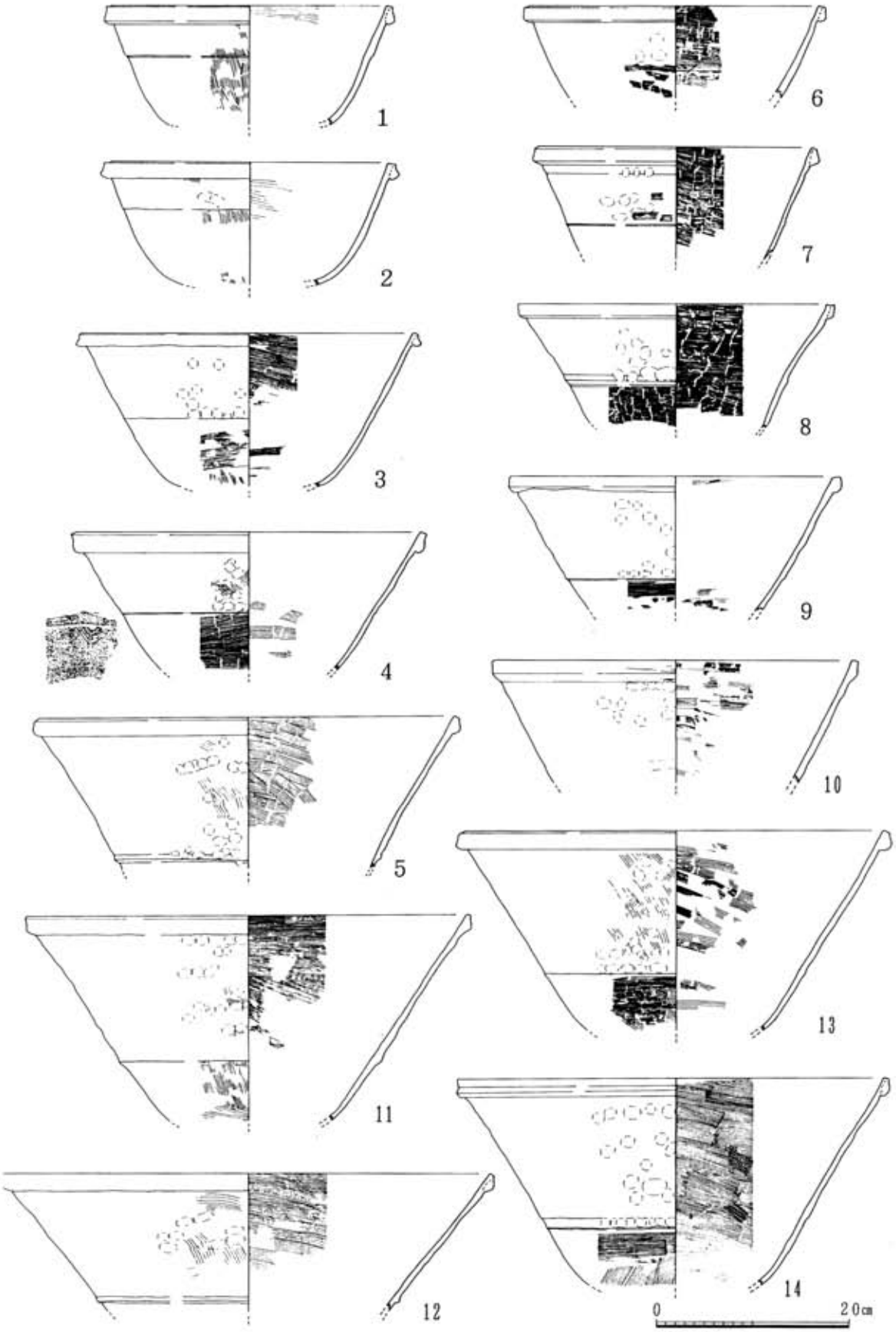


Fig.31 吉野ヶ里遺跡妙法寺跡出土土器・陶磁器実測図(2)

(SD0025)

iii. 椀（Fig.30－29）

瓦器の椀（29）である。底部からわずかに丸みを帯びた体部が緩やかに開く。口縁部はごくわずか外に開く。底には先端が丸い断面三角形の貼り付け高台がつく。体部外面はヘラミガキが施されており、内面はナデ調整である。復元口径17.0cm、器高 4.9cm、高台径6.6cm である。

iv. 鍋（Fig.31－1～14）

鍋は大きさと器形からⅠ類～Ⅴ類に分類できる。すべて底部を欠失している。

Ⅰ類（1・2）は、器形は底部から体部にかけて丸味をもち（胴部がやや張る）、立ち上がりはやや急で内反り気味に口縁が開く。調整は体部内面には横に荒いハケ目後ナデ消し、体部外面は縦に荒い刷毛目が入る。また煤が外面全体に付着している。口縁部は玉縁状で上面にナデで面取りがなされる。口径は28.1㎝～28.4㎝。

Ⅱ類（3・4・9・10）は、器形はわずかに内反（外に膨らむ）して開く体部から底部にかけてやや丸味を帯びる体部中央につなぎ部をもつ。口縁部は玉縁状で上面にナデで面取りがなされる。体部外面上部には指頭痕が多く、斜め方向のハケ目がわずかにみられる。体部下部には隙間なく横方向のハケ目がある。4は体部外面下部には綾杉状のヘラ描き文様が施されている。口径28.4cm～36.6cm。

Ⅲ類（5・13・14）は、器形は底部から緩やかに立ち上がり、体部の下部から口縁部にかけてわずかに外に反りながら直線的に開く。口縁部は外に張りつけた玉縁状を呈する。口縁上面には面どりがなされる。調整は内面体部は口縁部から下部にかけてはくまなくハケ目調整がなされる。体部外面は横方向に並んで指押さえ痕がつき、斜め方向に荒いハケ目調整がなされている。体部外面下部は水平方向にハケ目を施す。口径42.5cm～43.8cm。

Ⅳ類（6～8）は、体部下部から口縁部にかけてわずかに外反して直線的に開く。体部内面上部には横方向に、外面下部には縦方向のハケ目がくまなく入っている。口径は29.4cm～29.8cmであるが、11のような口径45.2cmといった大型のものもある。

Ⅴ類（12）は、体部下部から口縁部にかけて直線的に開く。荒い目のハケ目が口縁部下の体部に斜めに入る。などである。口径49.8cm。

鍋には体部中央付近に段をもつが、その部分の径は8と12を除き、12.6cm～13.4cmの間におさまる。また、これらは調整の仕方で大きく2つに分類することができる。体部内面をハケ目調整後ナデ消しするもの（1～4・9・10）と、隙間なくハケ目調整を施すもの（5～8・11～14）がある。前者が先のⅠ・Ⅱ類に、後者がⅣ・Ⅴ類にみられる傾向がある。Ⅱ・Ⅲ類のものには内面の調整にかかわらず、外面下部に横方向のハケ目調整される一群がある（3～5・8～10・13・14）。これらの鍋は溝跡からの出土であるが、異なる型のものが重なり合って出土した状況などからみて、鍋の使用に際しての使い分けがなされていた可能性がある。

v. 壺（Fig.33－3）

置かれたような状態で出土した1は胎土には小石を多く含む。は体部肩に菊花文がつく2は体部最上部に穿孔が施される。体部外面は褐灰色、胎土は明褐色でわずかに砂粒を含む。復元口径13.0cm。

vi. 羽釜（Fig.33－1～17）

体部は上位で内に曲がり稜がつく1は口縁頸部がわずかに外に開く。体部上部の鉦は、やや鉦・穿孔ともに右

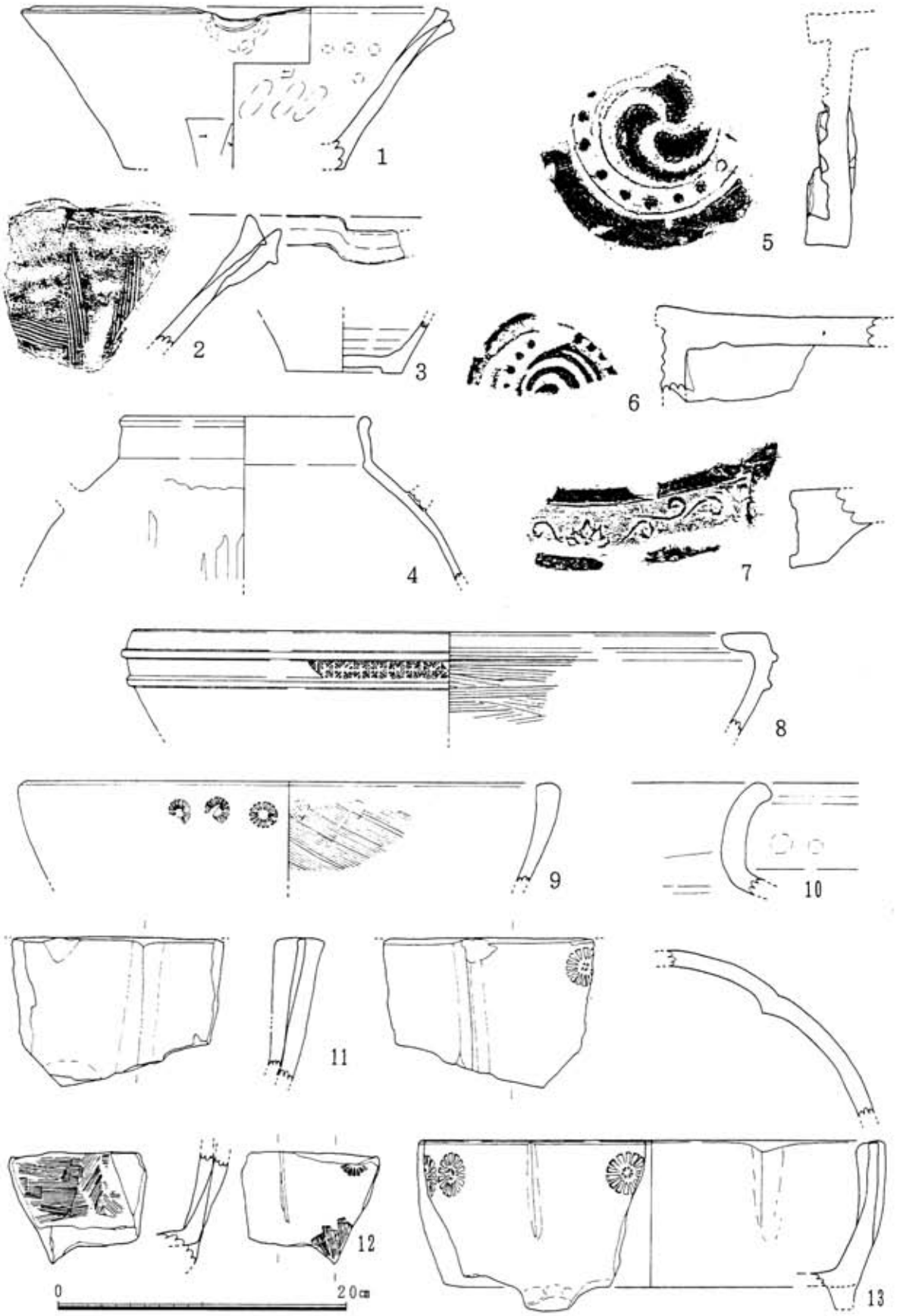


Fig.32 吉野ヶ里遺跡妙法寺跡出土土器・陶磁器実測図(3)

(1…SK0011　2・7・8・11・12…SD0025　3…SK0016　4…SD0001　5…SK0031　6…SK0015　9…SD0028　10…SD0002　13…SE0022)

回転方向に傾いている。鍔下面から体部下部にかけてススが付着。体部外面は暗褐色で紫がかる。胎土は明褐色で砂粒を含む。内面には一部工具痕がみられる。復元口径17.2cm。やや胴が張る２は体部外面肩に意匠のようなヘラ書きがみられる。

vii. 火鉢（Fig.32－８～13）

瓦質の火鉢は、ＳＥ0022井戸跡、ＳＤ0025溝跡、ＳＤ0001溝跡などから、破片を含めて13点出土した。13は胴部中央がわずかに膨らみ、口縁から体部にかけて６箇所の凹部をもつと考えられる輪花状の器形である。体部ロ

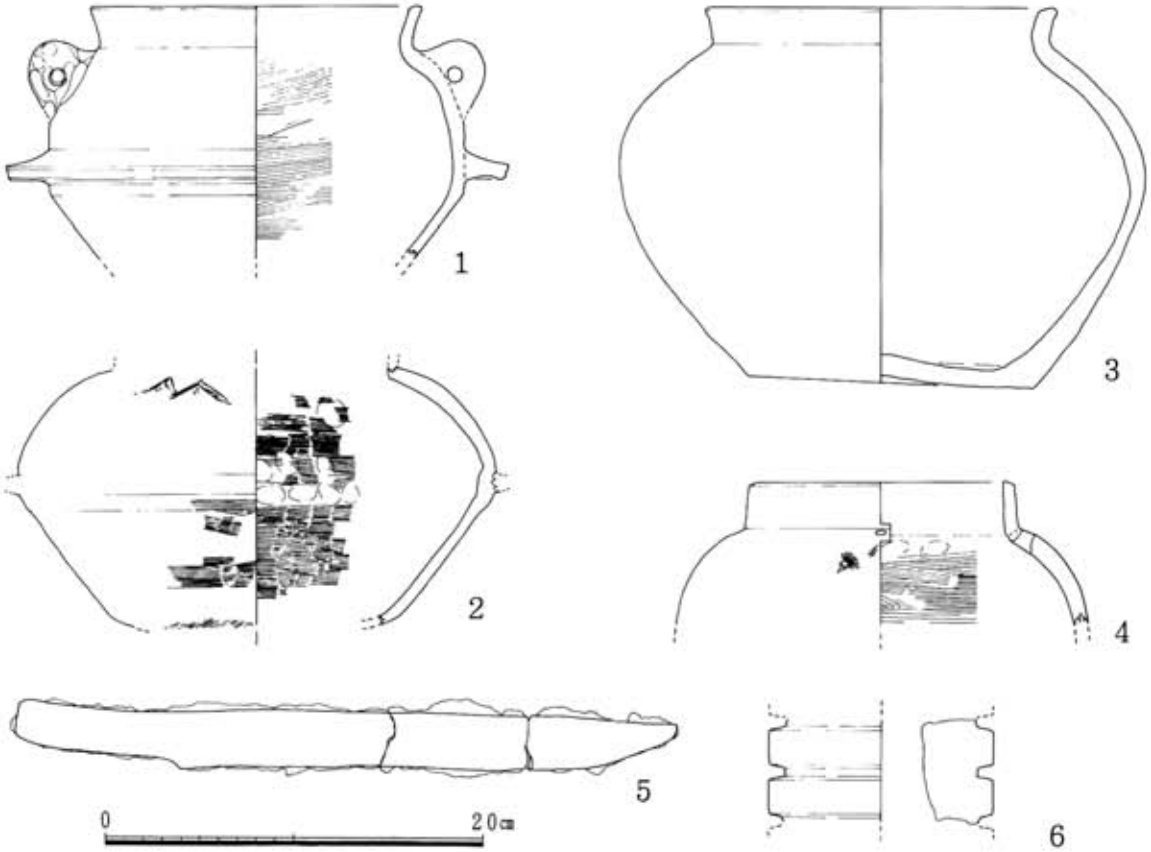


Fig.33 吉野ヶ里遺跡妙法寺跡出土土器とその他の遺物実測図(1)

(1…ＳＤ0003　2～6…ＳＤ0025)

クロナデ、体部内面凸部下には指押さえ痕がある。口縁部にミガキの痕跡がみられる。復元口径は約34cm、器高は11.8cmである。器面はナデで仕上げられているが、凹凸部には縦方向のヘラミガキ、体部外面にはごくわずかな横方向のヘラミガキが残る。輪花は２つ１組で配されるとみられる。胎土は明るい灰白色土で表面には明るい黒灰色の燻しがなされている。表面には黒雲母の微粒が多くみられる。11の輪花の凹凸部は長い棒状のもので外から押さえられたようで、その角度は垂直となっていない。また、窪ませた部分に縦にミガキ痕を残す。胎土は白灰色で褐色の砂粒が多く入る。12は器壁が薄い硬質のもので、凹部の表現がヘラ書きのものである。

９は平面円形とみられる瓦質の火鉢で、菊花文をもつものがＳＤ0028溝跡から出土した。胎土は灰黒色で表面近くは灰白色に焼けている。器壁は黒灰色にいぶされている。内面は斜めに方向の揃ったハケ目がつき口縁近くは横ハケ目後ナデ消し。口縁部近くがわずかに肥厚している。他に土師質の火鉢としては16弁の菊花文を配したものや体部内面のみに凸部をもうけている破片等がある。口縁部が内側に曲がるもので連続スタンプ文（渦文、Ｓ字文、巴文、格子文）を配したものもある。８は復元口径43.2cm。

②陶磁器

i. 陶器捏鉢（Fig.32－１）

常滑焼の片口捏鉢である。復元口径は27.9cm、残存器高11.4cm、復元底径15.5cmである。ＳＤ0025溝跡とＳＤ0001溝跡の切り合い部とＳＫ0011土壙で出土した破片が接合。体部上半はくすんだ赤色で下部にいくにしたがって明るくなっている。胎土は灰黒色から明赤色である。

ii. 陶器擂鉢（Fig.32－２）

備前焼の片口擂鉢である。幅 1.4cmの擂目が縦方向と横方向に走る。胎土は赤味のある灰黒色で粒石が混じる。

iii. 陶器壺（Fig.32－３）

耳をもつ壺の底部とおもわれる。底径7.95cm、素地は灰色で釉薬がかかる。

iv. 陶器甕（Fig.32－４）

大甕の口縁部から肩部にかけての破片で、肩部に耳が付いていたらしい痕跡が残る。復元口外径17.6cm。

v. 青白磁合子（Fig.30－30）

平面八角形になるとみられる合子の身。復元口径 3.8cm。釉はやや青みを帯びた白色で、素地は白色でやや灰味がある。

vi. 白磁杯（Fig.30－31～33）

切り高台の杯（31）の体部は八面の面取りがなされている。釉は黄味を帯びた白色で胎土は明るい褐白色である。高台つきの杯（32・33）の釉は乳白色でやや緑味がある。胎土は灰白色でわずかに黒微砂粒をふくむ。口径10.55cm 、底径 3.9cm、器高 2.8cm。

vii. 白磁皿（Fig.30－34）

高台つきの皿。釉は乳白色で外面の高台側面までかけられる。胎土は白色でやや黄味がかる。見込み部分に沈線を巡らせる。復元口径10.3cm。

viii. 白磁碗（Fig.30－35）

大きく開く体部に大きな玉縁がつく。体部上位外面に沈線が巡る。復元口外径14.4cm。

ix. 青磁椀（Fig.30－36・37）

丸く立ち上がる体部の先端にわずかに外反する先端の丸い口縁がつき、底部には厚く高い高台がつく。胎は厚く、釉も厚くかけられている。36は見込みに草花文があり、復元口径15㎝、底径 5.2cm。釉は淡緑色に発色している。37は口径17.4cm、底径 6.5cm、高さ7.9 cmである。釉は淡緑色に発色している。

③瓦

破片がほとんどであるが、全体の形状が分かるものが数点存在する。

i. 軒丸瓦（Fig.32－５・６）

(31)は瓦当の内区が左回りの三巴文で、中心には径 2.0cmの珠文が入る。巴文の尾部は長くほぼ一周し、まわりには連珠文を配する。瓦当面の復元径は16.1cm。

(15)は瓦当の内区がは左回りの巴文で、尾が内区の界線に接している。外区には珠文が配されている。布目痕がみられる。外区内縁は磨耗しており不明である。

ii. 軒平瓦（Fig.32－７）

均整唐草文で中央飾に木の葉様の文様を配する。外側の唐草文は界線に接している。焼成不良で焼きしまっておらず、燻しがみられないため器面は明黄褐色である。

④その他の遺物

i. 石製品

石鍋小片を20点出土、ほとんどが滑石製である。他に相輪（Fig.33－６）、石臼片、砥石が出土した。相輪は、宝塔もしくは宝篋印塔のものとみられる。軽石様の石を使っている。復元最大径11.8cmを測る。

ii. 青銅製品

銅銭（洪武通寶）がＳＫ0029土壙の上層から出土した。

iii. 鉄製品

小刀（Fig.33－５）・釘などが出土した。小刀はトレンチ中央部の６トレンチのＳＤ0025溝跡の下層から出土した。全長は35.0cmである。

妙法寺は正嘉年間（1257～1259）頃に創建された尼寺であると伝えられている。鎌倉期に描かれたと伝えられる国指定重要文化財の「東妙寺并妙法寺境内絵図」によって七堂伽藍を備えた寺院であったことが理解できる。絵図では、田手川東の東妙寺が瓦葺きであるのに対して、妙法寺は板葺きで礎石建ちの建物となっている。絵図には妙法寺の北西方に丘のような高まりが表現されていることは、南墳丘墓（仮称）との関連で興味深い。東妙寺と並んで寺勢が盛んだったことは、東妙寺文書より窺い知ることができる。

妙法寺は元亀元年（1570）に大友氏の兵火にあい焼失し、知足庵という小堂に本尊だけは祀られていたという。東妙寺は弘安年間（1278～1288）の宇多天皇の命により西大寺唯円上人が西下して元軍退散の勅願寺として創建された14世紀初頭には寄進を受け、妙法寺とともに寺領が増大した様子が文書に記されている。室町期14世紀に度々狼藉禁制は直冬の軍が両寺に駐して、その支配が及んでいたことを示している。中央政権の三巴の政治情勢を反映した九州の社会の緊張と多くの論旨・令旨などは権力者の寺に対する意識と寺勢の隆盛を物語っている。この第 220調査区では、寺域を区画するとみられる溝跡を検出した。鎌倉期の東西溝と南北溝とそれらを切って直角に曲がる南北朝期の溝跡である。この溝跡では染付磁器が最上層から２点出土したのみで、調査区全域でも染付磁器はわずかに散見される程度であることから、この地域に染付が流入したと考えられる15世紀の前半中頃には寺の衰退があったのかも知れない。周辺の確認調査では中世の溝跡がいくつも確認されていることなどから、寺域の移動も視野に入れた調査が必要である。

遺物としては、博多や草戸千軒など地方の流通拠点以外では出土例の少ない奈良火鉢が出土したことは興味をそそる。これは鎌倉時代の井戸跡や溝跡から出土したものであるが、比較的早い時期に地方の一寺院である妙法寺にもたらされたことは、中央の西大寺系寺院との深い関わりが感じられる。また、寺院跡であることを示す遺物として多数の瓦と石塔の相輪などがある。軒丸瓦の中央に点をもつ巴文様は、大宰府の推定金光寺跡出土のものと似る。瓦は鎌倉期の溝跡からごく少数出土するが、大半が南北朝期・室町期の溝跡から出土したことから、鎌倉期の終わり頃に瓦葺きになった可能性がある。

陶磁器については資料の少ない14世紀の遺物が出土したことに加え、あまり一般的ではない器種が含まれていたことも寺院跡であるということを示すとともに、中央と深い関わりを窺わせている。溝跡から土鍋などの調理具が多く出土したが、寺院の厨房関連の施設の存在を思わせる。絵図の中で食堂が寺域の北西部に存在していることと関連があるものと考えられる。また、戦国期の溝跡は、東に田手川という河川、南には幾重にも溝を巡らせているところなどは、中世においても地形を生かした要害の地としての機能を果たしていたことを窺わせている。

調査区北端に位置する東西方向の溝跡は寺域の北を画する溝であった可能性もある。この東西溝の東への延長線が、現在の東妙寺の寺域の北域と合致していることも興味あることである。第 220調査区は調査の直前まで営まれていた畑作によりかなりの遺構が破壊されているが、周辺の広域的な調査によって、全体の伽藍配置や寺院の変遷、さらには「絵図」と出土遺構との関連などが明らかになるものと考えられる。

Ⅴ．おわりに

平成元年度から７年度までの７年間にわたる調査によって、昭和61年度から63年度にかけての工業団地計画に伴う発掘調査段階で知られていた吉野ケ里遺跡の全体像がさらに詳しく把握でき、また、発掘調査が至らず内容が不明であった地区の状況が明らかになりつつあることは大きな成果であった。

成果のうち大きなものをあげてみると、南部（田手二本黒木地区Ｋ区）での中期始め頃の青銅器鋳造に深い関わりをもつ遺構の確認と周辺の竪穴住居跡からの朝鮮系無文土器の発見、北墳丘墓と同様な技術で築造された南墳丘墓（仮称）の確認、工業団地計画に伴う調査で明らかになっていた環壕区画（南内郭）跡とは別に２重の環壕に囲まれた環壕区画（北内郭）跡が発見されたことなどである。また、工業団地計画に伴う調査で出土した遺構や遺物、あるいは調査記録類の整理・分析を通して次第に吉野ケ里遺跡の全貌が明らかになりつつある。また、吉野ケ里遺跡のみならず周辺で実施された発掘調査の成果などによって、弥生時代における佐賀平野東部地区の地域集落の構造がおぼろげながら見えてきたと言っても過言ではない。

以下、弥生時代の吉野ケ里遺跡の集落・墓地の変遷や内容について、これまでの調査成果や分析結果を基に述べてみたい。

吉野ケ里遺跡は、日本初期農耕社会の成立と発展の中で、北部九州の一地域における政治的社会の形成・発展過程を具体的にたどることのできる豊富な情報をもっている。それは、この遺跡が40ha以上におよぶ弥生時代最大の環壕集落であると同時に、弥生時代の全時期を通じて規模を拡大しながら変化・発展していった継続的な集落であるからである。しかも、これら集落と対応して、集落を営んだ人たちを埋葬した墳丘墓や甕棺墓といった墳墓の形式・変化が対応してとらえられるのである。

特に後期段階になると諸施設を整えて都市的な機能を備えるに至り、地域の政治・経済・宗教的な中核集落となったと考えられる。発掘された諸施設の構造・配置などは、『魏志倭人伝』に記す「宮室・楼観・城柵・邸閣」といった施設と符号するところがある。倭人伝に記された国の中で、その中心集落跡が明らかなものは現在調査が進行している長崎県壱岐の原の辻遺跡が唯一であるが、この吉野ケ里遺跡は倭人伝が記す内容、ひいては当時の「国」の中心の様相を具体的に示しているということができる。

１．吉野ケ里弥生集落の変遷

吉野ケ里遺跡の弥生時代集落の変遷については、段丘南部に存在する前期や中期の集落跡や墓地跡の調査が進展していない現状の中で、以下のように考えられる。

(1)弥生時代前期（前４～２世紀）

弥生時代としての土地利用は、弥生時代前期初頭に始まる。段丘の斜面や裾部などに少　数の竪穴住居と貯蔵穴、周囲の墳墓によって構成された小集落が形成される。吉野ケ里遺跡の周辺の低地の微高地上には、神埼町馬郡や神埼ケ里、三田川町田手一本杉遺跡など縄文時代晩期の集落跡が存在しており、これらの集落と関係をもって吉野ケ里遺跡の初期集落が成立したと考えられる。

間もなくして段丘南部（田手二本黒木地区II区、吉野ケ里丘陵地区VII区）の尾根上に、環壕を有する広さ約３haの拠点的な集落が成立する。この集落が形成されたところは吉野ケ里段丘の中で最も段丘の幅が広い場所であり、段丘上で基も良好な集落立地条件を備えた場所といえる。この集落内部及び周辺の状況は未調査のため不明

な点が多いが、竪穴住居と貯蔵穴などから構成された吉野ケ里の中心集落と考えている。この環壕跡は、前期末頃までは機能を維持していた。環壕内から発見された鞴の羽口や取り瓶らしい土製品などは、前期の段階ですでに青銅器の鋳造が始まっていた可能性を示している。

広域的に見ると、小規模な集落とともに中原町町南遺跡や東脊振村松原遺跡などの小規模環壕集落が営まれるが、これらと有機的な結びつきをもった地域社会が形成されていったものと考えられる。約3haという規模の大きさや、集落群の密度から考えられる集住の度合いなどから、吉野ケ里集落が地域の中核的集落へと発展する傾向を強めていったものと考えられる。

(2)弥生時代前期末～中期前葉（前２・１世紀）

各地区に小集落が存在するという前期の状況は、この時期まで継続するが、集落内の竪穴住居数が増加する地区（吉野ケ里丘陵地区VI区）や、新たに集落を形成する地区（志波屋四の坪地区の段丘上など）もあらわれ、遺跡のほぼ全域にわたって集落が形成される。段丘尾根の各所で成人用甕棺墓を主体とする墓地が営まれるが、中には比較的規模の大きい墓地も形成される。段丘南部の前期の環壕は前期のうちに機能を失ったが、多量の土器の散布状況やこの地区の南部で発掘された銅剣・銅矛鋳型や関連の遺構などは、この時期も依然としてこの地区に集落拠点が存在していたことを示している。さらにこの集落拠点内部（田手二本黒木地区III区）には青銅器工房が設けられ、細形銅剣や細型銅矛などの青銅製武器の鋳造は遅くともこの時期には開始されていた。

この環壕集落周辺は中期までの間、吉野ケ里集落のなかの拠点集落が継続的に営まれたところであるが、後に北内郭が営まれる地区（吉野ケ里丘陵地区VI区）でもこの時期にまとまりのある集落が形成される。この地区の集落だけは、弥生時代の終わり、さらには古墳時代初頭まで継続する。

また、この時期には段丘尾根の各所で、成人用甕棺墓を主体とする墓地が営まれるようになり、中には吉野ケ里地区I区や吉野ケ里丘陵地区VII区の墓地のように、比較的規模の大きい墓地も形成されている。

(3)弥生時代中期前半（前１世紀）

この時期の集落は、条壕（環壕になる可能性もある）によって北部を区切られた段丘南端部（吉野ケ里丘陵地区VI区、田手二本黒木地区II・III区、田手一本黒木地区Ｉ区）に存在すると考えられるが、田手二本黒木地区II区で多数の貯蔵穴跡群を発掘したのみで、集落の内容については調査が及んでいない。

後に北内郭が営まれる地区（吉野ケ里丘陵地区VI区）やその周辺（吉野ケ里丘陵地区V区・吉野ケ里丘陵地区Ｉ区）では竪穴住居跡が比較的集中して発掘されており、この場所と段丘南部の２箇所に人々が集住していたものと考えられる。しかし、空間の広がりや出土遺物の量などから、段丘南部が中核的な集落であったものと考えられる。しかし、後に北内郭が営まれる地区については、次の時期以降の祭祀的な文物の出土や、後期に環壕によって閉鎖的な空間が形成される点、前時期から古墳時代まで継続する点などから、特殊性をもった集落であった可能性が高い。

この時期、吉野ケ里集落の構造と形成秩序を知る上で重要な要素と考えられる事象が現れる。北墳丘墓・南墳丘墓（仮称）と長大な甕棺墓の列埋葬の形成である。

北墳丘墓は、後の環壕集落内部の段丘最高所（吉野ケ里丘陵地区V区）に築造されており、長径40ｍという墳丘規模は墓の造営において共同体成員間に顕著な差異が生じていたことを示している。北墳丘墓から発掘された14基の埋葬はすべて成人で、他の墳丘墓とは違って小児墓を含まず親族墓ではなく、特定の身分の歴代の墳墓群といえる。この時期の墳丘墓の甕棺は１基であるが、銅剣が副葬されていた。次の時期を含めた甕棺墓から出土し

た銅剣やガラス製管玉などと合わせ考えると、集落構成員の中から首長ないし祭事権者といった身分的に突出した人々が出現したことを如実に示しているとみることができる。

南部段丘上（田手一本黒木地区Ⅰ区）においても墳丘状の盛土遺構（仮称南墳丘墓）が築かれるが、現在までに10%にも満たない範囲が発掘された状況であるが甕棺等の発見もなく積極的に埋葬施設と規定する根拠は見当たらない。南墳丘墓（仮称）は、北墳丘墓の南約700mの位置の南北を意識した線上（真北に対し6°東に振れる）に存在し、段丘最高所に築かれた北墳丘墓をコントロールポンイトとし太陽運行の南中点方向にあることなどを考え合わせると、祭殿など祭祀行為に関わる施設であった可能性もある。

また、この時期には、段丘の尾根筋に沿って長大な甕棺墓等の大規模な列状埋葬が開始される（志波屋四の坪地区、吉野ケ里丘陵地区Ⅴ区、吉野ケ里丘陵地区Ⅵ区～同Ⅱ区～同Ⅲ区、吉野ケ里地区Ⅱ区～Ⅲ区）。志波屋四の坪地区段丘上から現在の日吉神社の南に接した吉野ケ里丘陵地区Ⅰ区にかけての墓列は長さ600mに及ぶ。これらの長大な甕棺墓列は中央に墓道らしい空白地を設け、その両側に甕棺を整然と埋置しており、つよい社会規制が窺える。ただし、一般の墓地の中にも、周囲の甕棺墓群より際立ったものも存在し、各集団の中にも他の人々からやや突出した個人、あるいは集団が生まれていたことを示している。

以上のように、この時期吉野ケ里集落は、北墳丘墓と南墳丘墓（仮称）の成立により大きな変換点を迎えたといえる。それは単なる段丘上の中核的集落としての性格から、両墳丘墓に象徴される祭祀空間としての性格を備えた集落への変化であり、そして両墳丘墓を結ぶ空間が後の環壕集落形成の計画空間となっていったものと考えられる。

(4)弥生時代中期中頃～中期後半（前1・後1世紀）

南部（吉野ケ里丘陵地区Ⅶ区）の段丘の北部を南北に区切る条壕はこの時期も継続し、住居群はその南に集中して存在するものとみられ、この時期も段丘南部の最も段丘幅の広い地域が居住の中心域であったと考えられる。この時期の終わり頃から後期初頭にかけて、後に南内郭が営まれる地域（吉野ケ里地区Ⅴ区、吉野ケ里丘陵地区Ⅲ区）において竪穴住居が増加する。一方、集落の倉は、中期前半までが主に貯蔵穴であったのに対し、この時期以降は掘立柱形式の高床式となっており、特に段丘南部の西側段丘裾部（田手二本黒木地区Ⅰ区、田手一本黒木地区Ⅱ区）に多く営まれる。

この時期の墓地もそれぞれ中期前半の墓域を踏襲するが、新たな墓域を形成するところもある。依然として甕棺墓を主体とするものであるが、土壙墓（一部木棺墓を含む）も数が増加する。また、この時期の墓地の中にも一般とは周囲の甕棺墓群より際立った墳墓や墳墓群が存在する。墳丘墓に対する埋葬もこの期まで継続されるが、甕棺は13基あり、7本の銅剣やガラス管玉などが副葬されていた。北墳丘墓には壕を渡る墓道と祭祀施設が設けられ、墳丘墓に対する祭祀が開始される。これらに用いられた多数の土器を主体とした祭祀用具は北墳丘墓の東に位置する大型土壙に廃棄されている。この北墳丘墓の墓前・周辺でおこなわれた祭祀は、出土土器の量の膨大で広域な地域性を窺わせる大規模なものであり、吉野ケ里集落が統合的な祭祀の場としての性格を強めていったことを窺わせる。

また、この時期の終わり頃には、墳丘墓を北辺に取り込んで、大規模で各所に出入口を有する外環壕の造営が開始される。外環壕は北墳丘墓と南墳丘墓（仮称）をそれぞれ北端と南端域に取り込んで造営されており、南北約1kmの環壕集落の形成は、地形に大きく拠っているとはいえ、この両墳丘墓を結ぶ空間が環壕集落構成の計画空間となっていると捉えられる。

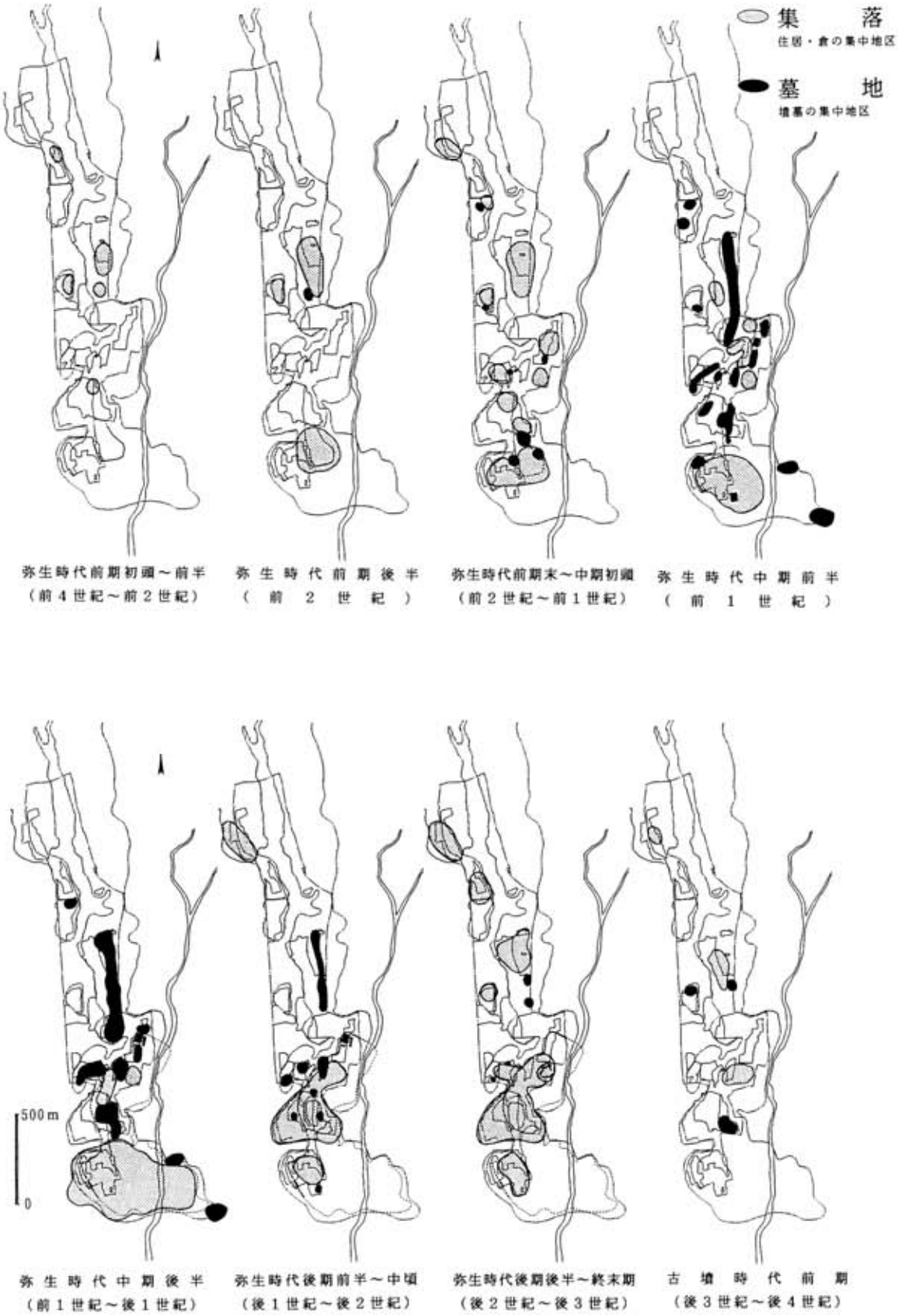


Fig.34 吉野ヶ里遺跡弥生時代の集落・墓地変遷概要図

(5)弥生時代後期前半～中頃（後１・２世紀）

この時期の初めに外環壕は全域が完成するが、この外郭線によって囲まれた範囲は約40ha以上と広大である。この時期の最も大きな変化は、集落の拠点が段丘南部から段丘中央部に移動し、この時期の終わり頃に、外環壕によって囲まれた中央部の段丘上に集落拠点が南部から移動してくることである。また、この時期までには南内郭の北東方約 150ｍの位置（吉野ケ里丘陵地区Ⅵ区）に何らか区画が設けられる。後の北内郭の初現的なものと考えられる。

南内郭の内壕には平面円形の突出部が設けられ、その内側に物見櫓と考えられる大型の掘立柱建物が配置されている。こうした突出部をもつ弥生時代の環壕集落（環壕区画）は神埼郡東脊振村松原遺跡や神埼町迎田遺跡、佐賀郡大和町惣座遺跡など有明海沿岸佐賀平野から筑後川沿岸地域の中核集落の標準的な構造となっている。ただし、この突出部に伴って物見櫓跡が確認されたのは吉野ケ里遺跡が唯一である。福岡県八女市深田遺跡など直線的な環壕に突出部をもつ、あるいは群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡など環壕内側の空間に突出部をもつ古墳時代のいわゆる豪族居館跡は、佐賀平野を中心とした弥生時代後期の突出部をもつ環壕集落をモデルにした可能性がつよく、さらにこのような構造は、中国漢時代前後の城郭都市の城壁に伴う馬面や角楼、甕城といった防御施設からの影響が考えられる。

竪穴住居跡群は、南内郭周辺に集中して営まれる傾向が認められる。内壕内には物見櫓や特別区画の中の竪穴住居（後に掘立柱建物となる）等の特異な施設が設けられる。竪穴住居は内郭内だけではなく、内壕と外環壕との間一帯にも営まれる。南内郭内部および周辺から竪穴住居が集中して発掘されていることや、出土遺物の内容や量などから居住域であったことは間違いないと考えられるが、前時期から継続している段丘南部の集落に居住する人々との間には格差（階層差）が存在したことが考えられる。

このことは、北墳丘墓と南墳丘墓（仮称）をそれぞれ北端と南端域に置く吉野ケ里環壕集落の中で、北がより地位が高く、神聖な場所として意識されるようになったことの現れとも推測され、「南北」がつよく意識された集落構造が感じられる。

この時期までは内郭周辺で青銅器が製造されており、また一帯から 100点以上の鉄器を出土（後期終末期までを含む数）したことは、他の集落との格差を示すと同時に、鉄器生産をも包括する集落であった可能性を示している。倉は、外環壕の外側（吉野ケ里地区Ⅴ区西部）に集中して営まれるが、大型のものが多い。同時に10数棟の高床倉庫が建ち、集中管理されていたものと考えられる。一方、環壕集落の外にも北方などの段丘各区に分散的に集落が存在するが、これらは周辺広範囲に存在した同時期の集落を含め、拠点に対応する衛星的な集落と考えられる。

中期後半に引き続き、北墳丘墓の祭祀はこの時期も継続している。また、墓地においては、甕棺墓も営まれるが、前時期からの土壙墓がさらに盛行し後半頃には土壙墓が墓地の主体となる。しかし、この時期のうちに墳墓の数は激減したものと考えられ、後期後半の確実な墳墓は見当たらない。

(6)弥生時代後期後半～終末期（後２・３世紀）

南内郭跡では、内壕が前時期の内壕よりやや規模を拡大して掘り直され、物見櫓を配置した新環壕区画が営まれる。長方形に近いが湾曲して不整形な平面形をなす前時期の南内郭に較べ、この時期の内郭は長形に近づいた平面形をとり、集落の体裁を整えたものとみられる。物見櫓跡と考えられるものは、内壕の東側で２箇所、北および西側でそれぞれ１箇所の計４箇所確認されている。また、この時期までには南内郭の北東方に約 150ｍの間隔

をもって、内壕と中壕の二重の環壕によって区画され、物見櫓をともなう北内郭が設けられる。平面A字形の対称形をもつなど極めて企画的に営まれた区画であると考えられる。南西部に配置された鍵形の出入口は弥生時代としては特異な存在であり、環壕突出部とともに中国漢時代前後の城壁構造の影響を認めることができる。

北内郭内部には1辺約12.5mの祭殿と考えられる大型高床建物をはじめとする掘立柱建物群を設けており、区画の北外側には倉庫と考えられる小規模な建物群を配置している。

南内郭周辺では、後期中頃までは内郭の内外に住居が営まれていたが、この時期の住居は内郭の内側と北内郭との間を除いて営まれなくなる。内郭内の人々と周辺の人々との間の階層差が明確なったことを示している。このことと対応するかのように、環壕集落北端から北北西約400mの段丘上（志波屋四の坪地区段丘上）に新たな集落が形成される。環壕こそもたないが、竪穴住居の規模は大きく、鉄器や漢式鏡片をもつものもある。

この時期の集落構造で注目すべきは、北墳丘墓と南墳丘墓（仮称）が造営されたとき意識されたと思われる南北の軸線が、この時期にも引き継がれ、北内郭のの造営やその位置に深く関わっていると考えられる点である。北内郭内部の大型掘立柱建物の南北中軸は、この南北軸線に沿って設定されているとみられる。北墳丘墓の南前面で発掘された立柱や拝殿（祠堂）とおぼしき1間×2間の小規模掘立柱建物跡も、この南北軸線上に存在している。北内郭が段丘の尾根ではなく、わざわざ東側の斜面にかかる場所に寄せて営まれていることも、この軸線がつよく意識されていたことを示していると考えることができる。

銅戈や祭祀専用土器群などの出土遺物からも推定できるが、北内郭は南内郭に比べ、より祭祀的な場としての性格がつよく、よりつよく神聖なる場所として意識されていたと考えられ、環壕集落を形成する要素としては機能差があったと推察できる。北内郭は「国」の統治機構を担う首長あるいは祭事権者、南内郭は「国」の統治機構を補佐する一般構成員の上に立つ上層階級の人々の居住区とみなすこともできる。

南と北のこうした配置関係は、中国後漢代の都城にもみられるものであり、また大阪府池上曽根遺跡の大型建物遺構にも南北方位が認められることが指摘されている。弥生時代後半期の集落形成、それも地域的政治社会の中核的集落形成と構成にあたっては、南北方位が一つの原理として用いられるようになったことも想像される。世界の歴史的・民俗的事例が示すように、集落形成にあたって、居住する場所の自然的条件だけではなく、そこに暮らす人々の社会観や世界観が集落構造に具体的に反映されることは広くみられる。また、特に祭祀にかかわる施設の設置にあたって、太陽や月の動きなど天体の動きを基準とし、これを「聖なる基準線」とすることも、多くの事例が示している。

吉野ケ里集落の集落構造の上にも当時の人々の社会観や世界観の反映があり、それはこれまで述べたような南北方位を基本とするものであったと考えられる。

(7)古墳時代初頭（後3～4世紀）

弥生時代の大規模な外環壕や南北内郭の環壕が埋没した後、古墳時代になると段丘の各所で数軒の竪穴住居が営まれ続けるものの、弥生時代の大きな集落は姿を消してしまう。ただし、北内郭区域には大型の住居を含む集落が存続する。また、この時期初めには南内郭区域南東部（吉野ケ里丘陵地区III区）で前方後方形墳墓や方形周溝墓が、北方の段丘尾根（志波屋四の坪地区・志波屋三四の坪乙地区）などで円形周溝墓が築造される。

2．弥生時代後期の吉野ケ里集落

弥生時代の吉野ケ里集落の中で、最も調査が進み、内容が明らかになりつつある後期後半から終末期の状況は、

現状では以下のように考える。

(1)大規模環壕（外環壕）と内郭の形成

吉野ケ里遺跡の後期の集落跡は、段丘の裾部を巡る大規模な外環壕によって区画された内部にその主体が存在する。外環壕の断面形態は底を直に掘り込んだＶ字形をなす。外環壕内の堆積土層は地山のローム土が地形的に低い壕の外側からも堆積しているので、壕の外側に土塁が存在していたものと考える。この外環壕では現在までに５ヶ所で出入り口跡を確認しているが、これらは同時に利用されたものと考える。南内郭跡西側部分では、壕を渡って集落内部に入る通路の両側に門柱跡と考えられる柱穴がそれぞれ３個存在する。外環壕は遺跡の南端から北墳丘墓の北側まで一連のものとして存在するものと考えられる。すべての期間において完全に管理・維持されたかどうか不明であるが、環壕に伴う土塁や柵（城柵）は維持された可能性がつよい。

竪穴住居は、後期初頭までは地区全体の段丘尾根から段丘裾部にかけて少数が営まれているが、後期前半から中頃になって南内郭と北内郭が設けられて後は、それぞれの内郭一帯を中心に数多く営まれるようになる。弥生時代後期前半～中頃になると、後期前半までに完成された外環壕の内部の中央部の段丘上に、南部にあった集落拠点が移動し、また、中期以降継続していた南内郭の北東約 150ｍの位置にも内壕による内郭が形成される。竪穴住居群は、直後に南内郭が営まれる一帯に集中して営まれる傾向が認められるが、南内郭周辺では内壕内はもちろん、内壕と中壕との間、中壕と外環壕との間にも営まれている。

弥生時代後期後半～終末期になると南内郭はやや区域を拡大する。住居は後期中頃までは内壕の内外に営まれていたが、南内郭の内側と北内郭との間などを除いて営まれなくなり、内郭内に住む人々が周辺の人々から隔絶されるようになる。

(2)南内郭

南内郭跡一帯では、弥生時代の遺構として、竪穴住居跡93基、掘立柱建物跡39基などが発掘されている。掘立柱建物跡は後期前半以降のものが大半を占めるが、竪穴住居跡のうち後期前半のものが40基、後期後半から終末期のものが13基である。

後期の新旧の内壕、その他の壕の断面はいずれも底が平たい逆台形となっており、壕内の堆積土層から、特に内壕では外側に土塁を設けていたことが判明した。後期中頃までに設けられた内壕は南北約 150ｍ、東西約70ｍの範囲、後期後半から終末期の内壕は南北約 150ｍ、東西約90ｍの範囲を巡る。環壕内の面積は、それぞれ7800m²と 11000m²である。長方形に近い湾曲して不整形な平面形に巡る古内壕に較べ、新内壕は長方形に近づいた平面形に巡り、規模を拡大して掘り直される。

古環壕には西側南寄りの位置に平面半円形の突出部が１ヶ所みられ、新環壕には東側の入口の両側に２ヶ所、北側に１ヶ所、西側に１ヶ所の計４ヶ所で環壕突出部が見られ、その内側に物見櫓を設けるなど、集落の体裁が整ったようである。古段階の環壕区画は外環壕との間に中壕をもつ二重の区画であった可能性がつよい。内壕の出入り口は東側の南寄りの部分に設けられ、掘り残しの陸橋となっている。古内壕には１ヶ所（埋め戻しの陸橋であったため調査時点では把握できなかったが、環壕内土器の出土数がわずかであったため、２ヶ所に陸橋があった可能性もある）、新内壕には２ヶ所設けられている。

環壕区画の内部には、竪穴住居跡のほか、物見櫓や特別区画の竪穴住居（後に掘立柱建物となる）等の特異な施設が設けられる。区画外の外環壕外側には高床倉庫と考えられる大型の建物跡が存在する。後期前半から終末期にかけてのものが60基は存在しているものと考えられ、同時に十数棟の高床倉庫が建ち並び、物資が集中管理

されていたものと考えられる。この地区については将来全域の詳しい確認調査を実施し、掘立柱建物跡群の内容を明らかにする必要がある。

また、外環壕外郭線上（中心部南東方・吉野ケ里丘陵地区VII区東斜面）には逆茂木状の防備施設を伴う突出部が現れ、さらにこの突出部と内壕との間の吉野ケ里丘陵地区III区南東部には出入り口と考えられる開口部をもつ条壕が設けられる。この条壕は南側（湾曲する内側）に土塁の痕跡があり、南内郭の空間を守るための防御ラインと考えられる。これらのことから、この突出部が大環壕内の集落へ至る主要な入口の一つではないかと考えられる。環壕から出土した土器から、古内壕は後期後半に、新内壕は終末期（庄内式期）のうちに埋没したものと考えられる。

(3)北内郭

北内郭跡一帯では、弥生時代の遺構として、竪穴住居跡約75基、掘立柱建物跡25基以上などが発掘されている。掘立柱建物跡は後期以降のものが大半を占めると考えられるが、竪穴住居跡は後期前半のもの数基、後期後半から終末期及び古墳時代初頭のもの30数基である。南内郭と違って、古墳時代初頭まで集落が継続している。この地区は中期初頭前後から集落が営まれ、古墳時代初頭に至るまで集落が継続して営まれるという極めて特異な区域である。

この地区の西側（吉野ケ里丘陵地区II区）や北側（吉野ケ里丘陵地区V区）には接近した位置で前期末から後期初頭の甕棺墓を主体とした墓地が営まれているが、この墓域内へ集落域が入り込んでいないことや、集落内から中期以降の祭祀用土器群を多く出土することも注目される。

新段階の北内郭は頂点が丸い平面A字形をなす２条の壕によって囲まれているが、中壕は当初南西側へ大きく掘られていたものを、小規模に掘り変えられている。この中壕の基部の両端にも平面方形の突出部が設けられている。壕の断面形態はいずれも底が平たい逆台形となっており、壕内の堆積土層から、壕の外側に土塁を設けていたことが確認された。A字の頂点にあたる南西部には中壕・内壕ともに掘り残しの陸橋の出入り口が設けられているが、両者の位置は内部に向かって一直線上ではなくずらされており、柵列によって囲まれた鍵形に折れ曲がって入るという弥生時代の出入り口施設としては特異な構造である。

内壕・中壕で区画された内部には、竪穴住居跡や、物見櫓と考えられるものを含む掘立柱建物跡、土壙などがあり、区画外には竪穴住居や高床倉庫と考えられるものを主体とする掘立柱建物跡などが存在が、環壕が存在していた期間に共存するものは非常に少ないと考える。北内郭内部の空間の中央南寄りに大型の楼風の掘立柱の高床建物跡が存在する。規模・構造的に群を抜く巨大建物跡であり、これまでの吉野ケ里遺跡で検出した建物跡の中では最も大規模である。

後期後半に営まれた内壕と中壕は終末期に埋没したものと考えられる。なお、古段階内壕の突出部の東の底面に近い位置から、中広形銅戈（銅戈形祭器）が１点水平に置かれた状態で出土したが、新内郭造営時の旧壕埋め戻しの際に地鎮具として埋置されたものと考えられる。

(4)環壕外側の集落

後期になると、環壕集落の外側周辺にも南内郭の北方約 1.5kmの段丘上や他の段丘各地にも分散的に集落が形成されるが、これらは集落構造や出土品などからも環壕区域内の集落とは格差が認められ、段丘周辺の低地にみられる同時期の遺跡を含め、拠点に対応する衛星的な集落であると考えられる。後期後半になると、内郭周囲の

住居が消滅することと対応するかのように、南内郭の北方約800mの志波屋四の坪地区の段丘上に新たな集落が形成される。環壕こそもたない集落であるが、鉄器や漢式鏡片をもつものもあり、周辺の他のこの時期の集落とは際立た違いをみせている。また、内郭外に位置する外環壕で囲まれた内部の集落については未調査のため不明な点が多いが部分的な調査によれば、2～4棟の竪穴住居に高床倉庫が1棟でまとまりを形成するものと推測される。

3．吉野ケ里遺跡の性格と意義

吉野ケ里遺跡周辺および全国の弥生時代集落との比較を通じて吉野ケ里遺跡の性格や意義を把握する。

全国の弥生時代集落跡を概観すれば、各集落跡間では有機的なネットワークが地域内で形成されており、また、それぞれの地域同士が政治的・経済的に結びついて日本の弥生社会を形づくっている。地域ネットワーク内の個々の集落では、立地や集落規模、集落構造、集落の継続性、集落内での手工業生産の有無やその規模、出土品の質や量の違い、その他の事柄などから集落間格差が認められる。このような格差を検証することによって、吉野ケ里集落の特色や地域社会の中における存在意義が理解できると考えられる。

吉野ケ里遺跡が存在する佐賀平野東部は、脊振山麓部やそこから派生した段丘群、段丘に挟まれた谷底平野、さらには有明海に開けた肥沃な三角洲平野に多くの弥生時代の遺跡が分布している。これらの遺跡の分布状況を概観すると、西の佐賀市・郡との間に南北に長い遺跡の分布が希薄な地域が存在し、東の三養基郡（西から律令時代の三根郡・養父郡・基肄郡）との間に分布が希薄な部分はなく、さらに東の鳥栖市との間にそれが存在している。「肥前国風土記」には奈良時代初期に三根郡は神埼郡から分かれた郡であるとあり、弥生時代において律令時代の神埼・三根両郡の範囲（現在の神埼郡と三養基郡西部の上峰町・三根町、佐賀市蓮池町周辺、佐賀郡諸富町一帯）で政治的・経済的・文化的な一つのまとまり（「国」）が存在していたものと考える。

吉野ケ里遺跡は、肥沃な平野を背景に、弥生時代前期から地域の社会的主導権をもち、弥生時代中期において地域（「国」）の中核集落となり、弥生時代後期になって地域の中核的大規模集落として完備された集落であると位置づけられる。集落の規模や構造、施設や出土品の内容などから、弥生時代後期の吉野ケ里遺跡は佐賀平野東部の中では際だった集落であり、集住性や防御施設の存在、祭祀の場の存在、手工業生産の存在などの都市的な要素も多く内包している。

周辺の集落分布をみると、特に後期後半から終末期において、吉野ケ里集落から半径2Γの範囲に可能性が濃いものを含めると4ヶ所の、半径4kmの範囲にはさらに2ヶ所の環壕集落が存在し、戦略的視点からみると、陸路と海からの河川交通の要衝をおさえ吉野ケ里集落を防衛するという、理にかなった分布（配置）と考えられる。周辺に存在が想起されるいわゆる高地性集落の確認は今後の課題である。

地域集落群を構成する集落の規模や構造の違いについては、純農村的な小規模集落跡から中・大規模な集落跡というような規模や環壕の有無などの格差が存在している。集落立地については、吉野ケ里遺跡の場合、段丘の幅が広く（南部で約500m～700m）、周囲に段丘崖が発達しており防御的な意味合いのつよい立地と考えられる。また、段丘の東裾部に田手川、西裾部に貝川、さらに西方に三本松川などの河川の存在は、物資の大量輸送の観点からも優位な立地と考えられる。

弥生時代の集落跡には一時的なもの、断続的なもの、継続的なものの三者がある。吉野ケ里遺跡は弥生時代全時期をにわたって継続するが、佐賀平野全体をみても長期継続型の集落は佐賀郡大和町惣座遺跡や鳥栖市柚比遺跡群、小城郡三日月町土生遺跡などの中核的集落に限られる。周辺の弥生時代墓地を概観しても、東脊振村三津

永田遺跡や、三養基郡上峰町と東脊振村にまたがる二塚山遺跡など多数の漢式鏡や大陸製鉄製武器などの副葬品をもつ墓地は長期継続の墓地である。他の環壕集落は、断続的あるいは一時的に存在したものであり、吉野ケ里遺跡とは性格を異にしている。この点からも、吉野ケ里集落がかなり広範囲な地域の中において、長期間にわたって勢力をもち続けた集落であったと言うことができる。全国的にも中核集落として著名な奈良県唐古・鍵遺跡や平等坊・岩室遺跡、長崎県原の辻遺跡、福岡県比恵・那珂遺跡なども、前期から後期の長期間にわたって営まれた継続型集落である。

弥生時代の集落内の手工業生産については、青銅器・ガラス製品・織物・石製品・木製品・鉄製品などなど様々なものが考えられるが、佐賀平野において特徴的なものは青銅器の生産である。吉野ケ里遺跡では中期初頭から後期初頭までの剣や矛、巴形銅器などの石製鋳型がこれまでに7点出土している。この中には最古式の細形形式のものも含まれており、佐賀平野での青銅器生産の先進性を如実に物語った。また、前期の環壕下層から出土した取瓶や鞴羽口らしい土製品は、さらに古い時期での生産の可能性を示している。吉野ケ里集落では青銅器のほかに鉄器の加工やガラス製品・絹布や大麻布の生産の可能性もある。吉野ケ里遺跡はじめ唐古・鍵遺跡、大阪府の池上・曽根遺跡や鬼虎川遺跡・東奈良遺跡、兵庫県田能遺跡、福岡県須玖遺跡群など地域の拠点・中核的集落では青銅器を主体とする金属器製造などの手工業生産がなされ、集落発展の経済的基盤になったと考えられる。　地域集落群の個々の集落から出土する遺物の量や質についても格差が窺える。大規模かつ中核的な集落跡からは、大量の弥生土器をはじめとする様々な遺物が出土するが、環壕が無く小規模になるに従って鉄器の出土数が減少する傾向がある。吉野ケ里集落内部でも、後期の場合、南北両内郭跡周辺と他の集落跡とでは出土品についての量・質の違いが顕著であった。北部九州や近畿地方の環壕集落などの中核集落と環壕をもたない一般の集落とは、青銅器（鋳型も含む）や鉄器その他の貴重な文物の出土の有無、あるいは出土数の多少によって格差が窺える。ちなみに弥生時代後期の吉野ケ里集落の南北両内郭周辺では、農具・工具・武器など多種にわたる鉄器が多く出土したが、南内郭跡に比べ北内郭跡では数的に工具の占める割合が高かった。

これまでの調査や分析成果をもとに、吉野ケ里遺跡の集落形成についての考えを述べたが、以上のことをまとめると吉野ケ里集落は次のような特質をもつ集落であったと指摘することが可能である。

・弥生時代前期前半から後期終末期にいたるまで、南部（田手二本黒木地区II区・吉野ケ里丘陵地区VII区）の前期の環壕集落を中心に規模を拡大しながら変化・発展していった長期継続集落である。

・弥生時代後期の環壕集落の規模は40haと佐賀平野のみならず、全国的にみてもずば抜けた規模をもつ集落であった。

・弥生時代の生産利器として極めて貴重な鉄器が環壕集落跡中心部を中心として多種・多様にわたり出土している。鉄器と並び、祭りの道具や墓地への副葬品として貴重な地位をもつ青銅器の鋳型が多く発見されており、少なくとも中期初頭から一貫して青銅器生産がおこなわれていたと考えられる。このほかにもガラス製品、絹織物などの手工業生産品が出土している以外にも、南海産貝製腕輪など広く交易がおこなわれていたと推定できる遺物も多数出土している。

・一般の埋葬形態とは際立った違いをみせる墳丘墓が中期前半に築造され、これに対する祭祀が後期に至るまで継続されている。さらに後期後半には北墳丘墓の南前方に祭殿を思わせる大型掘立柱建物を内部に置く特殊区画（北内郭）が成立するなど、周辺の集落にはみられない大規模で特殊な祭祀的施設が存在する。

・これらの特質は、まさに弥生時代の中核的大規模集落の特性そのものである。

・また周辺集落の状況をみると、吉野ケ里遺跡が中核的大規模集落としての形態を整える弥生時代後期には、吉野ケ里の周辺で交通や軍事的に要衝と思われる場所に環壕集落が立地し、さらにその周辺には環壕をもたない一般集落が分布する様子を窺うことができる。
・こうした集落の在り方から、弥生時代後期の佐賀平野東部では、集落間の階層化が進行し、各階層の集落が有機的に結びつきながら、ピラミッド的な地域的社会（「国」）を構成していたと考えることができる。
・吉野ケ里遺跡は、その頂点に位置する集落跡であり、その成立の背景には、佐賀平野の高い農業生産力と、出土遺物にみられる鉄器、青銅器、絹織物などの手工業生産や他地域との交易等の活発な経済活動、それに墳丘墓祭祀等に代表される独自の祭祀的世界観によって形成されていった部（種）族社会の成熟があったと推察できる。

いずれにせよ、未調査地区である段丘南部や段丘西の水田地帯の発掘調査さらには広域的な調査をおこない、既調査遺跡の再評価などと合わせ、吉野ケ里遺跡のもつ内容の把握に努めなければならない。

なお、本文は、国営吉野ケ里歴史公園整備計画策定のために、建設省九州地方建設局国営吉野ケ里歴史公園工事事務所が開催している「国営吉野ケ里歴史公園建物等復元検討委員会（工藤圭章委員長）」や佐賀県教育委員会が開催している「吉野ケ里遺跡建物等復元研究会」の委員の中の特に工藤圭章（沼津工業高等専門学校長）・大塚和義（国立民族学博物館第１研究部教授）小田富士雄（福岡大学人文学部教授）・金関恕（天理大学文学部教授）・小林達雄（國學院大学教授）・小泉和子（生活史研究所代表）・高倉洋彰（西南学院大学文学部教授）・田中淡（京都大学人文科学研究所教授）・西谷正（九州大学文学部教授）・宮本長二郎（東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センター長）・村武精一（共立女子大学文学部教授）などの諸先生や、カ歴史環境計画研究所の秋山邦雄・小山久美子両氏からの教示や討論、また調査員諸氏との議論の成果に期するところが大きい。国営吉野ケ里歴史公園建物等復元の検討結果については、建設省九州地方建設局国営吉野ケ里歴史公園工事事務所から『国営吉野ケ里歴史公園建物等復元検討調査報告書』として、平成８年３月に刊行されている。

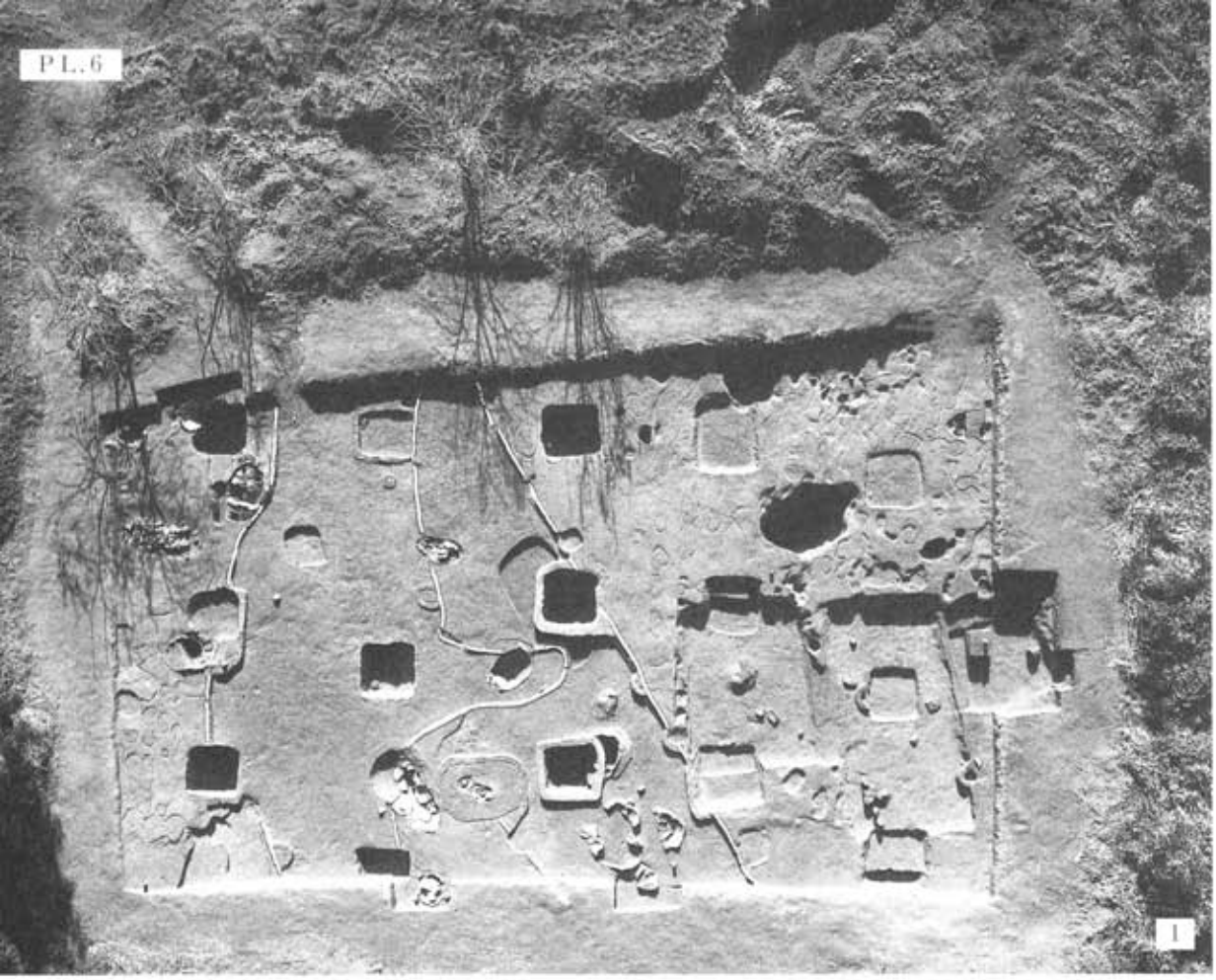
吉野ケ里遺跡全景〈仮復元状況、西上空から〉

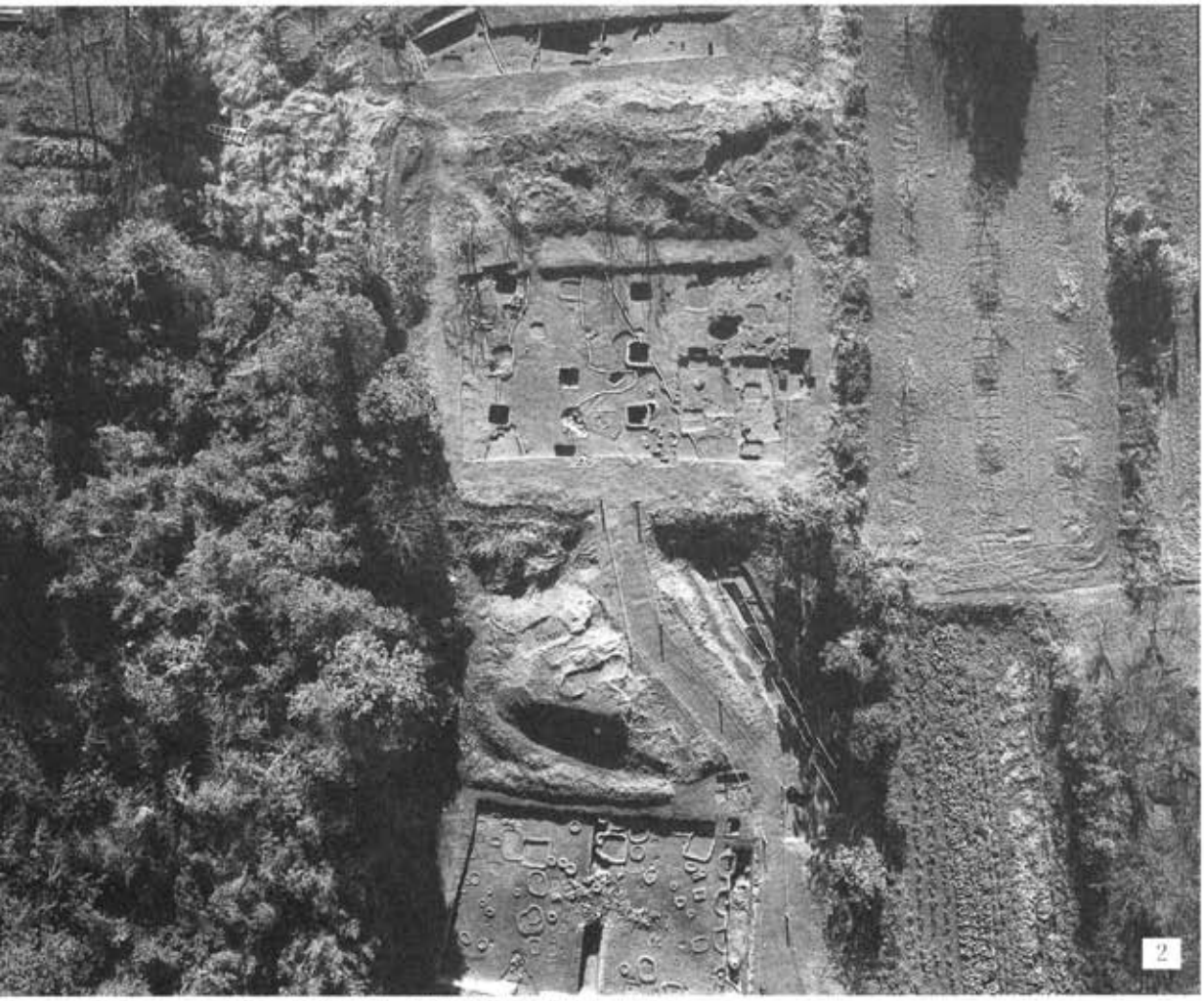
1．青銅器鋳造関連遺構全景〈第154調査区ＳＫ104土壙、北から〉
2．青銅器鋳造関連遺構全景〈第154調査区ＳＫ104土壙、南から〉

1．南墳丘墓跡（仮称）全景〈北から〉
2．南墳丘墓跡（仮称）全景〈上が南〉

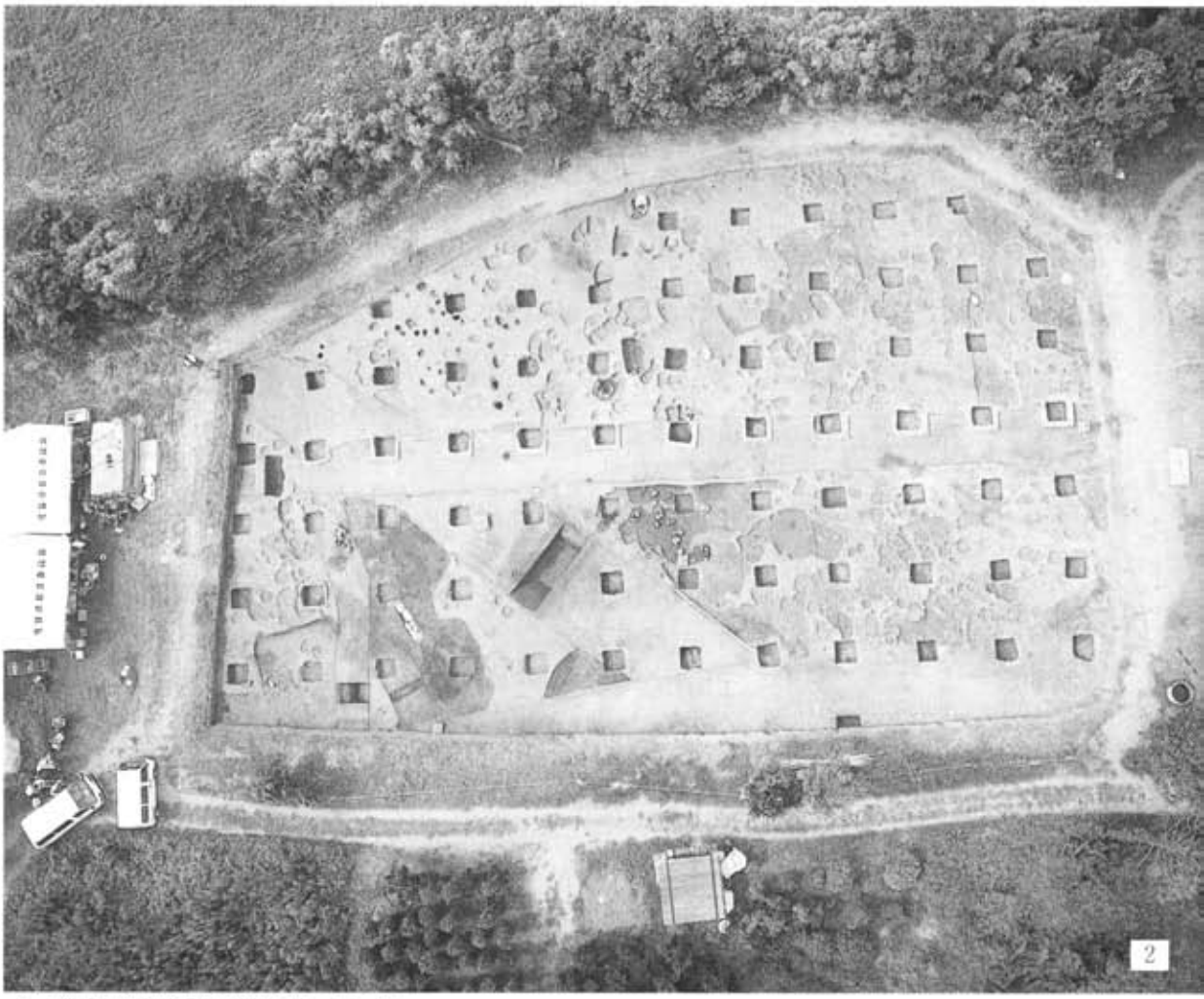
1．盛土の状況〈第148調査区、南東から〉
2．土壙墓状遺構〈第149調査区、西から〉

1．第169調査区全景〈甕棺墓群、南から〉
2．第169調査区全景〈甕棺墓群、上が南〉





1．第191調査区全景〈前期環壕と甕棺墓群，北から〉
2．第189調査区～第192調査区全景〈北から〉

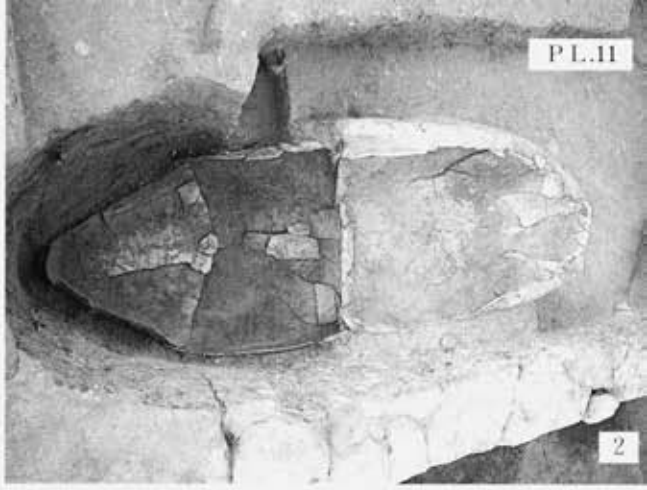


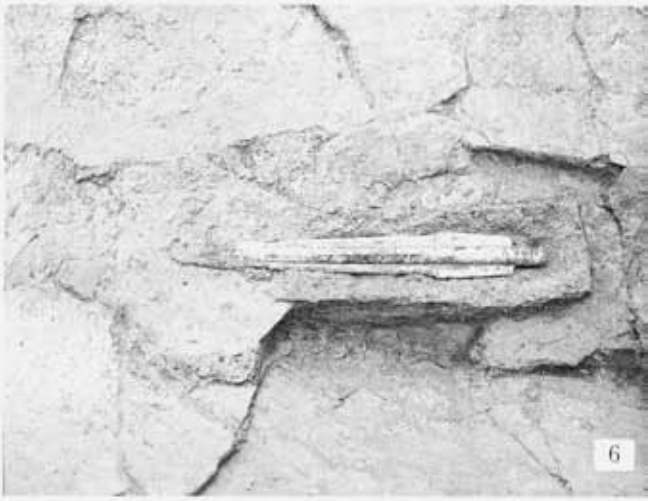
1．第188調査区全景〈谷跡など、南から〉
2．第187調査区全景〈墳跡など、上が西〉

1．第185·186調査区全景〈南から〉
2．第185·186調査区全景〈上が北〉

1．北墳丘墓南西の外環壕出入口跡全景〈第211調査区、南から〉
2．南部の外環壕出入口全景〈第221調査区、上が西〉

1．北墳丘墓跡発掘状況〈北から〉
2．北墳丘墓跡発掘状況〈南から〉



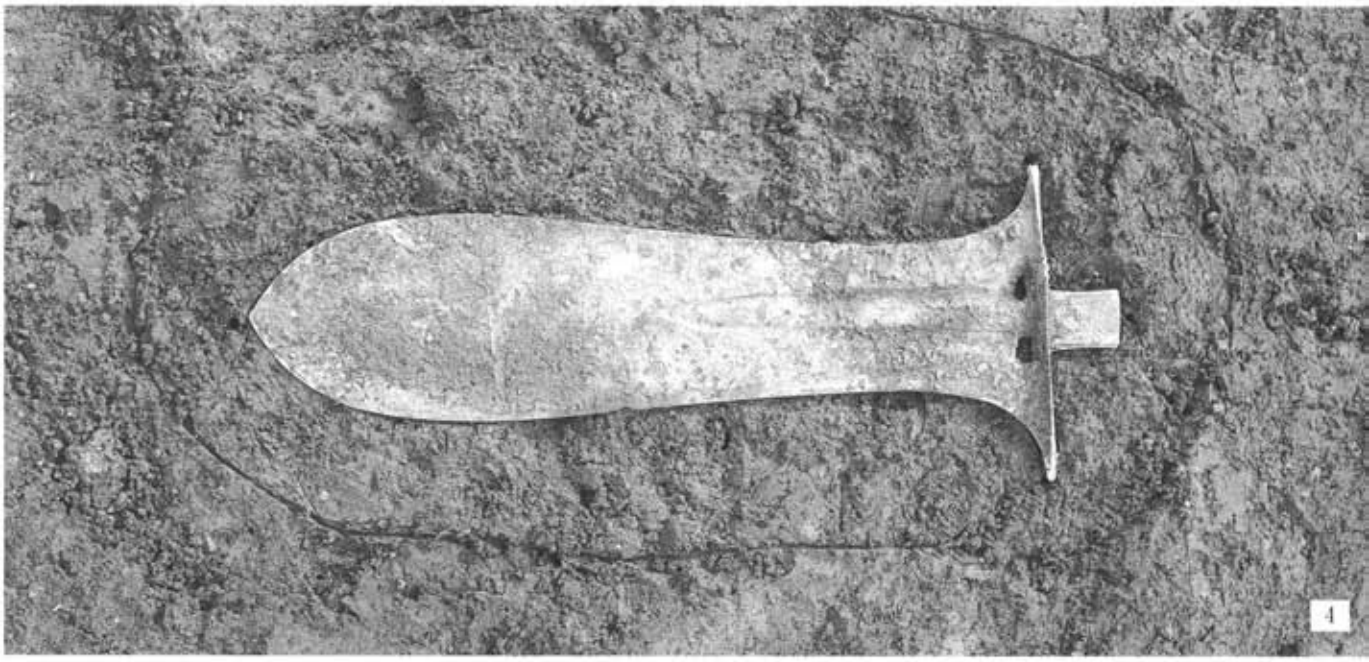


1．ＳＪ1050甕棺墓〈北から〉
2．ＳＪ1051甕棺墓〈東から〉
3．ＳＪ1051甕棺墓〈東から〉
4．ＳＪ1055甕棺墓〈北から〉
5．ＳＪ1054甕棺墓〈北から〉
6．ＳＪ1054甕棺墓銅剣出土状況
7．ＳＪ1056甕棺墓〈北から〉
8．ＳＪ1056甕棺墓銅剣出土状況

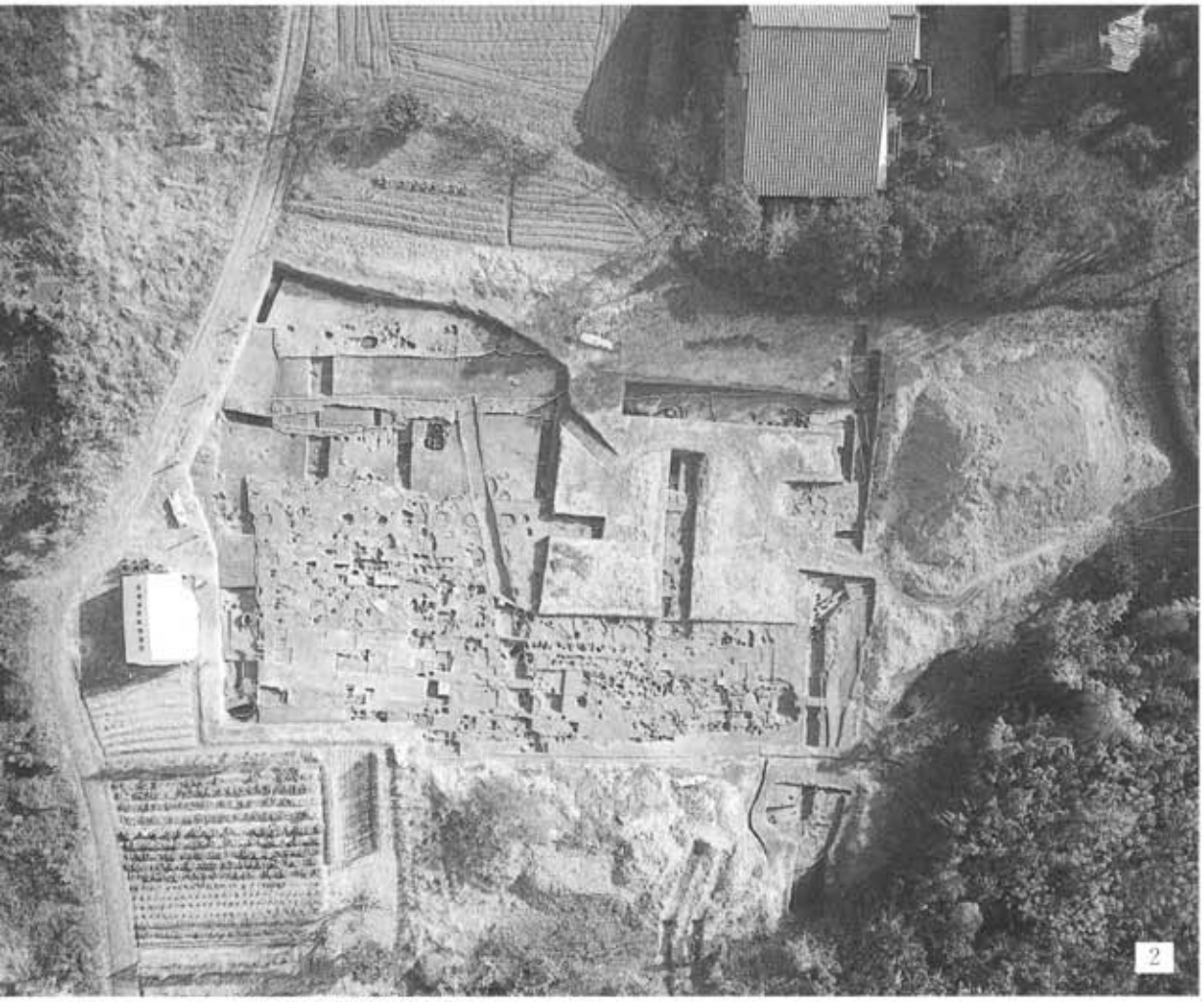
1．ＳＪ1057甕棺墓〈西から〉
2．ＳＪ1057甕棺墓〈西から〉
3．ＳＪ1057甕棺墓銅剣出土状況
4．ＳＪ1057甕棺墓出土把頭飾出土状況
5・6．北墳丘墓盛り土の状況

〈上から　SJ1009・1005・1006・1054・1056・1007・1057・1006甕棺墓出土〉

北内郭跡〈上が西〉



1．北墳丘墓跡と北内郭跡〈上が東〉
2．北内郭跡の大型掘立柱建物跡〈南から〉
3．北内郭跡の出入り口跡〈北東から〉
4 北内郭跡環壕出土の銅戈.



1．妙法寺跡発掘区全景〈北から〉
2．妙法寺跡発掘状況〈上が東〉

佐賀県文化財調査報告書第132集

吉野ケ里遺跡

－平成２年度～７年度の発掘調査の概要－

平成９年３月27日印刷
平成９年３月31日発行

編集　佐賀県教育委員会
発行　佐賀市城内一丁目１番59号
印刷　大成写真製版所
佐賀市巨勢町大字牛島字一本松353